
死神騎士の6課の日々

カンバン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神騎士の6課の日々

【Nコード】

N6737M

【作者名】

カンバン

【あらすじ】

実力者の主人公！！トータス・ヴィレン！！
しかし：彼の姿はやばかった！？
そんな彼の通り名は…

【死神騎士】

これは死神騎士が機動6課に配属される物語……

プロローグ？（前書き）

息抜きで書いていくので更新が遅いと思いますが…宜しく願い
たします！！

感想待ってます！！

プロローグ？

トータス・ヴィレン

陸士108隊に所属する一等陸尉である

25歳

魔力量 S－

陸戦 S＋ 空戦 A

近代ベルカ式及び一部ミッドチルダ式

レアスキル有りの堂々たるエースである

しかし彼はそれで有名なのではない

彼の騎士甲冑が問題なのだ

彼の上官：ゲンヤは言う

「正直言って騎士甲冑のせいでどっちが悪人かわからん：いい奴なんだが：」

同僚：ギンガは言う

「頼りになりますし、性格も普通です：でも模擬戦はあまりしたくないですね：怖いです：」

部下達は言う

「尊敬してますが：夜の出勤は勘弁してほしいです、助けた子がトラウマに：」

何故そうなるのか：それは彼の幼少期にさかのぼる

トータスの家は代々魔導士を産み出してきた家系である

そして管理局に入るため様々な訓練を行う

そして入学する前にとある管理外世界に行くのが風習となっている

その世界は希少な植物や動物：特に巨大な飛竜や蟹、猿などのモンスターがおりそれらから作られた防具を着て狩りを行う人達がいる：いわゆるモンスターハンターだ

ヴィレン家では代々その防具をバリアジャケットのデザインにする事が多い

彼の父親は青い蟹から作られる防具……ギザミシリーズのバリアジャケットを、祖父は赤き竜から作られる防具……レウスシリーズを愛用していた

だが…彼はそれでは無いものに魅せられた…魅せられてしまった
もしこれが黒き角竜や100歩譲って赤き怪鳥ならここまではならなかった

彼が惚れた防具は…貴重な布や骨から作られる防具……デスギアシ
リーズだった

黒と赤を基調にした腰巻きに鋭いブーツ、手には爪と骨の飾り、胴体と肩に大胆に骨が彩られ…フード付きであり顔面は骨の面で覆われている…まさしく死神

これに惚れたトータスはデザインを自分のデバイスに記憶させた
トータスは言った

「コレは…運命だ…」

まさしく運命であろう

彼のデバイスはアームドデバイスを流用して作られたインテリジェントデバイスだ

銘はトーメント…鎌形のインテリジェントデバイスだったのだから
士官学校の教員は言えなかった

余りに才能があるから否定するわけもいかず…彼はこのスタイルを
貫き続けた

そして…今に至る

犯罪者からは誰か止めなかったのか!?!と悲痛な叫びが届くがそんな物は知った事ではない

「ハアハア：ちくしょう！！」

1人の男が逃げている

彼は麻薬の密売人だ

ランクこそ低いが魔導士でもある

そんな彼は今脇目も振らずに逃げていた

「待て！逃がさんと言っているだろう！！」低空飛行しながら追い掛けてるのはトータスだ

例えば、なのは・高町が追い掛けているならば自爆覚悟で対抗するかも知れない

トータスもその高町に匹敵する実力者だ

だが：忘れてはいけない

彼の騎士甲冑は死神としか思えない：デスギアである

それが自分の後ろを飛んで追い掛けてくるのだ：

想像してほしい

赤黒い騎士甲冑に骨をあしらい顔面が骨のマスクで覆われている人物が飛びながら追い掛けてくるのを：

「へ：Help me！」

もう顔面は恐怖でグシャグシャである

「ちっ！トーメント！カートリッジロード！」

トータスの声に応え管制人格が応える！

『了解だ、ボス：』

：鎌だけに低く響く声

そしてトーメントの刃に赤黒い魔力光が集まる

「炎爆一閃！！」

彼のレアスキルは炎爆

炎熱に似ているが爆発を伴う物だ

その一閃が犯罪者を襲う！！

「イアアアアア！！！！！！おがあああちやあああん！！！！！！！！」

過たず命中し爆発

煙が晴れば：そこには気絶した犯罪者が……

「よしっ！確保」

ここがあのフェイト執務官や高町一等空尉ならば拍手が贈られるだろうが…

『やはり…ボスは人気がないな』

皆、引いてる

「……何処が悪いんだろ？」

その台詞を聞いた通行人は一斉に同じことを思った

「見た目だ！！見た目！！」

しかし彼は気付かない

「もっとがんばらないとな…」

『精進するぞ！ボス』

トータスは騎士甲冑を解き、トーメントはブレスレットになり2人は去っていった…

トータス・ヴィレン

通り名は…「死神騎士」

この死神騎士が間も無く発足する機動6課のメンバーとして召集される事となるのはまだ先の事…

出向…だと？（前書き）

出来ました！

次回の設定を挟んでいよいよ邂逅します

出向…だと？

「人材がたりへんのよお」

半泣きで俺に通信してきたのは八神はやてだ

新しく機動6課と言う化物部隊を作ってる最中らしいんだが…高町一等空尉やフェイト執務官…それに守護騎士まで入ってまだ足らんのか！？

つまり半端な実力者なら必要ない…て事だな…

となると…トータスだなあ、アイツ意外に資格あるし…見た目は…伏せとくか、その方が面白いしな

「いるぞ…今すぐ出せる凄い奴」

案の定向こうの雰囲気が変わった

「誰！？どんな人なん！？」

食い付いたな…フッフ

「男の一等陸尉でSランカーの騎士！…小隊指揮権限と教導官資格もある」

「マジなん！？なんか裏となないよなあ！？」安心しろ…少し！見た目が凄いだけだ

「んな訳無いだろ？俺を信用しろ、今データを送信した」すると向こうは納得したらしい

「ありがとうゲンヤさん！ほなな！！」

そうして通信が切れた

さて…アイツを呼ぶか

「やったでー！！」

ウチは思わずガッツポーズを取った

「どうしたのです？主はやて」

ウチの家族にして烈火の将シグナムが言った

「人材がどうにかなりそうなんよ…おっ！きた」

シグナムも覗きこんできた

「これは…凄い人やな…」

シグナムも同意して言う

「相当な実力者でしょう…戦ってみたいものだ」

バトルマニアのシグナムらしい感想やけど…確かにな

トータス・ヴィレン

近代ベルカ式及びミッドチルダ併用式

魔力量 S－

陸戦 S＋ 空戦 A

魔力変換資質 炎爆

小隊指揮権限保有

教導官資格保有

自動大型二輪免許保有

インテリジェントデバイス・トーメント及びアームドデバイス・エ
ンブレム所有

人気はないが凄まじい実力者でありクロノ氏が認める力を持つ

「しかし…何故これ程の実力者が目立たなかったのだ？」

シグナムも尋ねてくるが私に分かる筈もなく……

2人して頭を捻る有り様だった

「出向…ですか」

朝起きたらいきなりコレか！！

「すまん…確かお前は…シグナムとヴィータを尊敬していたな」
？いきなり何を…

「騎士として当然です：ヴォルケンの方々は古代ベルカ！！近代ベルカの騎士にとっては憧れに近いんです！！」

すると大將は笑っていった

「今度の職場：ヴォルケنز、全員いるぞ」

何だって！？

「是非とも行かせてください！」

あの方達と模擬戦が出来るのなら：騎士としての夢が叶う！！

「で：何処の部隊からの要請ですか？」

するとゲンヤの大將はニヤリと笑った

「機動6課：ロストログア関連の部隊だ」

ふむ：ロストログアか：確かに性質によれば高ランカーがいるよな

「悪いが自己でリミッターかけてくれるか？」

何だって？リミッター？

「戦力保有の原則ですか？」

どの隊も戦力保有の原則で高ランカーの保持を制限している

「俺以外に誰がいるんですか？」

すると大將はリストを見せてくれた、えーっと……は？

「何なんですか？……このあらゆる部隊にケンカ売ってるメンバーは！」

ヴォルケنزが全員要るのだから：かなりデカイ規模の筈だが：メンバーが少ない！

それにエースオブエースに閃光の魔導士、オマケにラストは夜天の主！！

……ナニコノ：オールスターズ：

「たかが：俺が入っていいもんですか？この部隊」

明らかに場違いだ

女だらけだし：

「何言ってやがる！てめえじゃねえと駄目だ！！」

そこまで言ってくれるのか！

「分かりました：行かせてください」

すると大将はニヤリと笑っていった

「そうそう：ギンガとデートしてるらしいじゃねえか…」
ギクッ！どっからバレた！？」

「……アイツとは金かかるだろ？」

何故かシミジミと言った

「……デートしてる度に財布がヤバイんですが…」
ひょっとしたら財布位にしか思われてないかも…

「このままだと局に成りかねんからな…」

……デートと言うよりメシ食いに行ってるだけだからな…
男の気配がないんだよな

「まあ：分かったな？」

ええ…出してもいいが覚悟はしろよ？ですね

「了解」

そして俺は出向すべく準備を始めた

「へえ！これが新しい奴か？」

アタシはデータを見ながらはやてに言った

「ゲンヤさんはやっぱり素敵な人やな！」

……なんかコイツ雑誌に載ってた気がするな…
何だっけ？

「ヴィータ！今日はアイス3本までOKや！」

何！？アイス3本！！

「ありがとう！はやて！！」

アタシはデータの事をすっかり忘れて冷蔵庫へ向かった

トータス・ヴィレン

捕まえて欲しくない管理局員ランキング 第1位

恐すぎる管理局員ランキング 5年連続第1位

個人検挙犯人数ランキング 第5位

お人好しランキング 第10位

彼女がこのデータを入手したのはトータスが出向した次の日だった
：

死神騎士の設定（前書き）

設定です

次回！いよいよ邂逅！！

死神騎士の設定

トータス・ヴィレン

幼少時、連れられた管理外世界でデスギアに目覚めてしまう

色々と凝った騎士甲冑にしてありヘッドは取り外し可能である

また暗闇で目の部分が赤く光る仕組み

この騎士甲冑を気に入っていてこれを変える事は考えていない
考えていないから人気が上がらないのは自分の力が足りないからと
思い込んでいる

第1デバイス トーメント

インテリジェントデバイス

男性型で低く渋い

一人称は私 呼び名はボス

鎌形デバイスである

元来アームドデバイスに比べて強度が低いがデバイスマイスターの
祖母の魔改造＋管理外世界の鍛冶技術の成果で其処らのアームドデ
バイスを遥かに越える強度に改造されている

スラッシュフォーム

基本形態 漆黒の鎌形状はモンハンのダークトーメント

万能型であり基本はこの形態で戦い抜く

ウィップフォーム

中距離対応形態であり鎌部分が小さくなり鎖鎌のようになる
バインド代わりにも使用可能

カマイタチフォーム

最強形態

スラッシュフォームと変わりはないが鎌本体の色が緑に変わり破壊力、切れ味の飛躍的増大に加え、もう1つのデバイス、エンブレムも発動する大火力殲滅フォーム
リミッター解除時、発動可能

第2デバイス エンブレム

アームドデバイス

彼の第2デバイス

余り使わないが射撃、砲撃が可能な事に加え接近戦もこなせる為に防衛戦等に使用する

形状は古龍銃槍エンブレム

ベースモード

基本形態

大型の盾に銃槍の組み合わせ

盾はプロテクションを常に超えるような構造になっている

ストライクモード

もう1つの形態

盾を棄て小型化した銃槍を装備する

支援用

専用技

フルバースト

エンブレムは砲撃にしろ、射撃にしろ3発撃ったら魔力チャージがある

フルバーストは射程が短い代わりに3発同時発射が可能

龍撃砲

最大威力砲撃

チャージに時間がかかり、冷却期間が長く、射程もそこそこにしかないが破壊力は絶大であり瞬間的破壊力なら、なのはすら上回るレベル

グラビム 熱線

祖母の飽くなき探究心と母のグラビムスへの病的な愛から生まれた物まんま熱線であるが変換資質の都合状…当たれば爆発する
トータスは射程が長いのでよく使用する

家族構成

祖父

レウスのバリアジャケットである
老いて尚現役、階級は准将

祖母

デバイスマイスター

鍛冶屋の竜人族に弟子入りした事があり変わったデバイスを作る彼女にデバイスを渡した場合、魔改造を覚悟しなければならない

父

ギザミのバリアジャケット

双剣を振るい戦う管理局員

低ランカーだが、柔よく剛を征し高ランカーを叩きのめしている
階級は2佐

母

管理外世界出身のハンター

父と出合いお互いに一目惚れし結婚

グラビモスに異様な愛がある、それ故にエンブレムに熱線システムが搭載された

騎士甲冑の種類

デスギアで貫き通しているがある機会にレジアス中将と対面した時、椅子から転げ落ちられた上に彼から懇願されいくらかバリエーションがある

しかし使われる事はない

アイルーフエイクとビストロがある

ビストロは完全に料理用

アイルーフエイクは子どもが好きかも知れないと判断し作った

趣味

読書が好き、ジャンルは歴史、ミステリー小説

こんがり肉焼きも好き

たまに陸士隊の庭でこんがり魚やこんがり肉を焼く

しかし殆どギンガに喰われる

容姿

短髪で黒、普段は立たせている

身長1m90cm、体重90?の筋肉質の体型

母の遺伝子のせいか、通常よりかなり肉体が優れている

性格

おおらかだが戦い等では気を一切抜かない
戦闘スタイルは豪快その物であり身体強化で強化した力をフルに使う
高機動戦闘は苦手だが一撃を速く重くする事でカバーしている
またベルカの騎士の誇りとして卑怯な真似はしない

備考

実はある出来事でスバルとは認識がある
酒が好きだが酔うと騎士甲冑で走り回る等の奇行をする事があり、
一度通報されている
バイクを所有していてレーサータイプとサイドカー付きの物の2台
所有

デスギア×追跡Ⅱ？（前書き）

出来ました、遂に邂逅！

なお、彼が異常に頑強なのはハンターの血を引いているからです

デスギア×追跡Ⅱ？

機動6課設立一週間前……なのは達隊長陣ははやての提案で機動6課の近くの庭で寛いでいた

「いい天気だねえ」

なのはがのんびり伸びをし

「せやなあ……」

はやてとリインは空を見上げる

各々平和に過ごしていた

1人の死神がその平和をぶち壊す事も知らず……

「6課は……あっち方面だな」

俺はのんびり歩いていた

ゲンヤの大将によれば俺は向こうで副隊長代理みたいな事をするらしい

その関係で今日初顔合わせなのだ

ただゆっくりと歩いていたその時だった

『ボス！ギンガから緊急通信だ！！』

トーメントが叫んだ

「何！？、分かった……どうしたギンガ！！」

いきなり荒事か！！

【トータスさん！ついさっき手配中の男が発見されて現在新6課方面へ逃走中！！、確保して下さい！】

「了解した！行動に移る！！」

俺は右腕の十字架のブレスレット……トーメントに呼び掛ける

「トーメント……セットアップ！！」

まっってましたとトーメントも吠える

『了解!』

赤黒い光が体を包み姿が変わる：犯罪者に断罪を突き付ける死神へと…

俺は間髪入れずに空を飛び搜索を開始した

なお飛び立つ前に何人もの人々が全力で逃げ出し、子どもが泣き、ご老人が土下座をしていた事を明記しておく

「待てコラァ!!」

俺は走った

今まで俺は管理局に捕まってもどうにかなると思ってただが…：後ろの奴には捕まってはいけない!!

有り得ねーだろ!あの姿!!

顔面ガイコツだしよ!!

しかもデバイスは鎌!!

…：待てよ、この先に機動6課と言う新しい部署がある

そこで自首しよう

後ろの奴に捕まるよりかは…ぎゃあああああ!!さっきより距離が近い!

頼む!持て!いや持ってください!!俺のスケート型デバイス!!

うちのらがのんびり寛いでいたら悲鳴が聞こえた

「何なんです!？」

リインが言う通り理由は分からへん

けどウチラは管理局員…人を守るのが仕事や

暫くして汗だくで顔が真っ青の…：手配中の犯人がこっちにきた全員が身構えたんやけど…

「自首する!だから助けて!!」

はい？何を言っとるんや？

「は…速く…って来たあ…！」

そして…こちらは絶句した

「逃がさん…」

黒光りする鎌、爪つきの籠手、尖ったブーツに血の染み込んでいそうな紅い布、胴体の骨がそれに拍車をかけ…そして顔面は…ガイコツ…あ…目が赤く光った…

『いやああああ…！！！！！！！！！！』

6課の皆は一斉に悲鳴を上げた…！！

何なん！何なん！アレは人なんか！？

「うう…ん」

シャマルは気絶したし

「は…はやて…ぢゃ…んグスツ…びええええん…！！」

リインは涙腺が崩壊しとる…！！

けど…フェイトちゃん、なのはちゃん、シグナムが一斉に動いた

「ディバイン…バスター…！！！！！！！！！！」

「紫電…一閃…！！！！！！！！！！」

「フォトン…ランサー…！！！！！！！！！！」

「え…あ、ちよっ…ぐがああああ…！！！！！！！！！！」

3人の一撃が過たず死神にクリーンヒットし、とどめに…ヴィータがアイゼンを振りかぶり…

「でえりゃああ…！！！！！！！！！！」

叩き付けた

「ぐぼお…！！！！！！！！！！」

死神は土煙の中、倒れ伏した

「……なんなの？」

シグナムはともかく皆涙目や…新手の怪人か？

その時や

『お前達！ボスに何をしているんだ！！』

死神が手を離れた鎌が喋った

「これは…デバイスか？」

シグナムが手を伸ばした時…通信が入った

【おう、はやて！トータスはソツチに行ったか？】

ゲンヤさんからや！

【いや…まだ来てないんよ…変な怪人が来ただけで】

するとゲンヤさんの感じが変わった

【…怪人？】

【そうなんよ…死神みたいでなあ…まあシグナム達がやつつけたけど…】

発言を聞いたらゲンヤさんが急に元気を無くした

【…すまん…それが…トータスだ】
は？

イマナニヲイイハリマシタカ？

【すまんが…そいつが真正銘トータスだ…死神の格好は騎士甲冑なんだが…】

…その発言はうちらを凍り付けさせるには充分やった
どうすりゃええんや！！

その時やった

「ぐむ…一体なにが…」起き上がった人は優しそうな体格のいい人
やった

うちらは念話すら使わず心が1つになった、即ち…

『申し訳ありませんでした！！！！！！！！』

トータスさんに向かって揃って土下座した

「はあ…誤解ですか」

よく犯罪者に間違われるだよな…クロノと始めて会った時いきなり
ステイン・ガブレイド・エクスキューションシフトを食らった事があるしな、その事を話したらフェイト執務官が崩れ落ち、なのはさん達は苦笑いをしていた

…そんなに気にする事か？

「まあ…気を取り直して…ようこそ！機動6課へ！！」

はやてさんが申し訳なさそうに笑っていた

「はっ！トータス・ヴィレン！頑張らせて頂きます！！」

俺は微笑みながら敬礼した

こうして俺は機動6課に赴任した

ここからまた新しい日々が続くのだろうか…

死神、鬼ごっこをする（前書き）

出来ました！

どうぞお楽しみ下さい

感想待っております

死神、鬼ごっこをする

今日から私、スバル・ナカジマは親友ティアナ・ランスターと共に機動6課に配属された

憧れのなのはさんと一緒に仕事ができる！

そう思って前にいるなのはさんを見ようとした時……何故かあの人
がいた

「戦闘統括官のトータス・ヴィレンだ、時々だが君達の教導もする
……よろしく頼む」

……以前ギン姉と一緒によくデートしてる人で……ギン姉とお父さ
んとで旅行に行くとき、自分を含め3人分の仕事をやってくれた人だ
……強いのかな？ここに派遣されたのは……

戦闘統括官……これが機動6課での役職だ

6課の分隊はスターズとライトニングの2つがある

戦闘統括官はその2つの分隊の内、どちらにも所属せず、フレキシ
ブルに援護したり、単独行動を取ったりと自由度が高い
教導は補助がメインになる

それらを鑑みリミッターはAAだ、但しレジアス中将が頼み込んだ
のか俺だけはリミッター解除権限がはやて以外にレジアス中将にも
ある

本局と地上本部は対立してるから地上部隊の俺のリミッターだけで
も確保したかったんだろう

さて……それはさておき、いきなり訓練か……

気合い入れるかね

「訓練の前に鬼ごっこをします！」

鬼ごっこはアホらしいと思われがちだけど違うらしい

アタシ、ティアナ・ランスターはジツと隣の親友……スバルを見た

あ！ニヤニヤ笑ってる

なのはさんが少し同情？ 気味に言った

「んじゃ…始めるぞ!!」

エリオとキヤロを含め私達は返事をした

『セツトアップ!!』

【うぎゃあああああ！！！！！】

何！なんなの！！この人本当に管理局員！？

スバルは腰を抜かしているし！

キャロの小さなドラゴン……フリードは怯えながらも……

号泣するキャロを必死に守り

27

目を真っ赤にして自己暗示をかけているエリオ：

「どうかしたか？」

トータスさん！貴方のバリアジャケットのせいです！！

一斉に叫びたくなった

「まあ：いいか：死神騎士：トータス・ヴィレン、行くぞ！！」

こうして半強制的に地獄の鬼ごっこが始まった

僕、エリオは只走った、ソニックムーブを駆使して走り回ったけど：後ろを振り向いたら：

「良い反応だが：まだまだだ！」

ガイコツ仮面の死神がどんどん距離を詰めていた

「うわああああああ！！」

何！速い！！助けてフェイトさん！

「エリオ、アウトオオオ！」

ガシッと捕まれた

「うわああああああ！！」

私：キャロはフリードと一緒に隠れながら走っていました

シュミレーターのお蔭でビルの間に隠れながら移動しています

ホッと一息ついた時

ドッシャアアアアン！！

「逃がしはせん！」

ビルの壁をぶち抜いてトータスさんが現れました

「は：ふあ：」

私は腰を抜かして動けません！食べられるの！？

「キュ~~~~~」

フリードは目を回して倒れてます

「キャロ、アウト」

ガシッと肩を捕まりました：

アタシはビルの隙間を通り相手を混乱させて逃げる作戦だった……
けど……

「まああてええええ!!」

姿勢を崩さすおぞましい速さでトータスさんは走ってくる
走る度に紅い布がはためき時々見える顔面は表情のないガイコツ……
お化け屋敷より恐い!!

「もう……いやああああ!!!!」

ああ……空の彼方にお兄ちゃんが見える……

「ティアナ、アウトオオオ!!」

「ウイングロード!!」

私達は必死に逃げた

けど残っているのは私だけ!

ウイングロードを使いながら空を駆ける私だけ……

「ソニックムーブ!!」

『よし!ソニックムーブ!』

一気に加速してきて間合いを詰めてくる!

ギン姉!この人とデートなんかして大丈夫だったの!?

「獲ったああああ!!!!」

あ……追い付かれた……

「助けてええええ!!」

「全員どうだった?」

聞くまでもない、皆ブルブル震えている

何しろ彼が捕まえた犯罪者は再犯率が0なのだ

余りの恐怖で悪事を働く気に慣れないのだ

「すまん！皆大丈夫か！？」

これが極悪な顔なら駄目だろう

だが騎士甲冑の下にあるのは誰よりも優しい男である

その人柄や確かな能力は数多くの信頼を集めている

何しろ本局からスカウトが来るほどだ

「はやてちゃん…良い人呼んできたよね…」

そう…甲冑さえなければ…

おまけ

訓練終了後…自販機エリアにて

「ん？新製品…ランダム缶だと」

面白そうだ、どれ硬貨を入れて…と

ガコンッ

「……お茶？」

何の変わりもないが…飲むか…ゴクッ…ゴ！？

「ブハアァ！！何だコリャ？甘過ぎる！！」

パッケージを見ると…

リンディ監修！

甘さ大増量紅茶！アースラ！！

「……………売れるのか？」

少なくとも俺は買わないぞ

死神と友人達（前書き）

出来ました！

次回は誰かと模擬戦です

死神と友人達

トータスの朝は早い

毎朝6時に起きる様にしている

「さて、シャワーでも浴びるか…」

のんびりシャワーを浴びて着替えて食事をしに食堂へ行く
食堂へ行けば……

「「おはようございます!!」」

スバルとエリオがバクバク食っていた

「おう、おはよう!」

俺は朝から大体2人前を平らげるのだが朝からコイツらは10人前は食べている

……ギンガもアレくらい食べるからデートの代金が高いんだよね……
まあ笑ってくれるからいいけど……

今日は教導はせずにデスクワークだ
暫くやっていたら通信が入った

【もしもし?】

すると聞き慣れた声がした

【もしもし!?! トータスカ!?!】

この声は……

【ああ…バツハか】

【シャツハだ! タートル!!】

友人のシスターシャツハからだ

相変わらず通信の度にこんな掛け合いになる

【で…どうしたんだシャツハ?】

コイツが通信してくるのは余りないんだが……

【……ロツサが……】

……はあ……

【OK：把握した】

アイツまた逃げ出しゃがったか…

【多分アリバイつくる為にお前を頼るだろう】

【分かった…報告しよう】

いい加減に学習しろよアイツ…

さて…書類するか

支出表…：食費が自棄に多いな…あの2人か

『ボス、通信だ』

トーメントが知らせてきた

【おう、ありがとう…こちらはトータスです】

すると聞き慣れた軽薄っぽい声がした

【や！ロツサだけど…】

来やがったか…

【ああロツサ…で何のようだ？】

まあ理由は1つだろうがな…

【いいかい？僕は今本局にいるからね！……ちよつと本部に遊びに行くだけだから！…】

【おう…分かった、じゃあな】

通信を切りシャッハへ繋げる

【シャッハ？俺だ…ロツサは地上本部に遊びに行ったらしいぞ】
すると喜び勇んでいった

【いや、助かる…今度オススメの料理店を教えよう】

【ふ…じゃあな】

「頑張れ…ロツサ…」

遠くにいる友人を思い出しつつキーボードを叩き続けた

昼休みに食堂へ行くと…有り得ないくらいカレーを平らげる2人と普通に食べる2人がいた

「あ…トータスさん！隣どうぞ！」

スバルが手招きするので御相伴に預かる

「んじゃ失礼して…」

俺もカレー2人前を取ってきて座った

「トータスさんはギン姉と一緒に働いてるんですね？」

スバルが目キラキラさせながら言った

「ん？まあ…優秀だぞ」

そう言った時、スバルの目がキラーンと光った

「……毎月1回ご飯一緒に食べに行ってるんですねえ」

「……………何か嫌な予感が

「……それがどうした？」

勘づかれたか……？

スバルは驚く程慈愛に満ちた笑顔で言った

「いやギン姉をヨロシクね…トータスさん」

エリオとキャロは首を捻っているが…ティアナは気付いたらしい…

顔が真っ赤だ

「分かった……」

さて空気がビミョーになったな……そうだ

「お前ら…もし出勤があって活躍出来たら…メシをおごってやろう」

2人の目が輝いた

「「ホントですか!？」」

「ああホントだ！」

……俺がこの発言を後悔するのはもう少し先の事だ

午後も引き続きデスクワークをしていた……が

『ボス…通信だ』

やけに通信が多いな

【もしもし：トータスです】

すると今度は懐かしい声がした

【やぁ！元気かいトータス】

少し向こうの声が掠れている

【ユーノ：それは俺の台詞だ】

ユーノは最近、俺の母親の故郷の遺跡に行く事が多くその護衛で仲良くなっている

ロツサは向こうから話し掛けて仲良くなりシャツハはその関係で仲良くなった

【実は：火竜の紅玉持ってない？】

何言い出すんだコイツ？

【……どうした？】

コイツは宝石に興味はない筈だが

【いや：なのはにね：加工して、プレゼントにしようかと】
なのはがらみか：

【ああ、あるから次の機会に贈る：実る事を祈っているよ】

……よくよく考えたら友人達って結構有名人なんだよな

そんな奴等と友人とは：自分でも信じれんな

こうして俺の1日が終わった

おまけ

「あ……あ……いや……その」

僕は今行き止まりにいる

「全く：手間を掛けさせて……」

表情を変えずにシャツハが迫る

「アリバイは……完璧だったはず……！」

そう！完璧なアリバイの筈だ！

「……トータスに感謝しよう……」

そっちかあああああ！！

「トータスのバカアアア！！！！！」

こうして僕は……捕まった

くそっ……今度トータスに文句言ってやる！！

死神と模擬戦（前書き）

出来ました！

後書きにアンケートがあります

死神と模擬戦

「フォワードメンバー集合！今日は4対1の模擬戦するよ」
なのはさんが言う

皆は模擬戦に気合いを入れている
私のリボルバーナックルも出番が来た！

「相手は誰だろうね」

皆で言い合いながらシミュレーションルームに入った時：

「俺が相手だぞ：準備万端か？」

トータスさんが構えてた……

「ホント：ですか？」

キャロが震えながら言った

「ああそうだ：安心しろ：ハンデで鎌は使わん……エンブレム・セ
ットアップ」

『セットアップ』

機械的な受け答えの後：鬼ごっこの時の騎士甲冑に加え左手に巨大
な盾と右手に銀色の巨大な槍が握られていた

「ディフェンス型：か」

ティアナがなにやらブツブツ言ってるけど：なんか嫌な予感がする

「騎士甲冑の3分の2破損か気絶だ：来い！」

そして模擬戦が始まった

「いや〜どこまで食い下がれるかなあ……」

隊長陣の近くでウチは呟いた

「ならば：私達がやれば良かったのでは？」

フォワードメンバーと新しい仲間のトータスさん：

「それもええけど：どっちもただじゃあすまへんからなあ……」

実力が未知数とは言え管理局の数少ないSランカー：

シグナムとぶつかり合ったらとんでもない事になるからなあ：

画面ではエリオが槍型デバイスを操りトータスさんにうち掛かっている

「……トータスさんはやはり強いね」

フェイトちゃんがポツリと言った

大抵あだ名がつく魔導士は強い

なのはちゃんがエースオブエース、管理局の白い悪魔と呼ばれる様にトータスさんにも呼び名がある

1つは死神騎士、そしてもう1つは：

「死神戦車：なあ」

大盾と槍を持っている時のあだ名らしんやけど：

「ふんっ！」

エリオの繰り出す突きを盾で受け止め続ける

他の3人も時々攻撃してくるから質が悪い

だが：コレは唯の槍じゃない！！

「フルバースト！」

そう叫んだ時：槍に隠された銃口から魔力弾3つが発射された

「うわああああ！！！」

エリオはモロにくらい吹き飛んでいった

「でええええりやああああ！！！！！」スバルが突進してくるが盾を上手にあわせて……！

「ソニック・ストライク！！！」

『ソニック・ストライク』

盾を魔力で覆いソニック・ムーブで突進するソニック・ストライクではね飛ばした

「ちょっ…：そんなあああ！」

スバルはポーンツと飛んでいった

「さて…次はあっちだな」

ティアナがキャロの強化魔法で強化された魔力弾を隠れながら撃ってくるが…大盾で防いでいく

「こっちからいくぞ…カートリッジロード…グラビーム…!!!」

『カートリッジロード』

ガシユンとカートリッジが排出され銃口に赤い魔力が溜まっていき…極太の熱線が放たれた

「薙ぎ払いだあああ!!!」

なのはより射程は短いが充分な射程のグラビームで当たったビルを爆発させながら薙ぎ払っていく

「「きゃああああ!!!」」

よしっ見つけた!

「ソニック・ストライク!!!」

『ソニック・ストライク』

そのまま2人の元に目を光らせながら突進する

「きゃああ…ガクッ」

キャロは直撃する前に気絶したのでティアナに予先を変える

「いや!!! ガイコツはいやあああ!!!」

「聞こえんなあああ!!!」

普段は優しくても模擬戦では手は抜かない…それが俺の心情だ!

「……シャマル…メンタルケアよろしく…」

……手加減抜きでお願いしたけど…怖すぎや

何なんソニック・ストライクって…ガイコツが盾構えて高速で轢き

にくるなんて恐ろしすぎるわ…

「砲撃も出来るんだ…」

なのはちゃん…感心しとる場合ちゃうで

「本来は鎌でしたが…あの銃槍と盾捌きもかなりの物ですよ」

シグナムが専門家らしく言う

「死神戦車…」

言い得て妙やな…あの騎士甲冑のせいで怖さが5倍増や……リインとユニゾンしたらどうなるやろ…

おまけ

模擬戦後

「ん？親父からデータ通信だ」

なにに…母さんの新しい装備の男性用データを送る…か

『ボス…ダウンロードが終わった、展開できるぞ』

まあ試しにやってみるか

「セットアップ！」

白いブーツにズボン

裸に白ジャケットに長い手袋

そして角付きの馬型マスク……

「……………」

『キリン装備だそうだ…ボス？』

アキラカニヘンタイデス

「何なんだ…」

その時だった

「ヤッホー！漫画貸して下さ〜い！」

スバルが入ってきた

「へ……あ……いや…」

う……うおおおおお！！

「俺を見ないで！見るなああああああ！！！！！！」
……口止め料としてドーナッツで手を打った
親父……いつかぼこす

死神と模擬戦（後書き）

主人公の射撃技を募集します

条件はモンハンに關係有ることです

なおネタバレになりますますがエンブレムは物語の途中で壊れます

なので皆さんのお好きなガンランスをついでに書いて頂けたら幸いです

死神と竜騎士（前書き）

出来ました！

感想まってます

あとガンランスの案も！！

死神と竜騎士

「……………トータスさん？」

僕、エリオは偶々歩いていた

今日は休日…明日にはなのはさんと模擬戦がある

明日の為に休みになったので自販機でジュースを買いに行こうとしたら…私服のトータスさんを見つけた

「ん、エリオか……どうしたんだ？」

黒のジーンズに白の長袖Tシャツの上に薄手のジャケットを着ていた
なんというか…普通だった

騎士甲冑がアレだから…私服も…その酷いって思ったけど普通だった

「今日は御休みなんです…だからジュースを買いに自販機へ……」
するとふむ…と考え込んでトータスさんは言った

「エリオ、暇なら俺と一緒に出るか？」

……………お出掛けかあ…

時々には…いいかな

「お願いします」

僕はぺコリと頭を下げた

「何ですか…これ」

エリオが目を輝かせている

「ああ、俺のバイクだ」

黒のレーサーバイクに跨がりエリオにヘルメットを被せエンジンを
ふかす

「よし…行くか!!」

「はい!!」

バイクは勢いよく走り出した!! クラナガン：ここ最大の歓楽街である

公共駐車場にバイクを停めた俺はエリオを連れ歩き出した

「……広いですね」

エリオがキョロキョロしている

「まあな：さてゲーセンでも行くかエリオ！」

ゲーセンと聞いてエリオがはしゃいだ

「ゲームセンター!?!? 行きましょう!」

こちら辺は年相応だね：

「焦るな、焦るな：逃げないよ」

俺はエリオの手を引いてゲーセンへ歩き出した

「やった! 取れましたよ!!」

エリオは鬼だった

UFOキャッチャーで大フィーバー起こしてる!

「おお：また取った!」

ギャラリーが集まり出した良い事だ

たまにははっちゃけんとな

「変わった料理ですね…」

今俺は最近ギンガを連れていったわんこそばと言う地球の料理を出す店にいる

「好きなだけ食って良いぞ」

俺自身はかけうどんを注文する

「それじゃ：いただきます!」

つるつと食べてはドンドン食べていくエリオ

速いねえ：この体のどこに入るんだ?

「美味しかった…」

エリオは前人未到の300杯を突破した所で終了した
食べ放題なので俺自身の財布はそんなに痛まない
いつの間にかエリオと手を繋いで歩いていた
歳の離れた兄弟か従弟に見えるかもな
その時だった

遠くから微かに悲鳴が聞こえた

「!……エリオ行くぞ!!」

「はい! トータスさん!!」

悲鳴がした方へ走ると…ビルが火事か!!

「トータス!？」

懐かしい声がして振り向くと…大将がいた

「大将! これは一体!？」

すると近くに控えてたギンガが答えた

「質量兵器による爆弾テロです…主犯は捕まえましたが…未だ爆弾
があるらしく女性が救助できません」

………よっしゃ!

「俺に任せろ! トーメント!! セットアップ!!」

『セットアップ!!』

赤黒い閃光と共に敵を引き裂く鋭利な鎌をもった死神がクラナガン
の大地に出現した

「突撃開始!」

俺はシールドを張りながら業火の中に突っ込んでいった

「トータスが突っ込んでいったぞ!」

「あいつが? じゃあなんとかなるな!!」

「取り敢えずマスコミ下がらせろ！」

エリオはその発言を聞いた

「あんなに信頼されてるんだ」

ぼつりと出した言葉にトータスさんの大将が反応した

「たりめえよ：アイツは真っ直ぐに可能性があるならどんな博打でもやる！おまけに自分の命をベットしても飄々と突破しやがる：覚えとけ、アイツは人の命がかかった時は：敵無しだぜ」

そう言うてにつこり笑った大将：でも

「でも死神ですよ」

いきなりテンションが下がった

「ああ：そうだ：女心も分からないみたいだしな：いつになったらギンガを任せられるのか……」

ふうつと溜め息を吐いた時

ズガアァン！！！！

とビルの壁が吹き飛んだ

そして燃え盛る炎をバックにトータスさんが女性をお姫様抱っこで連れてきた

だけど：回りは腰がひけてる

想像してみて：赤々とした炎をバックに女性を抱え鎌を背中に背負ってゆっくりとこちらへ歩き出す死神の姿を……

もう死神を越えて魔王の域です

「なんだかんだで楽しかったな」

俺はエリオをバイクに乗せながら言った

「ええ！とっても！！」

そりゃ良かった：安心したよ

「頑張れよ、小さな騎士？」

そうからかうとエリオも言った

「ちゃんと追い抜きますよ、大きな騎士さん？」

いうじゃないかエリオ

「ハハハ！やれるもんならやってみろ！」

「言いましたね！絶対に抜かします！！」

後ろで笑うエリオを見ながら次世代は確実に育っている事をしつた
でもなエリオ、まだまだ抜かさんよ？

まあ…その時を楽しみにしようか…俺はそのままアクセルをかけバ
イクを出した

死神出陣（前書き）

ファーストアラートですが…何故か戦闘が少ないです
すいません

感想があればどうぞ！

死神出陣

さて俺は今へりにいる

何故かと言うとリニアールにガジェットが襲撃してきたのだ

やれやれしょっぱなの任務がこれか：

何だろうな：母さんと一緒にいったドドブランゴ討伐を思い出したな
遊びに行こう！！であれだったからな：

ん：キャラが震えてるな

やはり緊張するのか：先輩としてアドバイスするかね

「なあキャラ：緊張するのは分かるが何があるうと俺達が護るから、
安心して魔法を使いなさい：キャラの魔法は倒すだけの俺の魔法と
違って皆を護れる魔法なんだからな！」

笑って頭を撫でる

キャラも少し強ばりがとけた

「そろそろポイントですよ！」

ヴァイスの声を聞いた時上空にガジェットがウヨウヨ居た

「……俺はエリオ達の道を切り開くが構わんな？」

なのははしっかりと頷いた

「んじゃ：護衛クエスト開始と行くかな！」

騎士は背中を見せない

決して引かない

「お前ら！しっかりついてこい！！安心しろ：なのはの訓練受けて
るんなら大丈夫だ！！……トーメントセットアップ！！」

『セットアップ！……狩りの始まりだ！！』

お馴染みの騎士甲冑になりへりから飛び出す

鎌を携えガジェット目掛け飛行する

「新人達の邪魔はさせん！！」

全部纏めてスクラップにしてやろう！！

一方ヘリのメンバーは…

「飛べるとは聞いていたけど…」

全員の顔がひきつってる

当たり前だ、陸上であんなに恐ろしいのに飛んだら更に恐ろしい…
「なのはさくん…この任務…フェイトさんは飛んで合流するって言
ってましたよね」

全員が硬直した

つまりフェイトはアレを無条件で見る羽目になるのだ

「イヤアアアア!!!!!!」

……もう遅かったらしい

フェイトは至近距離で見てしまった

ガジェットをぶった斬り空を駆けるトータスを

走ったり、大地にどっしりと構えている時とは全く違う恐怖感…!
トータスは年間検挙率や任務回数、そして実績等はフェイトやはや
て達に劣る

しかし…再犯率と言う点と抑止力と言う点に関しては上回っている
一概に犯罪をしようとする脳裏に鎌を振り下ろさんとするトータ
スの姿が思い浮かび出来なくなる

彼が赴任してから僅かだがクラナガンの犯罪数が若干減った程だ
そんな恐怖の権化がガジェットを斬り、殴り飛ばし、デバイスを変
えての砲撃で薙ぎ払う……死神ではなく魔人でしょ!?!とフェイト
は思った

なのはは離れたエリアで砲撃している

「フェイト! 敵を一ヶ所に纏めてくれ!!!」

トータスの叫びにフェイトは反応し、魔導師最速と謳われる速度で
敵を纏め出す

トータスはカートリッジをロードしエンブレムに魔力を溜める

赤黒い魔力光が銃口からまるでバーナーの様に噴出する

自身の限界一杯まで集束した魔力を一気に飽和させ解き放つトータスの最大砲撃！

「良いぞフェイト！…龍撃砲…発射あ！！」

それは砲撃と言うには余りにチャージが長く、リーチも短い、オマケに再チャージも長い

だが瞬間的な破壊力なのはすら上回っているトータスの最大威力砲撃 龍撃砲！！

ドゴオオオンと爆音を上げ大量のガジェットを撃破した

「……………凄い…」

ふう…疲れたな

薙ぎ払うのも楽しいが斬る方が好きなんだが…

その時だった

リニア近くに化物みたいな龍がいた

「ミラルーツ？そんな馬鹿な…」

頭に浮かんだのは俺にとって馴染み深い管理外世界の伝説に祖の龍だった

『落ちて着けマスター…アレはフリードだろう』……………そりゃそうか

ミラルーツは一部の管理局員に生けるロストログアと呼ばれている奴が本気で暴れた場合…それだけで次元震が起きかねないという怪物である

……それを4人がかりとはぶち倒した母さんは化物だと思う

しかも何故か笛で……

ミラルーツを凍らせる為にデュランダル片手にやって来たクロノと案内人として招集された俺は母さんが笛でミラルーツを殴り倒し止めを差したのを見てしまった

その時の記録映像はお蔵入りになる程だ

そんな物呼び出せる時点でSSS+は確定だ

しかし…これがキャロの力か

いい魔法だな

「良い子達じゃないか：大切にしろよ？」

そう冗談混じりにフェイトに笑ったらフェイトはいきなり急降下していった！

『マスター！フェイトから魔力反応がないぞ！！』

は？貧血で意識が無くなったか！？

「どちくしょおおおお！！！！」

慌てて急降下して抱き上げる

疲れてるのか：ハウレン草を喰え、ハウレン草を

しかしバルディッシュは記録していた

それはデバイスであるバルディッシュが深くフェイトに同情する物だった

トータスは意外に凝り性で騎士甲冑にも気を遣っている

……つまり骨の面だと表情が分からないので普段は変化なしだが自分の意思で表情が変わるようプログラミングしたのだ

つまりフェイトに笑いかけた為に笑いのプログラムが発動し口角を吊り上げた骨の面になった……

女子供は泣き叫ぶだろうレベルである

よくあるニコポとかではなく最早ニコデスである

勿論ニコツとしたらデスの略である

宿舎に帰還した後フェイトがその恐ろしさをバルディッシュの記録

映像と共にはやて達に語った所リイン、シャルは失神しはやて、

ヴィータ、なのははガタガタ震えシグナムは引き吊った

そしてこの映像はフォワードメンバーには刺激が強すぎるとして封印される事が決定された：

トータス自身にお咎めはないがリインとシャルが近づくだけで逃げ出す様になったのでトータスは酷く悩むがそれが騎士甲冑のせい

だ^がと考える事は無かつた：

死神、海鳴へ！（前書き）

出来ました！

感想あれば書いてください！

今日からオマケでヴィレン一家の話を書きます

ヴィレン一家は父親を除きみんなどこか抜けています

みんなどこか残念です

死神、海鳴へ！

今、俺は海鳴にいる

何故かと言うと出張任務でロストログアの反応が出たからだ

で俺は皆より先の便で到着し待ち合わせ場所の翠屋に来たんだが：

何故か恭也と言う男性の双剣同士の稽古相手になっている：

「では行かせてもらうぞ！！」

何故だ！なのはの友人と言っただけだぞ！！

シスコン？シスコンなのか！？

というか：魔導師でないのか！？速すぎるぞ！！

魔力で強化して反応が精一杯！？：エースオブエースであり管理局の白い悪魔の家族は化物か！？

「ふっ！付いてこれるか！？」

勘弁してくれ！

トータスは双剣が使えない訳ではない

しかし対人戦に向いているとはいえない

彼の双剣術はハンターである母と共に飛竜を狩る時に使う：様は対大型獣戦に向いているのだ

……しかし恭也の動きが化物染みているためどうにか対応出来ている

「俺は只の友人だああああ！！」

踏み込みから切り払いに繋げ乱舞を叩き込む

「そんな事言っただけで狙っているんだろおおお！！」

受け流し、乱舞を防ぎきる恭也！

「話を聞けやああああ！！」

「なのはに近付くなああああ！！」

4つの角ならぬ4つの木刀はぶつかり合う
1人はこの悲惨な勘違いを止めたいがゆえに
1人は愛しの妹に近づく虫を払うために

「ただい…ま？」

なのはさん達と一緒に翠屋に来た時先に来ている筈のトータスさんがいない

「どうしたんだろうね、ティア」

ティアに訪ねても首を振るだけ…その時だった

「ぐおおおお！！」

とんでもない悲鳴が聞こえた！

「道場の方！？まさか！！」

走り出したなのはさんについて走り出すと…そこには…

「違うって…言ってるんでしょうが…ガクッ」

吹き飛んで道場の壁にめり込んで気絶しているトータスさんと…

「ふうっ…嘘を付くな…」

息を乱している男の人…

「お兄ちゃん…？」

なのはさんが震えながら訪ねる

「ああ…なのはか…あんな男と付き合うなよ？」

あわれ…トータスさん…勘違いであんな目に…

「お兄ちゃん…頭冷やそっか…？」

…ここからは何も言いたくない

只、フェイトさんがエリオとキャロが目をふさいだタイミングがギリギリ間に合ったと言うくらいで…

「申し訳無い！！」

お兄ちゃんは今トータスさんの前で土下座している

「まあ：分かってくれたらいい、貴方みたいな友人がいるからな」

……間違いなくその友人はクロノ君だよな：多分シスコンだもん

「しかし：恭也相手にあそこまでもたせて尚且つ今ピンピンしてるのは信じられないな：」

お父さんが驚いた様に言う

お父さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも皆、剣の達人だ

トータスさんはお兄ちゃん相手に普段使わない双剣で随分粘ったらしい

オマケに負けた後慌てて飛んできたお父さん達の前であっさりと起き上がったのは相当凄いらしい

「……1つ聞きたいんだが：なんでそんなに頑健なんだ？」

お兄ちゃんが皆が知りたいであろう質問を言った

「……血筋だ」

血筋……ただそれだけで頑健になるなんて：

トータスさん……ホントに人間かな？

その日の夕方ははやて達の親友のアリサさんとすずかさんがいた

「おいしいー！」

バカみたいに飯をくうスバル：

反対にツツコミを入れるランスター

「野菜も食べろ、野菜も！！直ぐに食べなさい！」

そんな声を聞きながら取り敢えず俺は自宅から持ってきた肉を焼く事にした

「あれ？トータスさん何してるん？」

はやてが訪ねる

「こんがり肉Gを焼いている所だ」

全員頭に？が浮かんでいる

……このタイミングだ!!

『「ウルトラ上手に焼きましたああああ!!」
肉を振り上げる』

「…なかなか今変な声が…」

「うん…」

「ニヤハハハ…聞こえたね…」

焼けた肉をスバルに渡す

「ほら、食べなさい」

スバルはもうよだれが…

「ありがとうございます!!じゃあ…いっただきまーす!!」
かぶり付いた途端一気に食べていく

「おいしいー!肉の油がジューシーでホントに美味しい!!」

はやてが不思議そうに訪ねてきた

「トータスさん…あの肉何なん？」

…言っているのかなあ？

まあいいか

「アプトノスと言う俺が以前行っていた管理外世界に棲息する食用
の草食竜の一種だが…どうかしたか？」

世界が止まった

「竜の肉やてええええ!!」

「あり得ないの!!あり得ないの!!」

「へへー私凄い肉食べちゃったあー!」

「トータスさん…つくづく非常識な人ですね…」

「と言うかさ…竜が草食だからって…食用はあり得ねえ…」

そんなに非常識かな？

オマケ

ガルバート・ヴィレン准将

空戦Sランク

レアスキル 凍結

トータスの祖父にして生涯現役を貫く猛者である
管理局の中でも有名な騎士である

ヴィレン家は代々優秀な騎士を輩出している

孫：トータスの残念な所は騎士甲冑が怖い所だ

祖父：ガルバートの残念な所はデバイスだ

紅き鎧を身に纏い彼は今日も犯罪者を叩き斬る

「懲りん奴等じゃな！！いくぞ！本マグロ！！」

振り上げるデバイスは……デバイスと言うには余りに大きく、分厚く、奇抜……そして何よりも魚だった

『了解しました、マスター』

冷気が尻尾に集まる

「氷結一閃！」

蒼き衝撃波が犯罪者を凍らせる

「終わった、終わった…疲れるわい」
紅き鎧が夕日に映え…背中の巨大カジキマグロが激しく空気をぶち
壊していた

死神と風呂（前書き）

出来ました！

感想あればどうぞ！

ガンランスの案もまだまだ募集中です！！

死神と風呂

さて、飯を食べ終わった後銭湯：公共の入浴施設に行くことになった
しっかし：見事に女ばっかだな

男2人か：明らかにバランスがおかしい団体だろう：

さてはやてがチケットを人数分買ったみたいだし：

「んじゃ：行くかい？ エリオ」

そうやって話し掛けたとき：エリオが涙目で女湯に引きずり込まれ
かけていた

「てっおい！ 何やってんだ！？ エリオは男だろう！」

するとキャロがスツと看板を指す

「……女湯は11歳以下の男の子も入浴可能……？」

……なんてルールだ

「だからエリオも入ろうよ」

フェイト：自重しろ

よく見ろ、エリオ嫌がってんだろ？

しょうがない：

「エリオも立派な騎士だからな、1人前の男が女湯に入るのは不味
いだろ」

ヒョイツと片手でエリオを掴み俵担ぎをして強引に連れていく事に
した

「う~~~~~っ：」

フェイト？ 後ろから殺気を出すな

入りづらいだろうが

トータスさんのお陰でなんとか男風呂に来た
そして服を脱いでいた時、フツとトータスさんを見た

全身ガツチリとした筋肉に覆われていて、いかにも強そうだ…

だけど…左肩に挟られた様な大きな傷跡があった

しかも貫通しているみたいだ…

「ん？ああ、これか…馴染みの管理外世界の原住動物……キリンと
いうんだが…ソイツに襲われたのさ」

……キリンは背の高い動物だったと思うんだけど…

「けっこう俺も無茶したからな…」

そう言いながら先に行ってしまった

……でもキリンは…大人しい動物の筈だったけど…

入った銭湯はとても広かった

ポツケ村の温泉と良い勝負だ

「はぁっ！」

湯船に浸かると疲れが取れる気がする…

「気持ち良いです…」

エリオもほうっと一息ついた

「さて、もう少しつかるかねえ…」

そう呟いた時…

「エリオくーん！！」

キャロが入ってきた

「キャ…キャ！キャロ！」

キャロとエリオが何か話しているが…多分今の年齢ならキャロも男
湯に入れるんだろう…しかし…フェイトは何を考えてるんだ？

よっぽど過保護なんだな

それからしばらく浸かっていた時キャロがトータスさんに話し掛けた
「トータスさんは恋人いるんですか？」

トータスさんはとても驚いている……まさか…キャロはトータスさ

んの事が…!

どうしよう! そうだ!! 僕もトータスさんみたいな騎士甲冑にすれば……

「すいません…少し逆上せたみたいなので…失礼します」

早くストラダにデータをインプットしなきゃ…!

「恋人はいないなあ…片想いも辛いもんだよ」

エリオ君が出ていった後トータスさんは苦笑いを浮かべて言った

はやてさんに調査するんや! と頼まれたんだけど…

「そうなんですか…どんな人なんですか?」

すると少し考えて言ってくれました

「…そうだな…とても強くて綺麗な人だ」

トータスさんは笑顔を浮かべて言った

「気が付いたら好きになってたんだよなあ…」

普段真面目な顔のトータスさんの顔が緩んでいる

そんなに好きなんだ…

「実るといいですね」

私もいつか…

「ああ…やってみせるとも!!」

さて風呂から上がり寛いでいたらいきなりロストログアの反応が出た
騎士甲冑を展開しキャロ達の指示に従い急行すると

「トーメント…ありゃなんだ?」

『……スライムだな』

……気持ち悪いな…

「薙ぎ払う…ウィップモードだ」

『了解！ウィップモード！！』

鎌が小さくなり鎖鎌のような形状になる

「はあっ！蛇行一閃！」

魔力をもった鎖鎌が蛇の如くうねりスライムを引き裂いていく……
しかし

「殖えてないか！？」

どうも本体を守るために増殖するタイプらしい
めんどくさいなあ！

……結局キャロが封印するまで延々薙ぎ払う事になった

こうして…俺の海鳴への出張は終わりを告げた…

おまけ

アンナ・ヴィレン

知る人ぞ知るデバイスマイスターである
ヴィレン家のデバイス、騎士甲冑のデータを作成した人物であり一
般向けの個人デバイス店を経営している

「おやおや…いらっしやい…」

その店に1人の客がやって来て言った

「僕に…トータスさんみたいな騎士甲冑のデータを下さい！」

アンナは自分の孫の名前が出た事に驚きながらも笑みを浮かべて尋
ねた

「分かったよ…かゝっつこいい騎士甲冑のデータをあげようね…お
名前は？」

その小さな騎士…赤い髪の少年は言った

「エリオ：エリオ・モンディアルです！」

……この後機動六課で閃光の死神と紅光の死神が激突する原因とは
誰もしるよしはなかった……

死神と風呂（後書き）

今回のラストでフェイトVSトータスをお知らせしましたが…是非！エリオの選んだ騎士甲冑はコレだ！と言う物を募集します規則として

モンハン2ndGの中から選出して下さい、スキルは発動しないの
で見た目とフィーリングをお願いします

またシリーズでお願いします、バラバラは駄目です

さらにグラフィックのない装備：例えばピアス類は駄目です

皆さんの意見をお待ちしております

第一次紅金戦争勃発！（前書き）

出来ました！

感想あればどうぞよろしくお願いいたします！

アンケートの結果と見た目から判断しオウビートになりました！
以後エリオの騎士甲冑はオウビートになります

第一次紅金戦争勃発！

「……なんでこんな事になんねん……」

私は汗で全身がびっしょりになつとる

この六課は過去に暗い闇がある人が多い
やから、問題は覚悟しとった

せやけど……

「まだ平気かねえ……たつく速いな」

紅蓮の死神が凄まじい闘気を漂わせ佇み

「当然だよ……エリオの為だから」

閃光の死神が妖しく微笑む

「……エリオの意思だろうが……！」

「あんな騎士甲冑は許せない！そもその原因は貴方でしょ……！」
……なんでこんな事になつとんねん……

「これは……カッコいい……！」

エリオはうんうんと自分の部屋で頷いていた

それは男の子のロマンの塊

防御を確保しながらも高機動戦闘に対応した騎士甲冑……その名は……
オウビート

「エリオ君カッコいい……！」

キヤロははしゃいでいる

黒い鎧に天を突く角……正しく子供の憧れ……カブトムシの化身だった
しかし……大人の女性は苦手である

「エリオ……それなあに？」

ふるふる震えながら尋ねるフェイト

「これですか？ トータスさんみたいな騎士甲冑にしてくて…お店を紹介して貰ったんです！」

キラキラ笑顔のエリオ：

「ふ〜ん…トータスさんが…」

今フェイトの頭の中はこんな虫みたいな騎士甲冑をエリオが着る原因となったトータスへの怒りが一杯である

本来は怒る事でもない

しかしフェイトの過保護な親心と愛情は止まらない！

「トータスさん…反省してくれない？ 貴方のせいでエリオがおかしくなるじゃない」

目が単色になったフェイトがトータスを睨み付ける

「……変えるのは自由だろうが…それに俺は店を紹介しただけだ」
至極マトモな指摘である

「それでも原因は貴方だよね？」

フェイトの言葉にトータスの目の瞳が鋭い力を帯びる

「……誤解なんだがな…エリオの自由にすれば良いだろう」

トーメントを待機状態にし腰を下げ左半身で半身をきり左手を下げ、
右手を顔面付近に近付ける

トータス独自の拳法である

母の故郷の武術を自分なりにアレンジした物だ
ストライクアーツの達人に近いギンガと真っ向から試合が出来るの
で実力はかなりの物だ

「ここで身構えなくても…訓練室でやろうよ」

フェイトは体を翻し訓練室へ向かっていった

「ちっ！ なんてこうなんだよ…」

トータスは舌打ちをしつつ考えた

（プロジェクトF…だったか）

トータスの祖父のガルバートは階級こそ准将だがこれまでの功績と

評価により少将クラス及び一部中将クラスの資料閲覧権限がある
機動六課に来る際に祖父がデータを一括して送ってきたのだ
違法だが誰もやっている事なので黙認されたようだ

つまりトータスは機動六課のいわゆる地雷とも言える問題を書類上
では理解している

（母の愛を受ける事が出来なかったが故の過保護か…どうするかね
え…取り敢えず行くかな…）

そして冒頭にいたるのだ

「やああああ!!」

フェイトのバルディッシュが唸りを挙げ襲い掛かるがトータスも負
けじとトーメントを振り上げ迎え撃つ

「ふんっ!!」

「くっ…!!」

弾き飛ばされたのはフェイトだ

機動六課の中でトータスの機動力はリミッターの付いた隊長陣の中
でもっとも低い

逆にフェイトは全魔導師の中で最速クラスだ

リミッターがあるとはいえ凄まじい速さの飛行から繰り出される一
撃は重い

しかしトータスはそれを補い余る程の豪腕と身体強化魔法の持ち主
である

トータスと単純な力比べをするのならヴィータ位しか六課では相手
にならないだろう

しかしフェイトは怯まない

一撃が駄目なら二撃、三撃と続けばいい

「はあああああ！！」 金色の鎌が連続で襲い来る

「嘗めるなよ！まだまだだあ！」

トータスは長い鎌の柄を自由自在に操ってその斬撃を捌いている

「気刃斬り！」

そして出来た隙を魔力を纏った鎌の連撃で突く！

薙ぎ払い、突き、斬り下がり、切り上げ、連続斬りを繰り返し回転斬は神速の速さで繰り返す

「甘いよ！」

しかしフェイトには当たらない

「まったく…ただだけ速いんだよ、あの技はあまり避けられた事がないんだがな」

トータスはトーメントを構え直し迎撃姿勢に入った

(…：キツいな…高機動戦闘は苦手なんだよ…)

空戦Sと陸戦S+…

ランクこそ自分が上だが空を駆ける閃光には地上の自分が放つ決定打は届かない

しかし自らが飛べば返り討ちにされるだろう

フェイトもまた焦っていた

(打ち合うだけで手が痺れるなんて…)

恐らく現在の六課の中で真っ正面からトータスと打ち合え、且つ勝てる可能性があるのはシグナムかヴィータに限られる

それほどの豪腕に加え防御能力も高い

遠距離からの魔法は堅すぎる程のシールドで止められる…

そしてお互いが同時に考えた

((勝つには…一撃必殺！))

お互いが同時に動いた

フェイトは空から急降下しバルディッシュを振りかぶった
トータスは体を限界までひねりバネの様に力を溜める

そして：強烈な破砕音と共に紅と金の閃光が迸った

「……負けちゃった……」

フェイトは呆然と呟いた

最後に物言ったのは力だった

トータスはトーメントを振り抜いた姿勢で止まっている

対してフェイトのバルディッシュは吹き飛んで壁に突き刺さっている

「あー……その」

トータスが近付いた時：フェイトは涙目になりながら言った

「今回は負けだよ！でも次は貴方からエリオを取り戻す！！」

フェイトはそう言って走り去った……

「……いやエリオを取った覚えはないんだが……」

トータスは呆然と呟いた

後にこの一騎討ちをはやては第一次紅金戦争とよんだ……

後に起こる第二次紅金戦争は今回の比ではないのだが……これはまた別のお話し

F W 陣 V S ハイパーじいちゃん (前書き)

出来ました！

感想あればどうぞお書き下さい！

お爺ちゃんのイメージは常識のある小さいガープです

FW陣VSハイパーじいちちゃん

「ここかいのう…」

白髪頭を掻きつつ1人の老人が歩いている

その背はスツクと延びており衰えは感じられない

「さて……どんなもんかね」

ううゝティアの胸を揉んだら怒られたよゝ良いじゃない揉んだって！

私ははあ〜と溜め息をつきながら歩いていた

その時1人のお爺さんがキョロキョロしていた

「どうかしましたか？」

迷子かな？そう思って話し掛けると……

「おお……スマンスマン、孫の顔を見に来たんじゃがひろくてのう……」

「お嬢ちゃん名前は？」

背はシグナムさん位のカッコいいお爺さんはそう言った

お孫さんに会いに……？

「スバル・ナカジマ一等陸士です！……よろしければお名前を…」

するとお爺さんは掌をパンツと打ち合わせた

「おおそうじゃった、そうじゃった……ワシはガルバート・ヴィレン

「！ここにおける筈のトータスのお爺さんで階級は准将じゃ！」

……う え え え え え ええ！！！！

「爺さん！？　どうしたんだ急に？」

スバルから報告を受けたはやてが泡を吹きながらやって来たのは驚いたが：

「なんじゃない？可愛い孫の顔を見に来たと言うのに……」

爺さんは笑いながら言った

「まあいいさ……俺は今日はデスクワークだけど、FW陣は訓練やつ

てるから参加したら…あいつ等にも良い刺激になる」

すると爺さんはニヤリと笑い

「そうか、そうか…じゃっ！参加してくるわい！」

とスキップしながら言った

ガルバート・ヴィレン

本来なら中将となっていてもおかしくないがあくまでも現場にこだわり続けこの地位にある

管理局ではリンディ・ハラOWNやレジアス・ゲイズと並ぶ重鎮であり管理局の生ける伝説と呼ばれる

誇張も多いが全盛期には空戦で管理局初のSS+を叩き出した事是有名であり空戦魔導師の中で一度は会ってみたい人である

またこの間のランク測定で69歳ながらSランクを叩き出すなど管理局のバグキャラとも言われる歴戦の猛者である

「さて…覚悟はええかい？お嬢ちゃん達…」

漂う圧迫感…スバルは忘れてるけど…座学に出てくる位に有名な人物…まさかトータスさんのお爺さんだなんて…

「なら行くぞ…本マグロ…セットアップ！」

そしてあたしは…

『セットアップ！』

この祖父にして孫ありと思った

真紅の鎧は美しく力強さを感じさせる

ただ…

まさに其は魚だった

大きく、分厚く、そして何よりも奇抜だった

まさに魚類だった

何よりもカジキマグロだった

「「「は？」」「」」」

全員の声が1つに成った

「行くぞおおおお！！」

ガルバートさんがその魚を構えた瞬間瞬時に消えた

……ソニックムーブ！？

「え……うそ！？」

スバルの目の前に突如表れ

ドゴオン！！

「火絊無乱！！（ほうむらん）」

フルスイングですっ飛ばした

……あれ凍ってない！？

スバルはきやあああと悲鳴を挙げてビルに突っ込んだ

……メチャクチャだ……

「まだまだじゃ！！氷結一閃！！」

蒼白色の魔力光が飛んでくる！！

「うわあっ！」

エリオが慌てて避けた所に再び間合いを詰めてマグロを振りかぶったガルバートさんがいた

「溜め斬りいいいい！！」

ガルバートさんの体が発光しエリオに斬り付けた

エリオはストラダーで受け止めた……けど

「う……くああああ！！」

押し負けてしまった

これが実践経験の差？

「本マグロ！ディバイン・バスターじゃ！！」

『了解、ディバイン・バスター』

持ち手だった方を私達に向けた

そしてその口から蒼白の太い魔力光が発射されて…！

私の意識は途切れた……

「ニヤハハハハ……」

もう言葉が出ないの…

「カジキマグロ……」

フェイトちゃんも呆然としている

「随分…ファンキーなじいちゃんやな…」

はやてちゃんがポンポンとトータスさんの腰を叩いている

「……申し訳無い…ありややりすぎだ」

トータスさんは頭を抱えている

暫くしてガルバートさんがやって来た

「はやて君達か…ええ仕事しとるわい」

ガルバートさんがカラカラ笑う

「いえ、そんな事はありませんよ」

はやてちゃんが笑って受け流す

「で…爺さん？ ホントは何しに来たんだ？」

トータスさんがやれやれと言った風に言う

「なあに…大した事じゃないわ」

ガルバートさんはそう言って言葉を切って

「トータス、お見合いせい」

トータスさんに直撃の爆弾を放った

「はあああああああ！？」

トータスさんの絶叫が辺りに響いた……

死神、お見合い（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

次回は死神、デートです

なお今回トータスの重要な過去が分かります

死神、お見合い

クラナガンのホテル・アグスタ内にある和風料亭…

そこに黒の薄いストライプスーツを来た俺が居た

「相手は…遅いな」

隣でニヨニヨ笑っている爺さんをぶん殴りたい気持ちだ

しかし…未だにSランクの猛者だからな、最近は勝ち星が先行しているが総合で見れば負け星が多い

「きつと気に入るってのう…」

爺さんはうんうん頷いている

「……まったく…」

俺には好きな人がいるってのに…

「大丈夫じゃって！陸士隊の時の夜のお供から推測して…ぐぼっ！

！」

渾身のアップパーを叩き込んだ

「爺さん！！何やってんだ！？人のお供除くってアンタ！！」

叫んだ、魂が枯れるほどに叫んだ！

「20も半ばを過ぎそうな男なのに浮いた噂がないからじゃろうが！！」

そして…渾身の殴り合いが始まった

因みに爺さんの現在の身体能力は全盛期からやや衰えた程度である

「もう…お父さん」

私は渋々スーツを来ていた

地球から入ってきたお見合いの文化だけど着物はあまり広まらずス
ーツかドレスでする事が多い…乗り気ならドレスだけど私はそんな
つもりがないからスーツだ

「まあ…いいじゃねえか」

父さんは笑っているけど…私には色々あるのよ？
そんな時だった

私達が目指していた部屋の中からドゴォッ！とかミシッ！やバキィ
！グシャッ！！と言う物騒な音がしているのだ

「父さん…お見合い相手…：ターミ〇ーターみたいな人じゃないで
しょうね」

父さんも首を傾げている

「おかしいな…ここの筈だが…」

そして襖を開けた時

「は？」 「へ？」

2人して唾然となってしまった

…：頼りになり、よくご飯を食べに連れてってくれる上司が…殴り
合っているのですから…

「ガルバート准将！？何やられてるんです！？」

そんな声がして振り替えるとお相手が来ておった

「おう、すまんのうゲンヤ」

実は今回のお見合いはワシ等2人の共謀じゃ

どちらも…といってもギンガちゃんの方は自覚しとらんようじゃがな

「ぎ…ギンガあ！？」

「と…トータスさん…」

さてと…それじゃ行こうかね

お見合いのルール？

そんな物しらんわい！！

「じゃあな、あとは2人でごゆつくりと…」

「ギンガにトータス、まあ気楽にやれや」

そして2人で全力ダッシュじゃ！

「あっ…待って！」

「あんの…クソジジイ…」
待てと言っても待つ奴はおらんよ！

「しょうがないな全く…悪かったな」
トータスさんは苦笑いを浮かべながら言った

「いえ、大丈夫ですよ」
私自身トータスさんと居るのは嫌じゃないです
むしろ…好きかな

「うん…しょうがないか」
そしてトータスさんは立ち上がり笑顔で言った
「今日はオフだし…遊びに行くか！！」

その笑顔は思わず見とれてしまうくらいに…無邪気でした
「はい！」
そして私達は笑いながら出ていった

このデートが2人の関係を変えろとはまだ誰も知らない

重要なオマケ

今日は本部から視察が来る日やった
「こんにちは、地上本部から視察に来たガイズ・ヴィレン二佐です」
うちは視察に来たガイズさん…トータスさんのお父さんと会談していた

「トータスはどうです？」
ガイズさんから言われた

「そうですね：腕も立つし面倒見もいい立派な人ですよ」

するとガイズさんは笑いながら言いました

「良かった：あいつはちゃんとしてますか」

そしてコーヒーを飲み真面目な顔になった

「単刀直入に言いますがこの六課は暗い過去を持つ人が多い：そしてそれを引きずっている」

言う通りや：なのはちゃんやフェイトちゃん：FW陣も：

「かつて、あいつも一度なのはさんのように戦えない位の大怪我を負いました：」

初耳や：トータスさんもそんな怪我を：

「けど：あいつはその事を引きずっていないんですよ」
引きずってないやって…？

「あいつは過去は過去と割り切り：ひたすら前を見る事が出来る強さがあった：だからひよっとしたらですが：この六課をより良い方向へ変える事が出来るかも知れません」

そんな事が可能なんだろうか：いや何かやってくれそうな気がする
「分かりました：ありがとうございます」

こうして会談が終わった

なんだか重要な話を聞いた気がするなあ：

死神、お見合い（後書き）

今回、トータスとなのはの違いが出ました

一応トータスは16歳の時、仲間を助ける為に大怪我を負いました
ちなみにその頃は母の故郷で特殊辺境警備隊に配置されていました
モンハンの世界ですね

なのはやヴィータはまだ引きずっていますがトータスの場合、そんな事もあったな…と言う位に認識が違います

死神、デート（前書き）

出来ました！

感想あればどうぞ書き込んで下さい！

次回はトータスが地上部隊について語ります

死神、デート

さてとあるアーケード街にて俺達は歩いている

「さて、どこに行くかな？」

俺がそう言った時：ギンガの目が一ヶ所を見ていた
その場所は：食べ放題の焼肉屋だった：食い気か

「昼だしな：行くか？」

そう言った途端ギンガが言った

「良いんですか!？」

「構わん：奢ってやるよ」

俺達は焼肉屋に入っていた

「……………」

ギンガ：今何キロ食べたんだ？

「美味しいですねトータスさん！」

確かに旨いが：店員がひきつつてるよ
大皿10枚楽々突破ってなんだろうな：

「トータスさんも食べてますか？」

「ああ：ちゃんと食べてるよ」

俺より食べてんだよな：

「食べたら：ハフハフどこ行きますふ？」

さて：そうだな

取り敢えず服の臭いを落として：ショッピングか？

「買い物でも行くか？」

色々買い足して起きたいものもあるしな

「分かりました！行きましょう!……おかわり食べてから」
まだ食べるのかよ：まあキラキラ嬉しそうに食べてるからいいかな

さてアーケードにあるデパートに入る事にした

「服を買いに行きましょう！」

……マジか？

「……俺にお前の服を選べるセンスはないぞ？」

するとギンガは少し頬を膨らませて言った

「違いますよトータスさんの服です！いつもいつも同じ様な服じゃないですか」

……言われてみれば確かにな

「そうだな…ギンガのセンスに任せてみるか、じゃ頼むよ」
するとギンガは胸を張って言った

「任せて下さい！」

「……これはな」

ギンガのセンスは確かだった

「随分印象が変わりましたね」

胸元が大きく開いたシャツにクラッシュジーンズ、更にシルバーアクセサリーを組み合わせたのだが…

「お洒落かも知れんが…ホントに俺か？」

まるでロツサみたいだな

(ボソッ……カッコいい)

「何か言ったか？」

「いっ…いえ！！何でもないです！！」

「そ…そうか、ならいい」

一瞬褒められた気がしたんだけどな…

デパートのトイレで御手洗いをしながら今までを回想してみた
今日、1日トータスさんとデートみたいな事をした

ご飯を奢ってくれた

服を見立ててあげてそれが似合っていてドキツとしたり…

今になって気付いたけれど…トータスさんはしょっちゅう私にご飯
を奢ってくれる

もしかして…私の事が!?

思わず首をブンブン振る

どう考えても釣り合わないし…でも一緒に居るのは嫌じゃなくて寧
ろ大歓迎…?

「ああああ!! 何考えてるの私!!」

頭をブンブンもう一回振り落ち着かせる

……よし! 取り敢えず忘れよう!!

「奇遇だね…この間はよくもやってくれたね」

トイレに行ったギンガを待ちながら煙草を燻らせていたら…何故か
ロツサがいた

「おう…そりゃお前がサボるからだろ?」

至極当然の指摘を試みる

「がっ! ……でも友人だろう? 気を効かせても…」

確かに気を効かせてやりたいがな

「あいにく…シャツハもお前と同じく大切な友人の一人でな」

どっちも大切な友人だから正しい方の味方になるだけだ……

「それにだ…もし俺の嘘がバレてみる? 陸戦AAAとSの大戦争だ
…被害は甚大だぞ」

サーツと青くなるロツサ

「今後は控えようかな…」

「ああ、そうしとけ」

短くなった煙草を携帯灰皿に押し付けた時ロッサが言った

「そう言えば…君が何でここへ？ あんまり君はこんなデパートに来ないだろ？」

正直に答えとくかな、別にコイツにバレても構わんし

「デート？」するとロッサは目を丸くした、失礼じゃないか？

「いや…ごめんね、君にも春が来たんだと思うとね、美人かい？」

「そうだな…美人だな」

うん、美人だ。

なのはやフェイトに比べても引けはとらんだろう

「へえ…付き合ってるの？」

「いや、まだだ…だけどそうなればいいなと思っている」

ロッサはうんうんと頷いて言った

「そうそう！その気持ちが一番大事さ！！」

しかし俺の耳はその言葉を聞き流した

何故なら遠くから爆走するピンクの髪のシスターが見えたからだ！！

《おい！ロッサ！！逃げろ！！シャツハが走ってきてるぞ！！》

《しまった！バレたか…ごめん失礼する！！君の恋が実る事を祈っているよ！！》

《またサボりか！急げ！俺はお前の葬式に行くのは嫌だぞ！》ロッ

サは爽やかな笑顔を浮かべ凄まじい速さで走っていった

……逃げきれよ

その時後ろから音がしたので振り返った

「ん、遅かったな」

何故か顔の赤いギンガがいた

私は思わず止まってしまった

ヴェロツサ査察官とトータスさんの世間話を聞いていたら…トータスさんは私の…事が好きだったんだ

どうしよう、今までこんな事なんて無かったし…

「ん、遅かったな」

オロオロしている内にトータスさんに気付かれてしまった！

「あ…えっと…」

ヤバイ…反応が分からない

そんな私をジッと見てトータスさんは言った

「ひょっとして聞いていたのか？…ああ、無理に返事はしなくてもいい」

ノロノロと頷いた

「……そうか」

トータスさんは顔を赤くしていた

「……………」

沈黙が長い…

その時トータスさんは言った

「今、結論は出さなくてもいいさ。……その時になった時でいい」

「え…いや、でも…」

私がおか言おうとした時トータスさんは手で制した

「俺は待てるからな…いつかでもいい…その時に聞かせてくれ」

帰るぞ…とトータスさんは赤い顔のままクルッと身を翻していった

「はい！」

……私はトータスさんに猶予をもらった

だから悩んでこの気持ちがんなんのか確かめよう

そして…近い内に結論をだそう

私は歩き出したトータスさんの横に並んだ
2人の影がほんの少し重なった：

死神、陸と過去を語る（前書き）

出来ました！

感想があれば書き込んで下さい！

今回地上本部について語ってますがデータが少ないので想像の所があります

死神、陸と過去を語る

僕たちは今気まずい雰囲気です

主要メンバー全員でお昼を食べていた時キャロがはやてさんにどうして六課が出来たのか尋ねました

僕らはフェイトさんの役に立ちたくて入ったのでよく知らなかったから

そしてはやてさんは言いました

空港事件の時、地上本部の対応の遅さに驚き、こんな事を防ぐために生まれた事

これが全部の訳じゃないだろうけど凄く立派だと思った…けどそれに反してトータスさんの機嫌がドンドン悪くなっていった

「……あのう…トータスさん？うち何か言った？」

こいつ……俺が地上部隊だって事忘れてるのか？

まあそう言う事もあるだろう

部隊長だ、疲れん筈がない

「はやて、自分が所属する部隊を責められていい気分な訳がないだろう？」

するとはやてはハツとして頭を下げた

「ごめんなさい！すっかり忘れとった…」

しょんぼりしているはやて

「まあいい…だが幾らか言い訳させて貰うかな」

そう言って前置きして言った

「動きたくても動けないんだよ地上部隊は、人がいないんだ」
なのはが首を傾げた

「えっ？どういう事なの？」

やっぱり本局は知らん奴が多いな……いや上が隠してるだけかね

「人数が先ず地上本部の方が少ない上に高ランカーが殆どいない…

Bが1人いるだけでもありがたい！ってくらい深刻だからな」

全員が目を丸くした

「そんなに酷いの！？」

スバルは大声で言った

「まあ多少大袈裟だがな、本局が片っ端からスカウトしているから地上部隊は火の車だ…本局にSランカーは知ってるだけで何人いる？」

ティアナがすぐに言った

「確か…クロノ提督になのはさん達、後はガルバート准将…ですかね、他にもまだ居られたような気がします」

「地上部隊のSランク持ちは今のところ俺くらいだ」

はやてがおそろおそろ聞いてきた

「それ…ホンマ？」

「悲しいが…事実だよ、だから地上本部は本局と仲が悪いのさ」

地上部隊は自分達の戦力をガンガン吸い上げていく本局に怒りを感じている

本局の任務は次元震を止める等の高難易度の仕事が多いため過剰なまでの戦力がある

その事を分かってはいても納得は出来ない

「あれ…じゃあ空港事件の時トータスさんは何してたの？」
なのはが質問してきた

「ああーあの時か…本局の人事部に呼び出されてな『君の様な人物は海や空にいるべきだ！』と熱弁を振るってスカウトしてきたんだ、断っていたんだがしつこくてなあ…」

俺は顔をしかめながら言った

「爺さんが俺に火事の事を伝えに扉をぶち破らなかったら延々と言
ってたんじゃないか？多分」

慌ててポートを使って戻ったのは達が既に解決していた

「うわぁ…大変ですね」

エリオが嫌そうな顔をして頷いた

「トータスさんは…何で地上本部に拘るんですか？」

ティアナが言った

「……親父が地上本部にいらんだ、親父はランクが低いけどいつも
頑張ってる、けど俺が管理局に就職する少し前にな親父が仕事で失
敗したんだ」

周りは真剣に聞いている

「誰だって人間だ、失敗はある…けど親父が失敗した事で応援にや
って来た本局の人達は親父をバカにした…『これだから陸は』って
な、親父は唇を噛み締めて耐えてたよ…だから決めたんだ！『陸は
凄い』って言わせるような魔導師になろうってな」

話終えた後スバルが涙目になりながら言った

「トータスさん！凄いかっこいいよ！立派だよ！」

そうかな…少し照れる

「そういう事だ、どっちもちゃんと協力しないと本来はやっていけ
ないんだよ」

結果本局と地上本部には恐ろしい深さの溝が出来ている

「この六課は地上本部所属の俺や本局のはやて達…つまり対立する
2つの組織の協同で成り立っている…上手くいけば融和が近づく筈
だ」

はやてが頷いた

「そうやな…同じ管理局員なんやもん、溝はない方がええしな」

少し皆の顔に真剣さが入った

自分達の立場に自覚が出たのだろう

確かに俺達の代では融和は無理かもしれないが…この六課がある事

で少しずつ変わっていく筈だ
俺はそんな事を考えながらコーヒーを啜るのだった

オマケ

「あれ？通信だ」

スバルのデバイスに通信が入った

『もしもしスバル？』

「あ！ギン姉だ！どうしたの？」

『……あのね、トータスさんに告白されたのよ…』

「ええええええええええ！！」

スバルは大きく響く声を上げた

『それでね…スバルの意見を聞きたいのよ』

スバルは少し悩みつつ言った

「あの人なら良いと思うよ…きっと何があってもギン姉を守ってくれるよ」

『ありがとう…スバル、少し考えがまとまったかも…』
スバルは笑っていった

「ううん！気にしないでね」

『それじゃあね、スバル！』

「バイバーイ！ギン姉！」

通信が切れた

「トータスさんかあ：ギン姉にはお似合いだね」
生真面目な姉と騎士甲冑のセンスはともかく同じく真面目で不器用な上司：お似合いだ

「付き合いましたら私にも奢ってくれないかなあ：アイスとか」
スバルは2人の未来を想像しながら：

「ティアー！！」

「うっさい！バカスバル！！」

ティアナに飛び付くのだった：

死神、陸と過去を語る（後書き）

もうすぐアグスタ編になります

なおエンブレム大破もこの予定です

死神とアグスタ その1 (前書き)

出来ました！

感想があればどうぞ書いてください

なお後書きにトータスが具体的にどの位の強さか隊長達と比較した物を書いています

独断ですので意見があればどうぞ書いてください
間違っている場合は習性します

死神とアグスタ その1

ホテルアグスタ

ここでオークションが行われるのだがロストログア関連の物があるらしく六課出動と相成った

で、俺だが地上部隊出身なのでスーツを着てはやて達と挨拶回りをしている

ユーノへの届け物もあるしな

一応ユーノに届け物をしたらデバイスを受付から貰って警備に出る予定だ

本来ならそうスツと出来ないのだが俺だけレジアス中将が手を回したらしい

本局嫌いが行き過ぎだと思うが…本局の態度を見ると仕方無いのかも知れない

俺は悩みつつ挨拶回りに向かった

「……トータスさんおつきいねやっぱり」

なのはがふっと洩らした

スーツを着ているのに身長と筋肉が凄くて胸板も分厚いから……その「なんというか…場違いやな…」

回りの華やかさに比べてけっこう浮いちゃってる

サングラス掛けたらそのままターミ〇ーターに成れそうな感じだそんなトータスさんは手慣れた様子で財界人と歓談している

「私より会話上手いかも…」

はやてがボソリと呟いた

何でだろう？

「これから期待しておりますぞ!!」

ダンディーな人達と話すのは疲れる

地上部隊は予算が足りない

絶望的に無い…だからこそある程度の階級の人やストライカーはお金持ちに挨拶し寄付してもらうのだ

俺は階級ではなくストライカーとして寄付を募っている

次元航行艦なんてそう何台も入らないだろうからその分の予算をこっちにくれないかね

財政は火の車…

こんなのでミッドの平和が守れるか心配だ

そんな事を愚痴りながら歩いていると…

「や、どうだい？調子は」

何故かロッサがいた

多分ロストログア関連か聖王教会がらみだろう

「どうもこうも…変わりはないさ、やるべき事をやるだけだ」

俺が言ったらロッサは苦笑いを浮かべた

「まったく…君は真面目だね、まあクロノ程じゃないけど」

恐らく誰よりも堅物であろう提督が浮かんできた

「当たり前だ、だからお前を時々見逃しているんだろう？」

大体3回に1回は見逃しているし逃げるよう忠告もしている

「お陰で助かるよ…で地上本部はどう？」

ロッサが真剣な顔でいった

コイツには何回か実情を話しているのだ

「…俺だけデバイスをオークション会場前の受付に預けるだけで済んだ、はやて達は回収されてる」

ロッサは眉を潜めた

「それはまた露骨な…」

はやて達は苦笑いで済んだがどうも後味が悪い

「多分：粗を探して六課を解散させ本局の顔を潰したいんじゃないか？……させないけどな」

本局は確かに腹が立つ、がなのはみたいがいい奴もいる
今は六課の一員として地上と本局が協力するのが大事だ

「……苦労するな君も：頑張れ」

ロッサが励ましてくれた

「ああ、それじゃあ」

さて、ユーノの所へ行ってみるか

ユーノの控え室に入った

「やあ！ 久し振り」

ユーノはニコニコしながら迎えてくれた

「よう！ 頼まれてた届け物だよ」

ポケットから紅く光る燃える様な宝石と白く輝く鉱石を取り出した

「ありがとう！ よし：これで：」

ユーノは嬉しそうに笑った

「火竜の紅玉にメランジェ鉱石：だったな、なのはへのプレゼント
だったよな」

なのはへの思いを伝える為に手作りでペンダントを作りたいらしい
……全く一途な奴だ

「ありがとう！ トータス！！」

「なあに構わんよ：頑張れよ」

俺はユーノに手を振りながら退室した

さて：受付でデバイスを貰った警備に移るか

その頃のティアナ

どうして私だけ凡人なんだろう
スバルみたいな魔力もエリオみたいなスピードもキャロみたいなレ
アスキルもない

隊長達は言うに及ばずだし：シグナム副隊長は万能型だしヴィータ
副隊長は一発がずば抜けて重い
なのはさんの砲撃もフェイトさんの機動力もない
……トータスさんはどうだろう

ビルの壁をぶち破り薙ぎ払い進むトータスさん：
素手でスバルをぶっ飛ばし体当りでエリオをはね飛ばすトータスさ
ん……

無表情のまま鎌を振り上げ追い掛けてくるトータスさん……

……駄目だ……私には出来ない

結局……私は……

死神とアグスタ その1（後書き）

破壊力：砲撃無し、デバイスによる攻撃

1位 ヴィータ

2位 トータス

3位 シグナム

機動力

断トツのビリ

砲撃、射撃（広範囲攻撃含む）

1位 はやて

2位 なのは

3位 フェイト

4位 トータス

攻撃スピード

1位 シグナム

2位 フェイト

3位 なのは（砲撃、射撃含む）

4位 トータス

防御能力

1位 なのは

1位 トータス

3位 シグナム

3位 はやて

トータスはシグナムに似てますがパワーと防御に優れています
モーションはかなり速い方

死神とアグスタ その2 (前書き)

出来ました！

感想があればどうぞよろしくお願いします！！

死神とアグスタ その2

「……多くないか？」

『確実に多いな』

俺のぼやきにトーメントが反応した

やれやれ…ガジェット三型が一基と一型が沢山…か

「生憎だが相手が悪かったな」

この程度では俺を止めることは出来ない

「セットアップ！…トーメント！行くぞ！！」

『セットアップ！了解だボス！！』

さて…行くかね！！

「うおおおお！！！」

ガジェットの間に飛行して割り込み鎌を振り抜き砕く

『ボス、左に一体だ』

トーメントの指示を聞き左に裏拳を叩き込む

グシャリと鈍い音が響いた

確認すればガジェットの装甲はひしゃげ大破しバチバチいつている

「落ちろおお！！」

そのまま拳を振り下ろしガジェットは地面に激突し爆発した

『相変わらず馬鹿げた豪腕だな』

トーメントがボソリと言う

こいつも随分と人間らしくなったな

「そりゃ鍛えてるからな」

単純な破壊力ではヴィータには劣るだろうが腕力なら負ける気はない

多分魔力強化した俺の腕力を越える豪腕は殆どいないだろう

鍛えた筋肉は嘘をつかない

『……む？コレは…』

「ん？どうかしたのか！？」

カートリッジをロードし三型と複数の一型を大回転気刃斬りで仕留めながらトーメントに確認を取った

『魔力反応Aが観測されたぞ、恐らく敵方だ』

トーメントは祖母が腕を振るいに振るった高性能デバイスだ

しかし：基本はアームド故に魔力感知は出来ても大体の方角しか分からないのだ

「ここは片付いたしな：行ってみるか」

『了解だボス』

俺は進路を変え魔力反応の元へ向かった

つらい：あたしはそう思った

訓練と違いAMフィールドが強化されているのか直撃してもダメー

ジは与えられない：

でも：負けるわけにはいかない

あたしは凡人だ、死神のトータスさんやエースオブエースのなのはさん達とは違い才能はない：だけど凡人でも出来ると証明しなきゃいけない

ランスターの弾丸は、兄さんの教えてくれた魔法に貫けないと言うことを！

「スバルッ：クロスシフトA行くわよ！」

「おうっ！！」

頼れる相棒が返事を返す

カートリッジを四発ロードし大量魔力があたしの回りの沢山の魔力弾を強化する

『ティアナ！？四発ロードなんて無茶だよっ！ それじゃティアナ
：「撃てます！」』

静止を振り切る

あたしは出来るんだ！

「クロスファイヤー：シューートッ！！」

オレンジの弾丸は発射された

『ボス、アレを見ろ』

トーメントに言われそちらを見ると：

「……何を無茶な…」

カートリッジを四発ロードしたティアナが居た

『制御出来ない確率が高いぞ：どうするんだ？ボス』

考えろ、アレはもう止まらん
止まらないなら撃たすだけだ、しかし制御仕切れない際に一番危険
なのは：誤射だ！！

「トーメント！！ソニック・ムーブだ！多分誤射がある可能性が高い！！」

『了解だボス：ソニック・ムーブ！』

急速に加速しティアナ達に近づく

スバルは、ウイングロードで移動中か

『ボス！！一発逸れてスバルの方へ！！』

ありがとうよ、相棒！！

スバルに迫るオレンジの魔力弾の射線に割り込む

近づく魔力弾を一閃する

この時、ようやくスバルとティアナが気付いたらしい

「ティアナ！！少し下が：れ？」

頭を冷やさせるべく怒鳴り付けようとしたら既にティアナが震えて

いる……

そして迅速に下がっていった

……こんなに聞き分けが良かったか？

まあいい

「スバル、ここは俺がやる、下がったティアナを連れて裏手の警備に回れ」

今はこれがベストだ

「わ……分かりました」

スバルもまた言い返さずに去っていった

『ボス……怒っているのか？』

トーメントが聞いてきた

「まあ……自分の限界を見誤って誤射しかけたんだ、センターとしてはあっちゃいけない事だ……そこは怒らなきゃいけない、次にこんな事が無いようにな」

するとトーメントが言ってきた

『ボスも考えているんだな、良いマスターを持った物だ』

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか……片付けるぞ!!」

そして戦場に鎌の暴風が吹き荒れた

さて、何故ティアナとスバルは迅速にトータスの言うことを聞いたのか

……トータスと仕事をする中で最も避けたい時間帯はいつか？

それは夜だ

只でさえ恐いトータスの騎士甲冑の恐怖が暗闇によりさらに増大するからである

ティアナは夜の時間帯に瞬時に現れ怒気を見せるトータスが恐かったのだ

スバルもまた同様である

……本人は気付いていないが回りの被害は甚大であった……

さてアグスタの襲撃から一夜明けトータスは自室で栄養剤Gを飲みつつ資料を見ていた

その資料は六課に来るに当たって祖父に要請したメンバーの資料であるトータスは洞察力が意外にもある
あの時のティアナに何かを感じたのだ
そして出した結論は……

「プレッシャーとコンプレックス……かね」

資料によると殉職した兄は当時の上官に無能扱いされたいらしい
その汚名を晴らす事へのプレッシャー
そして仲間達にはレアスキルや才能があるのに自分には無いという
コンプレックス

「……そこが誤解なんだ」

ティアナの強さはまた別にある
しかし……それは自分で気づくべき事だ
「全く……上手くないものだな」

『誰も完璧はあり得ない……ボスも気を落とすな』
トーメントがトータスに言った

「ああ……取り敢えずティアナにはそれとなく言っておくか」
そうしてトータスは席を立った
六課をより良くするために……

死神とアグスタ その2 (後書き)

トータスと隊長陣比較その2

知能

1位 はやて

2位 なのは

2位 フェイト

4位 シグナム

4位 トータス

4位 ヴィータ

タフネス

1位 トータス

2位 シグナム

2位 ヴィータ

死神、語る（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

なお最後に出てくるフェイトが少し暴走気味です

死神、語る

あたしはトータスさんに小さな会議室に呼び出された

……多分この間の誤射の事だと思う

それと最近始めたトレーニングもだ

凡人のあたしは人一倍しなきゃ駄目なのに

トータスさんはコーヒーを啜っている

そしておもむろに言った

「なあ、ティアナ：強さとは何だと思う？」

こんな事を言われた

「それは：魔法の威力とか、魔導師ランクで表される物じゃないんですか？」

大抵はそう言う答えが返ってくる

「確かにそうだが：それでは駄目だ、強さとは様々な方向性を持っている変わり続ける物だ」

ティアナは首を捻っている

「例えば：俺は腕つぶしが強い、これは強さだ、フェイトは滅茶苦茶速い：これも強さだ：分かるか？強さ何てものは画一の物差しで図ることは出来ないよ」

ティアナは納得出来なさそうに言った

「それじゃあ魔導師ランクはどうなんですか？」

確かにな

「魔導師ランクはあくまでその人に出来る任務のレベルを示す：ランクが強さにイコールとは限らないんだ」

俺は一息ついて続けた

「俺の爺さんの知り合いにコラードって言う人：確か学校長だったかな、その人はA Aだったんだが当事既にA A Aランクのなのはやフェイトを寄せ付けなかった」

ティアナが驚いている

「分かるか？魔導師ランクが低い事を気に病む必要はない」

ティアナは少し表情が明るくなった

「さて：少し昔話でもしようか、参考になる」

そう一息ついて言った

「強くなるには自分が何に向いているかを見つける事だ、俺が陸戦の道に行ったのもそうだ」

やっぱりリンカーコアを持ったら空に憧れる

幸いにも魔力量はかなりの物が合ったから直ぐに成れると思った：：けど

「マルチタスクが下手くそなせいで空を飛んでは墜落してた」

苦笑いを俺は浮かべた

空戦はマルチタスクの制御が物を言う

しかし：俺は空を飛んだら戦えず、戦ったら墜落すると言うくらいだった

「それ：ホントですか？」

ティアナが驚いている

「ああ、マジだよ空戦Aは大人になってから取った：もう上には上がれんな」

あくまで俺は飛べる陸戦魔導師であって空戦魔導師の実力は普通だ

俺は焦った

爺さんみたいに空を飛びたいし、強くなりたい

だから方法を探し模索した

結果辿り着いたのは空を諦めて陸戦の道に行く事だった

「……若い時は誰だって迷う、俺だって当事既に陸戦の才能があるとは思わなかった、人には必ず才能がある：人に羨ましいと思わせような：な」

以前シャッハと模擬戦した後、シャッハにお前の技術の高さが羨ましいと言ったら、シャッハは俺の爆発的な突破力が羨ましいと言っ

てきた

「……私にもあるんですか？」

ティアナが信じられなさそうに言った

「当然だ！そしてそれを見付けるのはお前自身だ……大丈夫さ逆に考
えるんだ『天才揃いの部隊にスカウトされたんだ！私は自信を持っ
ていいんだ』って感じにな」

ティアナに足りないのは自分に対しての自身だ

自身は持ちすぎれば潰れるが持たないのも問題だ
自らを卑下する者に前進はない……

「ありがとうございます、少しスッキリしました……けど……どうして
私にこんな事を？」

ティアナが聞いてきた

「部下が悩んでたらそれを導くのが年長者の仕事だ……それにな……
お前達は部下以前に仲間だ、大事な仲間のサポートをするのに理由
がいるか？」

ティアナは聞いた時ポケットとしていたが直ぐに笑顔になった

「そうですか……優しいんですねトータスさん」

む……少し照れるな

「まあいい、お前はまだこれからだ……頑張れよ」

ティアナは会釈して帰った

『お疲れ様だ……ボス』

トーメントが労いをかけてきた

「ああ、これで多分大丈夫だ」

しかし俺は忘れていた

フェイトと俺の間にエリオと言うとんでもない爆弾があると言っ
とに……

「フェイトさん…相談があるんです」

エリオが話し掛けてきた、何かな？

「トータスさんみたいになりたいんですけど…どうすればいいですか？」

え……………イマナニヲ…イッタノ？

「トータスさんって力任せに見えるけど戦い方も上手いってシグナム副隊長が言ってたんです、幅を広げるにも効果的かなと思って…」
ダメダメ！エリオが死神になるなんて嫌！

…………トータスさんとOHANASHIしなきゃ…

死神、語る（後書き）

次回 第二次紅金戦争

i f もしトータスが空港火災でスバルを助けていたら（前書き）

番外です

スバルを天使なのはじやなく死神なトータスが助けたらどうなる
んだろう…と考えた作品です
感想待ってます

if もしトータスが空港火災でスバルを助けていたら

「もう一度頼みます…ぜひ本局武装隊の隊長をやって頂けませんでしょうか？」

眼鏡を掛けた人事部の中年のマイクが言う

「ですから…俺はそのつもりはないんです、地上本部に骨を埋めるつもりです」

マイクは大きく溜め息を着いた

「何故です？ゼスト・グランガイツの後継者と呼ばれるからですか？」

ゼスト・グランガイツは嘗ては地上本部最強のSランカーだ
亡くなられてから暫く経つが今だ伝説の人であり英雄でもある

地上部隊の年輩の方は俺にゼストさんを重ねてみるらしくゼスト・
グランガイツの後継と呼ばれる事もある

「とにかく…俺にそのつもりはない！……失礼します」
ささっと帰るか

思えばこれが良い判断だったんだろう

ポートを使い地上本部に戻りバイクに乗って帰ろうとした時ふと思
い出した

「そういえば大将の娘さんが今日辺りくるって言ってたよなトーマ
ント？」

『肯定だ、ボス…行ってみるか？』

「そうしてみるか…大将が目に入れても痛くない可愛い娘さん達ら
しいしな…」

俺はハンドルを切って空港へ向けてアクセルを吹かした

間もなく空港…と言った時だった

ズドォオンと言う音が響き…

「空港火災！？トーメント、通信を！！救助に参加する」

『了解したボス！！』

なんでや…地上部隊の増援がこん…けど諦めたらあかん
絶対助けるんや！！

その時オープン通信が入った

『こちらは陸士108部隊一等陸尉トータス・ヴィレンです、指揮官の方か？これより救助活動に参加する！』

回りにいた陸士部隊の人達が一気に盛り上がった

「トータスだって！？」

中堅隊員が叫び

「いよっしゃあ！！」

若手がガッツポーズを取る

「アイツがくるなら大丈夫だ！」

ベテランが確信を露にする

「その人はどんな人なんですか？」

私がそう尋ねた時…紅い鎧に骨を身に纏った魔導師が視界を横切り
飛んでいった

……骨！？

「死神に続けーっ！！」

『ウオオオオオオオ！！』

な…なんちゅう物騒な通り名や…

お父さんとお姉ちゃんともはぐれちゃった…熱いよお…

「子供が…無事か？」

声のする方をみたら：鎌を持ったドクロの顔で紅い鎧の……死神さんがいた

「し……死神さん？」

やだ！ 怖い！ 死にたくない！！

私はポロポロ涙が出た

その時死神さんが喋った

「……君は良い子なんだね？」

私は恐くて死神さんの方を向けなかったけど頷いた

「分かった、死神さんは悪い子は捕まえるけど良い子には何もしないよ……ここから出してあげる」

死神さんが優しい声で喋った

「……ホント？」

死神さんはゆっくり頷いた

「もちろん！ 死神さんは悪い子を凝らしめるけど良い子には何もしないんだ……トーメント……カマイタチフォーム、ついでにカートリッジもロードしろ」

『了解した、カマイタチフォーム＋ロードカートリッジ』

死神さんの鎌が大きくなった

「だから良い子の君は絶対に助けられないとな……気刃一閃……！」

空港の天井に向かって紅い刃が飛んでいって……切り裂いた

隙間から空が見える……

「よっこいしよ……」

死神さんは大きな……お父さんより太い手で私を抱えた

「……死神さんは優しいんだね」

ポツリと言ったら死神さんはクスクス笑って言った

「知らないのか？ 死神は良い子にはとっても優しいのさ」そう言つて私達はフワッと舞い上がった

「君……お名前は？」

死神さんが尋ねてきた

「スバル…スバル・ナカジマ」

死神さんは何故か驚いている

「大将の娘…か…助けられて良かった…死神さんは…って言うんだ」

…あれ…何だか眠いや…よく聞こえ…ないよ…

外に出て騎士甲冑を消して、多分疲れがドツと来て寝てしまったスバルを抱えたまま大将と救護を探す

…いた！

「大将！娘さん見つけたぞ！！」

大将は驚きながらも喜んだ

「そうか……でかしたトータス、ありがとう……」

嬉しいのか涙を流している

「泣くなよ大将…助けるのは当たり前だ」

スバルを大将に渡して指揮官に会いに行く

色々と報告しなければならぬからだ

…にしても死神さん…か

とっさに本物の死神のフリをしたけど成功だな

『ボス、見事な演技だ』

トーマントも誉めてくれた

「まあ終わり良ければ全て良し…報告して晩酌でもするか…」

『飲み過ぎるなよ？』

「うるさい」

そして時は流れる

私は魔導師試験の最中ちょっと前にティアナに話した死神さんの事を思い出した

「それがアンタ憧れの死神さん？」

ティアナはヘンテコな顔をしている

「ホントだよ！」

確かに私を助けてくれたのはドクロの死神さんだった

「でも…あの空港火災事件はなのはさん達が解決したんでしょ？」

……そう…そこなのだ

私はその死神さんの名前を知らないし、どこに居るのかもわからない
「本局にいないなら…誰なんだろう…けど…絶対に見つけるんだ！
！」

助けてくれたあの死神さんに今の自分を見て貰いたいから

ターゲット目掛けてリボルバーナックルを手刀の様に振りかぶり、
カートリッジを排出する！

膨大な空色の魔力が1つの刃をリボルバーナックルを中心に作り出す
繰り出すのは記憶を頼りに作り出した…あの死神さんの魔法！！

「切り裂け！気刃一閃！！」

ズバァン！と音を立てターゲットは真っ二つになった

試験が終わった後はやてさん達から機動六課への誘いがあり私達は
受ける事にした

そして…そこで憧れの人に出会えるなんて夢にも思わなかったのだ
った…

if もしトータスが空港火災でスバルを助けていたら（後書き）

所々ドナ○ドミたいなしゃべり方になってしまった

補足説明です

ティアナ達は1つ勘違いをしていてトータスがなのは達と一緒にの本部部隊だと思っています

またゲンヤがスバルにまだ教えていない事とGINGAに口止めしているからです

理由はスバルが、記憶を頼りに死神のバリアジャケットを作ろうと
していた為です

部下なら許せても愛娘が死神になるのは嫌だったのでしょう
更にトータスはGINGAに惚れちゃってるので姉妹喧嘩を見たくなくな
ったからです

結局はトータスは派遣されるので、この世界のトータスはスバルと
GINGAとの三角関係ですね

第二次紅金戦争！（前書き）

出来ました！

感想あればどうぞ！

第二次紅金戦争！

「……何故こうなる」

俺は溜め息を付いた

トーメントはシャーリーに整備してもらっている
つまり第2デバイスのエンブレムを使用している

「フフフ…まだだよ？」

フェイトが妖艶な笑みを浮かべて笑う

しかし、目が笑ってない

理由は簡単だ

エリオがどうも俺みたいになりたいとフェイトに言ったらしい
シグナムがエリオに薦めたらしいのだが…エリオとフェイトの考え
方には大きな隔たりがある

エリオの考えは戦い方を真似たい、習いたい

フェイトの考えは見た目…つまり騎士甲冑を俺みたいにしたいだ

……カッコいいと思うんだがフェイトは嫌らしいし、成って欲しくないらしい

結果…前回に比べ更に暴走している訳だが…キツイ

本来、陸戦型の俺と空戦型のフェイトは相性が悪い
だからこそ俺は前回の戦いの際にはトーメントでのカウンター狙いでいったのだ

しかし…今回はエンブレムと言う突き、撃つ武器だ

「どうしたの！？まだまだいくよ！」

つまり縦のレンジは長くとも横は狭いのだ

「クソッ…当たらん！！」

魔力弾を発射するが全て避けられる……

流石は最速の魔導師だけあるな…

「余所見していて良いのかな！？」

なっ…しまっ…

「最近ティアナ動きが良くなったね」

なのはさんがあたしに話し掛けてきた

「ありがとうございます、トータスさんやなのはさんのお陰です」
なのはさんはちょっと意外そうな顔をして言いました

「トータスさん？ティアナは何を教えて貰ったの？」

そう言えばなのはさんには話していなかったなのでこの間頂いたアドバースを話した

「ふむ…やっぱり年上だけあって含蓄があるね」

なのはさんは考え込んで言った

「ティアナは気付いた？トータスさんの戦い方に」

……正直豪快とは思えない

「その顔はまだ気付いてないね…トータスさんの戦い方は魔導師としての一種の理想型なんだよ」

「理想型……？すみません良く分かりません」

するとなのはさんは笑っていった

「相手が空戦型ならカウンターで叩き落とす、高機動型なら受けながらの反撃、防御型ならバリアブレイクで…何があっても自分が最も戦いやすい戦法で戦う…同じ騎士だけど万能型のシグナムとは違った完成型…トータスさんは相手を自らの土俵へ引きずり込んで戦うと言うやり方なんだよ」

……確かに…自分より上の相手を相手の土俵で戦って勝つなんて難しい

けどそれが自分の土俵なら？

勝率は確かに上がる

「とても…考えられてるんですね」

あたしが言ったらなのはさんも苦笑いして言った

「こればかりは経験だからね：私もみな「グアアアア！！」：ら、この声は！？」

トータスさんの声だ！！

慌てて2人して駆け出し悲鳴の方へ向かう

途中シグナム副隊長やはやて部隊長と一緒に走った

けど途中はやて部隊長がボソリと『第二次紅金戦争か？』と呟いていた：何だろうそれ？

そして：たどり着いた私達が見たものは：へし折れた銃槍、凄まじい迄のクレーター、気絶しているトータスさんにボロボロに成りながらやり遂げた表情のフェイトさん：

「遅かったんか：第二次紅金戦争を防げなかった：」
はやて部隊長が天を仰ぐ

余所見をして気を取られたトータスさんの後ろに回り込んだそして鎌と化したバルディッシュを振り抜く！！

「っ：うおおおおああ！！」

けどトータスさんが無理矢理、体を捻って銃槍の横っ腹で殴り抜いてきた！

歴戦の猛者は伊達じゃない：間違いなく私が戦ってきた人の中でシグナムやなのはと並ぶ強さだ！

でも：私は負けない！

エリオを死神にさせないために！！

バルディッシュと銃槍が激しくぶつかり合う

そして：私のバルディッシュが銃槍を切り裂いた

「ぐお：ん？俺は一体：？」

目が覚めたら医務室の天井だった

そうか：俺はフェイトとやり合って負けたんだな：

「ウソ！もう目覚めたんですか！？」

シャルさんがビクリしている

「何をそんなに？」

何時間寝てたんだ一体？

「普通半日は目覚めないのに：：半分の3時間弱で起きたのよ？信じられないわ」

シャルさんが理由を説明した

「まあ：頑丈さが取り柄だからな、結局どうなったんですか？」
シャルさんに尋ねると同時になのはが入ってきた

「大丈夫だよトータスさん、私がキツチリOHANASHIしたから」

：何だろう、安心できない

「にやはは、ちょっと頭を冷やしてもらっただけだよ？」

ちよっと？なら良いんだが：

後日エリオの指導を週1回受け持つ事になった

自分で言うのも何だがシャッハと同じく陸戦トップクラスの俺ならエリオに余すところ無く教えられるんじゃないかと思う
さて楽しみだな

オマケ

「ねえ：どうしちゃったのかな？フェイトちゃん」

なのはさんが滅茶滅茶怖い：トータスさんボロ雑巾みたいになってるもの

「えっと：：なのは？」

フェイトさんが聞き返した

「トータスさんに何してるの？模擬戦にはやりすぎだよ」

確かに：：辺りはまるで怪獣が暴れたかのようになっている

「でも！エリオが死神にな「エリオは戦闘技術を陸戦のエキスパートに教えて貰いたかっただけだぞ…」……へ？」

「……つまりフェイトさんの勘違いの暴走でトータスさんはああなったの！？」

「少し…頭冷やそうか…「な…なのは…」デイベイン…バスター！」

ピンクの光線がフェイトさんに直撃した

「いやあああああ！！」

「「「……………」」」

もう何も言えないや…

第二次紅金戦争！（後書き）

へし折れたエンブレムに合掌

さて次回は2ちゃん風にしてみたいと思います

スレッド名は管理局の有名人を語るスレです

トータス以外に1人降臨させようと思うので出して欲しい人がいたら書き込んで下さい

補足

後書きの編集が上手くいなかったなのでこちらに書きます

エンブレムがへし折れたのは槍だからです

槍は縦の衝撃には強いですが横の衝撃には弱いのでこうなりました
切り裂かれたと言うよりも魔力刃の衝撃＋フェイトの突進の勢いに加え不安定な姿勢での振り抜きが重なって折れてしまった
と言う訳です

決して非殺傷が切れているわけではないので安心してください

無理矢理な感がありますが物語の都合上こうなりました

不快な念を催された方に深くお詫びいたします

番外 とある掲示板（前書き）

出来ました…

つ…疲れた、スレッド形式がこんなにキツイとは

注意

筆者の力ではIDや月日時間は書けませんでした
申し訳有りません

番外 とある掲示板

1…名無しの管理局員

ここは管理局の有名人を愛で語るスレです
本局、地上問わず色々語りましょう！

2…名無しの管理局員

≫1乙

やっぱり最初はT教導官でしょう！！

3…名無しの管理局員

≫2

まあ最初だし有名人からだよな
笑顔可愛いし

4…名無しの管理局員

でも管理外世界のアニメのロボキャラにそっくりなんだけど

5…名無しの管理局員

≫4

それはどんなだ？

Tさんみたいに美人さん？

6…名無しの管理局員

≫4

ビーム、ガンガンぶっぱなすのか？

7…名無しの管理局員

≫5，6

いや最近放送してる機動戦士ガ○ダムのビグ○ム

8..名無しの管理局員

≫7

ちょwwおまwwww

9..名無しの管理局員

コーヒー吹いた(笑)

10..名無しの管理局員

≫7

似てるけどさぁwwww!

そんな事いったら仲良しの執務官にやられるぞ!

11..名無しの管理局員

≫10

確かに、付き合ってるらしいしな

12..名無しの管理局員

なん…だと…

13..名無しの管理局員

≫11

プライベートでルームシェアしてるらしいぞ?

14..名無しの管理局員

mjsk?

15..名無しの管理局員

ふう…初恋が……

16..名無しの管理局員

≫15

大丈夫！

まだ狸部隊長がいるじゃないか

17..名無しの管理局員

ちよっ…狸って…

いや、間違っていないな

18..名無しの管理局員

確かに…イメージ的にそうだ

19..名無しの管理局

SSランクなのに狸www

20..美人さん

誰が狸や！狸！

21..名無しの管理局員

≫20

まさか！降臨なされた！？

皆のもの！祭りだぁー！！

22..名無しの管理局員

狸祭りだ！

ワッショイ！ワッショイ！

23..名無しの管理局員

ワッショイ！ワッショイ！

24..名無しの管理局員
ワッシヨイ！ワッシヨイ！

25..名無しの管理局員
影が薄いけど、祭りだぁー！！
ワッシヨイ！ワッシヨイ！

26..美人さん
≫25
しばくで？

うう…なんでウチが狸なんやぁー！！

27..名無しの管理局員
≫26
確かG三佐が言っていましたよ？
『アイツは…狸だな、イメージ的に』と
あ…俺その隊の二尉です

28..美人さん
≫27

ありがとうございます
ちよつと今から家族と一緒にしば…ゲフンゲフン！…問い詰めにい
ってくるわ

29..名無しの管理局員
三佐ぁー！！逃げろぉー！！

30..名無しの管理局員
SSランクが牙を剥く…だと！？

31..名無しの管理局員
陸士隊終了のお知らせ

32..名無しの管理局員
お：俺のせいでおやっさんが：

33..名無しの管理局員
》32

諦めろ：三佐の分まで生きるんだ！！

34..名無しの管理局員
狸：か

動物で思い出したけど：カジキ背負って戦ってる魔導師みたんだけど

35..名無しの管理局員
》34

ちょっとkws k

36..名無しの管理局員
》34

カジキ背負って：てどんなんやねん

37..孫です
》34～36

申し訳無いが：うちの爺さんだ
カジキ背負って飛んでたら間違いない

38..名無しの管理局員
》37

45…名無しの管理局員

≫44

何そのハイパーじい様…怖い

46…名無しの管理局員

伝説の戦士なのに…カジキ

47…孫です

アレは普段使ってる奴だな
本気のデバイスはまた違う

48…名無しの管理局員

≫47

カジキじゃない？クジラか！？

49…名無しの管理局員

≫48

イルカかも知れん

50…狙撃手

≫48

昔、ハムとかイカりを担いでたのをスコープで見たが

51…名無しの管理局員

≫50

ハムとかイカリって…なんだ！？

52…名無しの管理局員

久し振りにみたら盛り上がってるじゃないか
で…孫ですさん？ソコんところどう？

53..孫です

ハム、イカリは気分転換で振り回してたな
もっといけてる大剣だった

ダオラ：とかいってたな

何しろ見たのが10年近く前だ

54..名無しの管理局員

もう：ハムとか振り回してる時点で管理局終わってるわ

55..名無しの管理局員

じゃあな孫ですさん！

ありがとう！

56..名無しの管理局員

Sランクには変態が多いのか？

57..名無しの管理局員

≫56

F執務官のソニックフォームは駄目だ

別なところがカートリッジロードしてしまう

58..名無しの管理局員

→に同意

59..名無しの管理局員

≫57

人を助ける時にどこをロードしてるんだお前はWWW

60..名無しの管理局員

≫59

ロードカートリッジ！

いくぜ：彼女に向かってデイベインバスター！！

61…名無しの管理局員

≫60

モゲロ

62…名無しの管理局員

≫60

モゲロ

63…名無しの管理局員

≫60

爆発しやがれ

64…名無しの管理局員

≫60

リア充は帰れ

65…名無しの管理局員

≫60

モゲロ

俺は今まで陸士隊に居ただけど、こないだ本局に来たんだ
コッチの死神さん美人だな

66…名無しの管理局員

≫65

地上部隊にも死神がいるのか？

俺は本局だから聞いたことがないな

67…聖堂騎士

≫66

事実だ

俺は聖堂騎士なんだが…最強の上司と互角以上にやりあってた……
鎌を片手に

68…名無しの管理局員

≫67

おい…聖堂騎士の最強っていったら陸戦AAA+だろ？
そいつのランクは？
つか誰か画像ない！？

69…名無しの管理局員

≫67

高ランカーならみんな本局だが…地上にもいたのか

70…名無しの管理局員

≫67

その最強上司って…確かナイスバディのS空尉と互角にやりあえる
猛者だろ？

地上にもいたのか…そんな強者が…

71…聖堂騎士

≫68～70

画像だ、jpg、amp、gamp

上司さんとは数年来の友人でライバルらしい

72…名無しの管理局員

≫71

オイオイオイオイ！？

ちよっwwww

いいのか！！マジで怖いんだけどおおおお！！

73…名無しの管理局員

≫72

激しく同意だ！

トラウマメーカーだろ！？

つうか管理局員にあるまじき格好だろ！？

74…名無しの管理局員

≫72

ちよっと待てや！！

管理局員じゃなくて死刑執行人の間違いだろが！！

75…名無しの管理局員

≫72

鎌って：イヤアアアア！！グフツ

76…名無しの管理局員

≫75

誰か！？衛生兵を早く！？

77…名無しの管理局員

…誰かスペック教えて：

78…孫です改め本人

≫72ゝ76

そんなに恐いか？

イカしてると思うんだが

≫77

陸戦S＋ 空戦A 魔力量Sーで魔力変換資質ありだ

79…名無しの管理局員

≫78

アンタが本人！？

80…名無しの管理局員

≫78

ちよっ…まで

何…だと…

81…名無しの管理局員

≫78

何者なんだよお前ら家族は…

つうか…じい様がこれでアンタもこれか…

82…名無しの管理局員

お前たち…管理局員無差別最強板に彼らしき人物が出てるぞ
下に引用する

1…名無しの実況者

今回も始まった管理局員無差別最強板ラウンド41！
今まで出てきた方々を紹介するぜ！

T教導官…可憐な顔でも容赦ない！
エースオブエースな空飛ぶ重戦車！

F執務官…その速度を捉えるものなし！
空中駆ける金の死神！

狸部隊長…腹黒さも実力も天下一品！
魅せますSSランクのフルパワー！

S二等空尉…凄まじい太刀筋は悪を全て断つ！
狸部隊長の腹心の部下！

V三等空尉…小さな体に無限のパワー！
文句言う奴ブツブス！

G准将…御年はなんと69！
しかし技術、肉体、魔力は全て現役！

シスターS…聖堂騎士最強の戦士！
美しさと強さをあわせ持つS二等空尉のライバル！

T一等陸尉…死神と謳われる地上部隊最強最恐騎士！
本局纏めて処刑執行だ！

K提督…イケメン最強はコイツか？
文武両道のエリート魔導師！

さあ…開幕だああああ

83…名無しの管理局員
……もう訳がわからん

84…名無しの管理局員
……世紀末だ…誰かハッハーとか言ってそうだな

85..孫です改め本人

≫84

俺は時々シスターSをそう呼ぶが？

86..名無しの管理局員

≫85

言えるのはアンタだけだ

私、ギンガ・ナカジマは密かに端末を切りました

カオスだわ…

トータスさんが普通に参加してるのにも驚いたけど…

「父さん…大丈夫？」

父さんは頬に湿布をはり溜め息をついている

「女ってのは…どこに情報源があるんだが…」

グチグチ文句を言ってるけど犯人が部下のカルタスさんで掲示板だと知ったら…どうするのかしら

……とりあえずカルタスさんがバレない事を祈っておきましょうか…

番外 とある掲示板（後書き）

小説読んでる友人にトータスに固有結界があるとしたらどうなるか？
と言われたので日本語の詠唱をのせます

体は信念で出来ている

血潮は意地で、心は不動

幾度の戦場を越え生存

ただの一度も敗走はなく

ただの一度も諦めない

騎士は独り、倒れる事無く皆を待つ

故にその生きざまに意味がある

その姿はきつと騎士の憧れで有り続けた

割とカッコいいのが出来た

しかし：リリカルだから使えない

死神、過去を話す（前書き）

出来ました！

感想がありましたらどうぞ！

死神、過去を話す

「大変すみませんでした！」

フェイトがいきなり頭を下げてきた

「全部私の早とちりで：あんな事を仕出かして：申し訳無いです」
顔から後悔の念が読み取れるな：さて：こう言うときは：

ゴキンッ！！

「~~~~っ!？」

取り合えず割りと力を込めて拳骨を落とした

因みに近くにこっそり隠れて様子を見ていたシグナムはアレは痛い
と同情していた

手加減してもパワー型の陸戦最強クラスの拳骨：痛くない筈がない

「……俺はお前さんの事情くらいは知ってる、だからエリオやキャ
ロを大切にしているのも分かる：けどな今のままだとお互いに依存
し出すぞ？」

フェイトは頭を押さえながら頷いた

家族：行きすぎて親バカ位ならまだ良いが依存し出すと厄介な事にな
る

「今回の事は別に俺は気にしては居ない、俺は査察官でも何でもな
いしな：だがキャロやエリオはお前を慕って：お前の背中を見て魔
導師になっていくんだ：あいつらの思いは裏切るなよ？」

フェイトは深々と頷いた

「はいっ！分かりました」

さて：言いたいことは言ったしな：あ：忘れてた

「フェイト：エンブレムなんだが、お前の電撃か何かで内部のコア

がイっちゃんでんだ：新しいの注文してるから：「弁償します!!」
頼む：婆さんのデバイスは高いんだ」

その後フェイトと暫く話して別れた
良い子なんだがな：

暫く休憩しつつ缶コーヒーを飲んでいたら真剣な表情をしたティアナがいた

「どうしたんだ、ティアナ？」

ティアナはこっちに気が付くと直ぐに近づいてきて言った

「実は：なのはさんの撃墜された時の写真を見せてもらったんです
……ふむ

「その：トータスさんは墜ちた事とかありますか？」

成程：なのはは自分の訓練の理由を言ったのか

スバルは言わずもながティアナも自信をつけたから言っても大丈夫
と思ったんだな

「……俺は陸戦だから墜ちた事はないが：とんでもないケガを負ったことがあるな」

まあ：聞かせてやっても大丈夫か

「時間はあるか？あるなら会議室に來い：話してやろう」

ティアナは直ぐに返事をした

「はい：分かりました、聞きたいです」

俺達は会議室に向かった

「さて：俺が死にかけたのは16の時だ、当時は陸士隊から本局の
特殊辺境警備隊に臨時招集されたんだ：当時はAAAーだったな」

缶コーヒーを飲んで更に話す

「そしてその世界はモンスターが出る、本来ならハンターが狩るんだがハンターが入れないような場所で大繁殖してたりするんだ：そ
いつらの群れをバラバラにしたりしてハンター達に狩りやすい様に

するのが仕事だったんだがな……ある日とてつもなく巨大に成長したキリンと言うモンスターが襲いかかってきたんだ」

するとティアナが何故か首を傾げている

何故だ？

「そして……キリンの最大の特徴は雷や電気を操ることだったんだが……避けきれなくてな……凄まじい電圧を秘めたキリンの角が左肩を貫通した」

まさか……プロテクションはおろか騎士甲冑までぶち抜かれるとは思わなかった

「それで……どうなったんです？」

ティアナは息せき切って聞いてきた

「血は噴き出すわ、流れた電流のせいで筋肉はズダボロだわ、リンカーコアは麻痺して動かないわ、おまけに所々は黒焦げだ……普通は死んでるらしいんだがラッキーな事に生きてたんだ」

ティアナは想像したらしい

顔が真っ青だ

「それで死ぬほどリハビリして、爺さんの所で筋肉つけて復帰したって訳だ……今となっちゃ良い思い出がな」

そこでティアナが首を傾げた

「良い思い出ってどういう事です？」

むっ……分かりづらかったか

「あの事件の後必死にリハビリやらトレーニングやったからな……以前より強くなれたのさ……それにな、過去は大事だがそれをいつまでも引きずるのは駄目だと思うんだ……過去は過去、それがあるから今がある……俺は過去を誇りに思ってるんだ」

俺は缶コーヒーを飲み終えた

「ありがとうございます……勉強になりました」

ティアナは頷きながら言った

「そうか……それなら良かった」俺は席を立った
さて……エリオを鍛えるところかな

オマケ

「まったく…エンブレムを壊すなんて…珍しいねえ」

アンナはデバイスを整備しながら愚痴を言った

「ん…？あの子ポイントが溜まったのかい？なら一個あげなきゃね…」

アンナのデバイスショップ…アンナ・ウェポンズ・ワーカーズでは店の常連にのみポイントが溜まった場合デバイスをオマケにポンとつけるのだ

常連は家族を除くとシャツハくらいしかない

シャツハもシャツハで整備を依頼するくらいだが

アンナの整備や開発の能力はシャーリーはおろかアテンザさえ悠々と越えている

……とんでもバリアジャケットや騎士甲冑でぶち壊しにしているが

「……適当に入れとくかな」

ポイントとつまみ上げトータスに送る新ガンランス…ブラックゴアバスターの箱に入れた

それはブースト兼アームドデバイス…ブラッドフルートと言った…

死神、新装備＋新フォーム（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

死神、新装備＋新フォーム

「お、宅配便か」

六課の入り口で婆さんからの荷物を受け取った部屋に帰りベリベリとはがす

すると…黒のブレスレットに真紅のネックレスと手紙が着いていた『我が孫へ、今回のデバイスは破壊力に優れたブラックゴアバスターだよ、アンタの六課時の役割を考えてこのデバイスには空戦用の騎士甲冑のデータが入ってるよ…と言っても対して使わないだろうけど、もうひとつはブラッドフルート、ブースト兼アームドのデバイスさ…カートリッジをロードすればバインドボイスも出せるよ、大事に扱いな』

……ブラッドフルート、アレか!?

「ブラッドフルート…セットアップ」

『ギイイヤアアアア!』

……無事に騎士甲冑は纏えたが…何だろうこの感じ…取り合えず演奏してみるか

「ティアナ!! ター『ギイイヤアアアア!』」キャアア!! 何々!?

突如として響く耳をつんざかばかりの音

慌ててその音源を探すと…

銀色の古代の彫像を思わせる鎧の騎士が化け物としか言い様がない笛を空を飛びながら吹いていた

「……凄くシュールなんだけど…」

なのはは顔がピクピクひきつった

あんな独特なデバイスを使うのは六課では独りしかない
「トータスさん…だよね？」

しかし…死神じゃない

「あっちの方がカッコいい…」

スバルは言った

正しくカッコいいだろう

ストーンと騎士は着地し騎士甲冑を解除した

やはりトータスだ

「トータスさん…さっきのは？」

なのはが尋ねる

「ああ、アレか…笛はブラッドフルートと言ってブースト兼アームドデバイスだ…さっきの騎士甲冑はクシヤナフォームだな…制限時間があるが空戦能力をかなり引き上げる物だ…小回りが効かんのが弱点だ」

トータスは普通に言った

「見た目に反して意外と軽いんだよなフルートは…」

そう言って持ち上げたのだが…笛の先端…即ちフルフルの口の部分がなのはの眼前にきた…来てしまった！

「イヤアアアアアア！！」

バッターンとなのはは倒れた

「お…おいっ！！しっかりしろ！！」

デバイスを元に戻し慌ててなのはさんを担ぎ上げて医務室に駆け込んでいった

「相変わらず独特なセンスとデバイスよね、トータスさんは…スバルは…スバル？」

反応がないのでそちらを見たティアナは止まった

持ち上げる過程でスバルにも見えてしまったのだ！！

あの恐怖のホラーな口を！！

スバルは……立ったまま気絶していた

「スバルウウウウ！！戻ってこーいっ！！」

ティアナの叫び声が響き渡った

なお、この時の映像はレイジングハートがバッチリ保存しており、恐怖の顔面事件に引き続き再び行われた上映会ではグリフィスが逃げ出し、はやては震え、ヴォルケンリッターは引き吊り、リインは涙が止まらなかった

フルフルの口のドアップにあの声は恐ろしいのだ

トータスは即効で呼び出されブラッドフルートの隊舎内使用禁止が命じられた

六課のメンバーのトータスに対する最初の印象は

『少し変わった人』だったがつい最近では

『恐怖の象徴者』になってきている

それをトータスは知らない…

オマケ

六課の前にとある女性が立っている

背は高くプロポーションは中々の物だ

「フフフ…遂に来れたぞ機動六課！私の可愛い息子はちゃんとやっているのか？久々に会うから嬉しくて堪らん！ああもう我慢できない！今行くぞ愛しい我が子よ！！」

そしてその女性は拳を引き…六課の壁に叩きつけぶち壊し突撃した

「トータスウウウ！！お母さんが遊びにきたよおおお！！」

サーラ・ヴィレン

最高峰のG級ハンターにしてトータスの母親

ヴィレン家の最高権力者が機動六課に襲来した……

死神、新装備＋新フォーム（後書き）

今回はトータスの異常な肉体強度の秘密が明らかに！まあ…大半の方はお分かりでしょうが

補足

サーラ・ヴィレン

最強レベルのハンター

普段使うのは大剣と狩猟笛

管理局のデータに生けるロストログア、ミラルーツを笛で討伐した四人組のリーダーとして名が残っている

死神、暴露される(前書き)

出来ました！

感想があればどうぞ！

死神、暴露される

六課内のある会議室…そこに六課のメンバーが集まっていた
訪問者…と言うより壁をぶち抜いて現れた美人女性侵入者がトータ
スの母だったのだ

トータスはなのはと張る防御力を使い教導でまどろっこしいと言う
理由でビルの壁をぶち抜いているが母親のサーラも待ちきれないと
言う理由で六課の壁を素手でぶち抜いたので、はやて達は似た者親
子と言う印象を持った

「いやーゴメン愛息子に会えると思ったたら止まらなくなってな」
全く…母さんは突飛すぎる

「少しは自重して「何か文句が？」…無いです」

くそっ…逆らえん

皆が呆気にとられている

母さんも気付いたらしい

「ああ、トータスが大人しい訳か？…厳しく仕付けたからな」

ニコニコ笑いながら言う母さん

「何処の世界に仕付けと称してブレーンバスターやリアットをす
る親がいる!?」

母さんには感謝している

鎌の振り方を教えてくれたのは母さんだし、狩りに連れて行ってく
れて洞察力の訓練もしてくれた

しかし…皿を割っただけで三回転半するようなビンタを繰り出す必
要はないと思う

「良いじゃないか、頑丈なのはヴィレン家の特徴の一つだし何より
私の血を引いているんだからな!」

カラカラ笑う母さん

「トータスさんが丈夫なのは…血筋ですか？医学的に異常としか考えられないんです…」

シャルが言った

「ああ、それは私の血を引いてるからな」

そう言いながら母さんはキャロのフリードを見た

「私の世界は10mを超える飛竜や古龍と言ったモンスターが彷徨いているんだ、私達はそのつらをハンマーや剣を使って狩っているんだ、だから私達は常人より身体能力が高いのさ、それにヴィレン家の身体能力が加わって化け物みたいな回復能力が生まれたのさ…：しかしお前は言わなかったのか？」

母さんが呆れぎみに言った

「血筋だと言ったぞ」

別に言わなくても良いじゃないか

そう思いつつコーヒーを飲んだ時、母さんがニヤリと笑った

「じゃあ…初恋がリンディさんってのは？」

「ブボアッ！！」

コーヒーを吹き出した

「それってサーラさんホンマですか！？」

はやてが食い付いた

「もちろん！士官学校に入った時リンディさんを見て恋しちゃったんだな」

ああ…知られたくない過去が…

皆がニヤニヤしてるから！

「か…：母さん、そこら辺に「後は…女の気配がしないからロツサ君とウワサが…」もう辞めてくれえええええ！！」

魂からの絶叫だった

ああ…過去の恥部が…忘れていたかったのに…

愛しい息子のトータスはもう勝手にしろ！！と言いながら出ていった
「あの子は良い上司か？」

六課の新人達に聞いてみた

「ええ、優しいし強いです」

エリオ君がそう言った後ティアナちゃんがまた言った

「私は自信を持って！とアドバイスを頂きました」

あの子らしいね

「素晴らしい腕だ、あれだけの騎士は中々いない」

シグナムさんが言い

「でも：ちよつとずれとるよな？」

『ああ、確かに』

はやてちゃんの声に皆が頷いた

あらら：トータス、言われてるし

「安心した：トータスと仲良くしてやってくれ」

皆が頷いた：愛されてるな

「もう帰るのか？」

俺は母さんに話し掛けた

「ああ：お前の顔を見れたし母さんは満足だ：トータス」

母さんの声が不意に優しくなった

「なんだ？」

そう言ったら

「男だからって背負い込むなよ？辛くなったり苦しくなったら帰ってこい、母さんは何時でも旨い料理作って待ってやるからな」

笑いながら言った：ジーンと来た

「ああ：そうさせてもらうよ、母さんも体に気を付けてな」

……やっぱり母さんには敵わないな

「フッ、安心しろ：お前も気を付けてな」
母さんは手を振って去っていった

オマケ

「……………あり得ない」

シャマルが物々言っていた

「どうしたんだ？」

私は気になり話し掛けた

「あ：シグナム、これ：」

シャマルはとあるデータを見せた

握力か？

トータスは：壊したので測定不能100？オーバー
大したものだ

「違うの：これ：」

ん？これはトータスのお母さんのサーラさんのか
ゲスト、サーラさん

トータスさんの破壊した握力計をより粉々に
推定握力130？オーバー：

「……………化け物か？」

血は争えんと言うことか：

死神、暴露される（後書き）

最近ユーザーページの活動報告に小ネタ小説を載せています

2日に1回は更新してます

意見次第では正式に連載しようと思うのでご意見があれば宜しくお願いたします

死神短編集（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

死神短編集

1 雑誌

「あ…新しい管理局通信だ」

ティアナとロビーでくつろいでいたら新しい管理局通信があった
えーっと…見出しは…

1 美人揃いの機動六課に迫る！！

2 毎度お馴染みリンディ統括官の優雅な1日

3 犯罪者のトラウマが増加？地上部隊の伝説の死神に迫る！

4 もう…休ませて…

悲しい叫び…過労で入院続出無限書庫に潜入

5 マグロ担ぎの准将、近々名誉少将に昇進か？

6 教導隊員が語る白い悪魔！

「我々は…所詮ジ○だった…ビ○ザムには勝てない！」

7 人気アニメの魔法ヤクザリリカル次郎長！ついに実写映画化決定！

主演はナオト・タケヤマ！！

「ああ…！実写化されるんだ！」

あのアニメよく見たなあ…

決め台詞がかっこよかったな

『おひけえなすって！おひけえなすって！管理局のいぶし銀！！次郎長たあ…俺の事だ！！』

うん、渋いね

「トータスさんよねコレは…」

ティアナの言った記事は…と、トラウマ続出…そりゃあ骸骨が追い掛けてくるのは嫌だ

鎌を振り上げながらなら更に恐い

「六課って…ある意味有名よね」

うん…美人方面と何故か1人ずれた方面に…

2 トータスの部屋

トータスは1人部屋に住んでいる

色々と物を持ち込んでいて何処と無く田舎と言うか味がある部屋だ
ザフィーラ（人間時）はトータスに誘われて酒を飲み部屋に入った

「なんというか…不思議な部屋だな」

俺は素直に思った

「そうか？俺は落ち着くがな、つまみを焼いてくるから適当に飲む
か回りを見ていてくれ」

そう言いつつトータスはつまみを焼きに出掛けた

グルリと辺りを見回す

何かのバカデカイ角にキラキラ輝く…宝石だと!?

他にも謎の鱗や甲羅がオブジェクトとして置かれている

「お待たせ…焼けたぞ」

トータスがデカイ骨付き肉から肉を薄く切った物を皿に載せてやってきた

「ああ…では一杯やるか」

俺はグラスに酒を入れた

「ああ…たまにはな」

男2人：静かな酒宴が始まった

3 ヴォルケンニャッター！！

「待っててニャご主人様！行くぞみんなニャ！！」

一匹のコックの服を着たネコっぽい何かが叫んだ

「「「ニャー！！」」」

そして残り四匹が声を揃えて言った

「いざ…六課へニャ！！」

五匹は玄関から突撃していった

「は？」

はやては止まった

「む…」

シグナムも止まった

何故なら彼女らの視点の先に涙目のネコっぽいコックがいた

1mもない…しかし…

（…可愛い）

とても愛くるしかった

「ニャ：ニャんだ！？僕達は迷子じゃにゃいニャ」

しかしプルプル震える様子は間違いなく迷子だ

しかしはやて達は可愛いらしい声で喋ったのに驚いている

「あんたら…なんなん？」

はやてが尋ねた時

「僕ら最高のコック集団！！」

「ご主人様の為に命を賭ける！！」

全員がポーズを決めた

『その名も！ヴォルケンニャッター！！！！！！』

ビシッと決まった

呆氣に取られるはやて

そこにフェイトとなのはがやって来た

「はや…」

フェイトはいいかけて止まり

「にやはは…どうしたのフェ…」

なのも止まった

そしてほぼ同時に…

『可愛い…!!!』

抱き締めた

「ニャ！？嬉しいけどやめてニャ！！」

なのはに抱き締められ満更でもないネコっぽいコック

「い…息が…できにゃ…」

フェイトの胸で窒息しそうな奴

辺りがカオスになってきた時だった

「何の騒ぎだ…ってお前達何でここに!？」

トータスがやって来て叫んだ

『ご主人様あああ!!』

ネコっぽいコックは一斉になのは達を振り払いトータスに飛び付いた

「久しぶりですニャご主人様！寂しくて会いに来ましたニャ！！」

『ニャー!!!!!!』

トータスは嬉しそうに言った

「そうか…じゃ今日の飯はお前らに任せるよ」

トータスの飼い猫…もとい使い魔的存在の家族…アイルー達ヴォル

ケンニャッターは一斉に言った

『了解ニャー!!!!!!』

「あれ…何なんだ？」

シグナムはトータスに尋ねた

「ああ…あれは俺の仲間のアイルーって獣人だ、我が家に何年も前

からいて今は俺が主人だ：時々実家に帰って一緒にいたんだが：六課に来てから一度も戻ってないからな、寂しくて来たんだろ」

しかしシグナムは聞きたい事があった

「ヴォルケンニャッター：とは？」

するとトータスは苦笑いして言った

「ヴォルケンリッターにアイルーのリーダー：アルって奴が憧れたんだよ」

シグナムは複雑そうだ

憧れは嬉しいが妙に萌え系の名前になっているからだ

「まあ：いいさ、お前らも食って驚くなよ？」

トータスは笑っていった

その日のヴォルケンニャッターの作った超豪華な夕食は皆に振る舞われエリオとスバルの大食いコンビも満足し皆が美味しく食べたそうだ

死神、ハロウィン(前書き)

出来ました！

ちょっと遅れましたけど

感想あればどうぞよろしくお願いいたします！！

死神、ハロウィン

「ハロウィン？」

俺は尋ね返した

「そうやで、明後日の休みに皆で仮装すんねん、ま本来はお化けやけど何でもOKやで！」

はやてはノリノリだ

「ふむ：分かった、騎士甲冑のデータを弄ればどうとでもなるしな何より面白そうだ

「あ：あんまし怖いのはアカンよ？」

はやてが言ってきた

良かった：恐いのにしろって言われたら自らお蔵入りにしたあのデータを引っ張り出さなければいけないしな
何より：アレは俺でも暗闇ならビビるし

俺は自室に戻った

「トーメントをアンナウェポンズワークーズに接続して：と：どれにするかな？」

敢えて怖いのではなくカッコイイのを選択するのも悪くない

『ボス、これはどうだ？』

トーメントがデータの海から拾い上げたのは：マフモフか、案外いかもな

む：Sソウルも捨てがたいし：悩むなあ

『ボス、そういえば儀礼用に一個作っているぞ？』

ああ！それがあったか！！

「確かに：ビストロやアイルーフェイク以外にも作ってたな：確かに悪くないなあ衣装は」

レジアス中將があんまり五月蠅いから中將に会うときだけ使ってる奴があった

よし：これで行くか！！

「ねえはやてちゃん…トータスさん大丈夫？」

魔女っ子なのはちゃんが話しかけてきた

因みにうちはなのはちゃんにタヌミミをつけられた…尻尾付きで

「だ…大丈夫やって！！私こわないもんにしてなって言うたもん」
しかし雪女フェイトちゃんがすかさず言った

「でも…トータスさん、少し他人とずれてるよ？」

そこなんやなあ…

トータスさんは恐怖心が薄いんか知らんけど私らが恐がる物でも恐がらん事が多い

つまり…トータスさんが恐くないと思ってもうちらには充分怖い事はあり得る

ふと横を見るとウサミミヴィータがネコミミシグナムに飴を貰っている…ヴィータ、上げる側やろアンタ

その横ではドラキュラエリオがキャラを待っている見たいや

イヌミミスバルはお菓子を食べまくり、保安官ティアナは突っ込んで

何かなハロウィンっちゅうよりコスプレやな

「ん、キャラか？」

キャラは…お姫様か？

そんな感じの服を来ていた

「え…トータスさん？」

キャラは俺を見て驚いている

まあ数ある防具の中でも見た目が良い奴だし普段とは印象も違うだろう

「ああ、仮装したんだ…似合わないか？」

するとキャラは目をキラキラさせていった

「いえ、そんな事ないです!! カッコイイですよ!!」

そう言われるとありがたいな

キャラをヒョイと持ち上げて肩に座らせる

「わ…高い」

キャラは驚いている

「それじゃ行こうか、キャラ」

俺はキャラを担いで歩き出した

「すまん、遅れた」

私はトータスさんの声がしたので振り向いた

するとそこには赤い帽子に白いオシャレな服にブーツ、腰にレイピア? みたいな物を下げた騎士がいた

……まともだ、カッコいいかも

「よつと、どうしたなの? ……ああこれはギルドナイトシリーズと言う騎士甲冑だ、一応カッコいい奴で恐くないのはこれぐらいしかなくてな」

にやはは…トータスさんもこんなの持ってるんだ

「ううん、似合ってるよ」

トータスさんはホッとしたみたいだった

さあ後は私も楽しもう!!

オマケ

宴もたけなわの頃

王様ゲームが始まりはやてが王様になった

「八番…皆を驚かせるんや!」

八番…俺か

「八番は俺だ…さてどうするか…」

回りが何をするのかジィッと見てくる

これは…プレッシャーだ

『ボス、ハロウィンはお化けを扱う、化け物なアレはどうだ?』

アレか：驚かせるには一番だが：

「はやて：どうなっても知らんがいか?」

念には念を押す

「ええで!! どんとこい!!」

じゃ：しますかね

「トーメント、セットアップ！」

現れたのは死神ではなく：爪に恐ろしい：悪魔と龍が混ざったかのような顔面

背中に生える鋭利なトゲ

ミラバルZ：あまりの怖さにトータス自身あまり纏わない騎士甲冑である

『キヤアアアアアアアアアア!!!!!!!!』

六課のメンバーは大パニックになってしまった……

「こうなる事が多いんだよな：これ使うと」

犯罪者は一気に抵抗をやめるので楽なんだが

取り合えずこの阿鼻叫喚をどうにかしなければ……

死神、激動の1日（前書き）

うゝん

少し違和感が…

死神、激動の1日

「……該当なしですか」

カリムは深々と椅子に腰掛けた

自らが持っているレアスキルによる預言

それを防ぐために戦っている機動六課

しかし問題なのは最近出てきた新たな文言…

ミッドチルダの長い歴史の中でもそれに該当する生物はいない

少なくともその詳細について知らなければはやてに教えることは出来ない

はやてのプレッシャーを増す事になるからだ

「そもそも…古の龍なんてどうすれば分かるのよ…」

その時側近のシャツハが言った

「あの…もしかしたらですが…アイツなら知っているかも知れませんか」

カリムは驚いて尋ねた

「本当ですか？その人物は？」

シャツハは落ち着いて答えた

「トータス・ヴィレン、私の友であり…私が知るどの陸戦魔導師よりも強い騎士です」

今日は久々の休暇

エリオはキャロとデート

スバルはティアナとお出かけ

俺は図書館にでも行こうと思った時だった

『ボス、回線がきている』

トーメントが伝えてきた

「回線か…シャツハだと？」

繋いでシャツハと会話する事にした

「シャツハ、何のようだ？またロツサが脱走したか？」

するとシャツハは否定した

「いや、そうじゃない…お前は龍について詳しかったよな？」

龍？いきなり何を言い出すんだ？

「まあ詳しい方だが…厄介事か？」

俺が尋ねた後シャツハは言った

「そうかも知れん…シスターカリムがお待ちだ、直ぐに来てくれな
いか？」

……………

「おい！少将殿だと！？………ったく、しょうがない…友人の頼みだ
…今度酒でも奢れ」

シャツハは向こうで笑った

「ああ…是非な、お前みたいに強い奴は中々な」

ウワバミが良く言うよ…

「ありがとうございます…私はカリム、貴方の事はシャツハから聞
きました、陸戦において並ぶものなし…とか」

「買いかぶりです…祖父の本気にはまだ勝てません」

トータスはそう言いつつソファに座って何か記されている紙を見る
カリム達は彼が機動六課の隊長クラスな事…また祖父が未だ管理局
の重鎮であることを踏まえ全文を公開した
もう少ししたらなのは達にも公開するのだ
別に大丈夫だろう

「貴女方が知りたい龍…『翼を守護せし聖王の加護受けん巨龍』で
すか…恐らく老山龍ですね」

物騒な事ばかり書いてあるんだが…ラオシャンロンがなんで出てくるんだ？

「ラオシャンロン…ですか？それは一体？」

カリムの質問に答える

「私の…母の故郷に棲息する龍です、全長は100mを超えています…攻撃手段は乏しいですが、天災レベルの被害を叩き出します」
2人の顔が驚きに染まる

しかし…問題なのは聖王の加護受けし…だ
あの化け物がブレスでも吐いたら驚異だぞ
こちらに来る手段はレリック位だが…

そう考えた時トーメントに通信が入った

「ワシだ、レジアスだ」

中将閣下！？

「どうなされました中将閣下！？」

するととんでもないことを仰った

「限定解除だ、今すぐこのポイントに行け」
は！？

「ちょっと待ってください！！出撃命令は「既に出ている、お前だけ」は出されていないが、ワシが出す」へ！？

皆さんもはやて達が不自然に思われるだろう

しかし…現在彼女達は地下下水道にいる

つまり…暗闇だ

因みに現在そこでは

「……駄目…攻撃できない…！！」

「どうしたんだよルールー！？」

「えっと…何が？」

虫鎧のエリオに引かれ、更にそれが大切なガリユーを思い浮かばせ

ジレンマに陥った少女がいた

本題に戻ろう

暗闇は人の恐怖をはねあげる

人は見えないことを恐れ敏感になる

そこに恐怖の顔面：騎士甲冑のトータスがいればどうなるか？

敵味方関係なくパニックに追い込むリーサルウェポン化するのだからやて達の判断は実に素晴らしいだろう

「分かりました…」

トータスは急いで立ち上がり走り出した

途中体からリミッターが外れ膨大な魔力をたぎらせながら走り飛び出した瞬間にクシャナに切り替え飛んで言った

暫くたち…

ビルからとある少女がシャマルの乗ったヘリに向けて砲撃を放とうとした

その瞬間だった

赤黒い魔力光が彼女を襲い強制的に中断させた

そして彼女はそちらの方向を見て…自らの武器を取り落とした

「間に合ったな…捕まってもらおうぞ」

「うそ…化け…物？」

最強の陸士が初めて新たな敵に遭遇した瞬間だった

死神、荒ぶる（前書き）

出来ました！

楽しんで下さい！

死神、荒ぶる

「不味いのが出てきたわねえ……」

メガネの少女クワットロは呟いた

自らのリーダーたるスカリエツティのラボ

ラボ内のファイルで唯一注意するべき地上部隊員と脚注があった

しかしクワットロはそんな物はどうでもいい

（あの騎士甲冑は何よ！？）

隣のディエチ：あまり感情が動かない子だがそのディエチが戸惑い

：いや、恐怖を感じている

（離脱するべき……よねえ）

そう考えた瞬間

「逃げれると思っっているなら：甘い！！」

ダンッ！と床に罅をいれんばかりの踏み込みで突っ込んだ

「クッ！！」

慌ててディエチがイメーメスキャノンを拾い盾代わりにした

「オオオオアアア！！！！」

只の切り払いだろう

だが鎌の一撃はとんでもなく重く強い！！

「キャアアア！！」

10mは軽く離れている隣のビルにディエチをすっ飛ばした

なんて馬鹿力よ

「悪いけどおゝ「逃がさないって言わなかったか？」ゲフッ！！」

あの顔面で突っ込んできたら誰だって止まるし……

蹴りを腹に食らって私も仲良くディエチの所へ飛ばされた

こうなった理由は2つ

私たちの中でマークをあまりされていなかったからよねえ

あとあの騎士甲冑

アレはダメ

と言うか夢に出るわよ絶対

その時ふと視線を見ると：トーレ姉様だ！

ライドインパルスの急加速で突っ込んできた姉様は：

途中でキリモミ回転して別のビルに突っ込んだ

なんで！？

「な：なんだ今の化け物は？」

救援するべくやって来た私だが：そのドクロ仮面を見た瞬間に恐怖と集中を失い突っ込んでしまった

飛行中にいきなりアレは体と精神に悪すぎる！！

……そんな場合じゃないはやく助けなければ！！

再び加速しディエチとクワットロを捕まえ飛び去る

その時足に何かが巻き付いた

「トーメント：カートリッジ3本使って肉体強化及び本体保護！！」

『了解だ！ボス！！』

まさか：ライドインパルスの推進力にパワーで対抗するつもりか？

「ウオオオオオオオラアアアア！！！！！！」

ドクロ仮面は鞭みたいな物を振り抜き：私達を一瞬振り回した

何とか振り払ったが方向を誤りビルにまた突っ込んで撤退する羽目になった

……クソッ

「ちっ：逃がしたか」

何なんだあの化け物みたいな速さは？

フェイトくらいしか追いつけんだろ……

しかし：蹴り飛ばした感触がおかしいな

普通ノックアウトしてる筈だが：

なにもんだ？

シャツハとかが言って預言みたいな謎の文章といい…何かが動きそうだな

ええっと確か…

『古い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

翼を守護せし聖王の加護受けん巨龍

それはただ聳え立ち、人は太古の天災を知る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落ちる』

…だったな

嫌な予感しかしないんだが…一応爺さんに連絡しとくか

スカリエッティのラボ

「ええっと…彼女達はどうしたのかな？ウーノ」

スカリエッティの言葉にウーノは答えた

「いえ…寝ようとまぶたを閉じると恐怖が蘇るそうです」

そこにはクワットロ、ディエチ、トーレが3人一塊になって寝ている光景があった

オマケ

「そうかい…よう分かったトータス、ワシも色々やっつくわい」

ワシは孫からの電話を切った

トータスが戦った奴：恐らく戦闘機人じゃな

あやつの全力の蹴りを食らって気絶せんのは優れた騎士や魔導師じゃが：そんな素振りはなかったらしいの

確かアイツの好きな子もそうじゃったの

まあアイツは恋愛の機会は誰でも平等とか言うて知っとる事は好きな子に言っとらんがな：：バカなくらい真っ直ぐじゃ

まあ関係無いわ

たしか戦闘機人と言えよ：馬鹿弟子が関わってた事件じゃな

あの事件は不振な点が多いし馬鹿弟子の死体もワシが確認した訳ではない

「まさかとは思うが：生きとるのか？」

ワシは頭を振り払った

死者は生き返るなぞあり得んしな

取り合えず：この文章を見るなら明らかに地上本部が危ないの：大地の法の塔とあるし：

「ワシもホンキで動くとするか：」

ワシは馬鹿弟子：ゼストやグレアムが映った写真を見ながら部屋を出た

この日：：トータスの一報により時空管理局伝説の武神が水面下で動き出した

その事は一族しか知らない：：：

死神、荒ぶる（後書き）

爺さんがホンキで動き出しました

因みに爺さんとの模擬戦でトータスは勝ってますが…全力のフルドラИБ爺さんだとトータスは挑む気になりません

因みにマグロはフルドラИБで変形します

死神、少女（前書き）

出来ました

何かグダグダです…

死神、少女

昨日から六課に新しい仲間が増えた

名前はヴィヴィオと言う

なのはが保護者になったみたいだが：なんでもかんでも背負い込みすぎなんだよ、アイツは：

今は良いだろうが：まあサポートしてやれば良いだけだし

……差し当たっての問題は：

「トータスさん！歌、歌える！？」

寛いでる俺の膝に乗っかっているヴィヴィオだろう：

何だか知らんがヴィヴィオと会うときは騎士甲冑で会ってはいけないと部隊長：もとい会う奴全員に言われた

何故だ？

まあそれはいい

昨日初めて会ったのだが：なつかれた

多分高い高い等をしたのがよかったんだろう

それが効いたのか今くつついている訳だ

なのは達は今聖堂教会に出張しているし、スバル達は訓練がある必然的に仕事に自由が効く俺が面倒を見ているわけだ

「……歌かあ……」

歌ねえ：一緒に歌番組を見ていたからだろうな：

しかし、俺の知ってる歌はヴィヴィオには合わんだろう：あれかな？

「じゃあ：つまんないけど歌ってみるよ」

そして息を吸い込んで歌った

生命は生まれ、生命は尽きる……

母さんに教えてもらった歌：魂を宿す歌……を

「ん？何だろ…この歌」

ティアが気付いた

確かに…聞いたことは無いんだけど…耳が離せない歌だね

『相棒、データ内にあったから翻訳できますよ』

マツハキヤリバーが言った

「ホント！？じゃあお願い！」

すると端末に出力してくれた

「ええ〜と…うええ？分かんないや」

理解しづらい…

「見せてちょうだい」

ティアが覗いてきた

「……………哲学的ね…ここなんかホラ」

……生きるという事が、死ぬという事

訳分かんないよ

「……………何だかこんな歌を知ってそうなのは…トータスさんですかね？」

エリオが言った

言われてみれば…トータスさんも…

トータスさんって人が知らない事はよく知ってるし

歌声を辿ってみるとトータスさんがヴィヴィオを膝に乗せて歌っていた

ヴィヴィオは目を瞑って聞いていた

やがて……………歌が終わった

「ふう…これでいいかな？」

俺はヴィヴィオに尋ねた
が…………

「スーッ…スーッ…」

寝てるよ…膝の上で気持ち良さそうに…どうすれば良いんだ？

オマケ

ヴィヴィオが起きてザファイラの所へ言った後、スバル達が来た

「トータスさん…あの歌は？」

エリオが尋ねてきた

聞こえてたのか…

「アレは…母さんから教えてもらった歌だ、魂を宿す歌って言う…
…全ての生き物や物事は繋がっている…その事を知らせる歌だ」
皆感心してるな

「けどトータスさん…声が大きかったですよ？」

ティアナに言われた

あちゃあ…少しの間からかわれそうだな

「ラオシャンロン…こいつが？」

私はなのはちゃん達を連れて聖堂教会に来た

六課設立の訳を話するためや

しかしカリムから預言に追加があったと聞いた時は焦ったけど…まさか龍やとは…

「はやて…シャツハが言うにはこの龍の事を一番知っているのはトータスさんだそうです」

なんやて？

「トータスさんとラオシャンロン？に…何の関わりが？」

なのはちゃんが首を傾げる

「ラオシャンロン…これにミラボレアス系やヤマツカミ…他にも居るがコイツらを第1種生態ロストログアと言う」

クロノ君が言い出した

生態ロストログア？

聞いたことあらへん

「なんだろ…執務官の試験問題にあった気がする…」

フェイトちゃんが言った

「コイツらはとある管理外世界に生息しているが…時として生きながらに次元震を引き起こしたり、最悪次元世界を超える可能性も持つ物もいる…トータスの母がその世界出身だ」

……ホンマかい！？

「だからトータスが詳しいんだね」

フェイトちゃんが相槌を打った

……帰ったら即刻ラオシャンロンについて聞こう

その後他愛ない話しをする中で紅金戦争の話しをクロノ君やカリムに話した時…クロノ君の顔が強張った

「フェイト…それは本当か？」

雰囲気が変わった？

フェイトちゃんも気づいて頷いた

因みにお茶のお代わりを持ってきたシャッハさんもとんでもない顔をしている

「トータスは…怒ってなかったか？」

クロノ君は恐る恐る尋ねた

「いや…苦笑いしながら許してくれたけど…」

すると途端に安心しだした

「あの…トータスさんが怒るとどうなるの？」

なのはちゃんが尋ねた

確かに…尋常じゃない緊張感やったし

シャッハさんが答えた

「騎士でなくなります…本能のに任せ、敵を倒すための手段を選びません」

あの…温厚なトータスさんとは信じられへん証言やった

クロノ君が後を継ぐ

「一度だけ見たことがあるが…騎士の精神は0だった…例えるなら、狩人や荒れ狂う鬼だ」

狩人に鬼？

シャツハさんも頷く

「確かに…手段を選ばずに敵を叩きのめしてましたからね…あの状態のトータスは絶対に戦いたくない」

シャツハさんが感慨を込めて言った

肝に命じておこな…

人を護るために荒れ狂う鬼が現れる事となるのはまだ先の事だった

死神、少女（後書き）

はい、質問が多かったので激昂トータスのヒントです
かなり恐い予定です

死神設定2（前書き）

最近色々増えてきたので整理を兼ねました

死神設定2

本編の技やこれから出る予定の技、その他についての追加設定です

炎爆一閃

爆発する魔力刃を飛ばす

込めた魔力によって規模をコントロール出来る

気刃一閃

魔力変換を行わず魔力刃を飛ばす

威力に優れる他、デバイスに纏わせる事により破壊力を上げる事が可能

気刃斬り

気刃を纏った状態での連続攻撃

トータスの得意技

大回転気刃斬り

気刃斬りからの締めを使う

周囲に円形魔力刃を作り斬る物

炎爆激鉄

本編未登場

爆発する右ストレート

ようは：

ファル○ーンパーンッ！！

炎爆煉鉄

爆発する蹴り

バリエーション多数

場合によっては…

ファルコン○ツーク!!

ブラックゴアバスター

破壊力と耐久性が上昇した

その代わり重くなったがトータスの膂力の前なら大して影響は無い
エンブレム既存のフォームに追加して

フアランクスモード

一気に巨大化し固定砲台になる

遅いが自走可能

ビットモード

4つの超小型浮遊砲台を射出する

トータスのマルチタスクは少ないのでこれが限界

トーメント

?????

カマイタチフォームの亜種

トータス最強形態はカマイタチフォームだが銃槍を捨てて更に近接
に特化した状態

カマイタチフォームがトータス最強の広範囲殲滅型ならトータス最
強の接近特化型である

ただし使用頻度がかなり低い

ブラッドフルート

キャラのケリユケイオンと同じくブーストデバイスだがアームドも兼ねている

見た目からして明らかに発展する方向が間違っている作品
スイッチにより効果が切り替わる

フルートモード

澄んだ音色が流れる

範囲内の認識した皆に等しく強化魔法をかけれる
欠点とすればメロディを吹かなきゃいけないので途切れたらアウトである

バインドモード

内部の機関を共振させバインドボイスを作り出す
魔力波では無く純粹な音の為耳詮が一番有効
因みに吹いている方にも爆音が響くのでトータスは根性で耐えている

家族詳細

ガルバート・ヴィレン

ハイパー爺ちゃん

模擬戦でトータスは最近勝ち越しているが、全力のガルバートとは絶対やりたくないらしい

珍しい氷結の変換資質を持ちフルドライブも可能

本気のガルバートはトータスをして『化物』とよぶ

弟子が多く、一時期はゼストをしごいていた

縦にも横にも顔が広い

ガイズ・ヴィレン

とある陸士部隊の隊長

ランクは陸戦B

しかし魔力が少ないためランク試験に合格出来ないだけであり対人戦ならAA相当の働きをしている

魔力、変換資質を持たず才能に乏しいが双剣の腕前は半端ではない

サララ・ヴィレン

ヴィレン家の最高権力者

トータス、ガイズ、ガルバートと言った強者も頭が一切上がらない

特にトータスは驕と称して悲惨な目に合っているため絶対服従である

剣の腕前は相当な物

料理は豪快

アンナ・ヴィレン

使い手を選びすぎるデバイスを作りだすマイスター

ヴィレン家は全員彼女作成のデバイスを使用している

竜人属の技術を応用したりとデバイスは独自技術が満載している

例えばコアの部分に火竜の宝玉を使う等

その為トータスはメンテナンスをシャーリーに頼まずアンナの所に
出向いている

死神、組手（前書き）

出来ました！

どうぞお楽しみに！

死神、組手

ちよつと私用で外出し戻ってきたらヤケに騒がしい

「なんだ？何が合った？」

近くにいた人に話し掛けた

「ああ！増援が来たんですよ…アテンザさんとギンガさんです」
ギンガ！？

……あいつも来たのか

そーいや返事して貰ってないな

まあ…体の事があるからな

即決は出来んよな

大将から教えて貰った時は驚いたが…それだけだ

何処かでアイツは自分を人と違うと思ってるのかも知れんが…笑って、泣けるなら人だ

ま…気長に待ちましようか

取り合えず見に行きますかね

むう…勝てない…

ギン姉がやって来たので隊長達との訓練が終わった後組手の相手をして貰ったけど…勝てない

「ホント…ギン姉は強いねえ」

私は呟いた

「まあ…年期が違うわよ」

そう言っていたら奥の方からトータスさんが歩いてきた

「おう！やってるみたいだな」

トータスさんが来た途端ギン姉は緊張している…

まったく言っちゃえば良いのに…でも体の事もあるからね…

「ん…組手か？」

トータスさんが話し掛けた

「は…はい！…あの久し振りに相手してもらえませんか？」

ギン姉が言った

へ？トータスさんて素手格闘出来たの？

「ふむ…よしやるか！！」

ギン姉が息を調えてから向かい合った

「そうだな…勝ったら2人共メシに連れてってやるかな」

ご飯！！奢りで！？

「ギン姉！！絶対勝ってよ！！」

ギン姉も燃えている

「まかせなさい！！絶対勝たせてもらいます！」

そしてお互い向かい合って…走り出した

「フッ！」

ギン姉の突きを捌いてすかさず蹴りを放つトータスさん

ギン姉が受けたのを見ても止まらずに追撃に突きを放って距離をとった

「……凄い」

トータスさんも相当な腕前だ…

陸戦魔導師と空戦魔導師との大きな違いに格闘戦があげられる

シグナムやヴィータと言った騎士を除けば格闘戦をする魔導師は少ない

空間を縦横無尽に動かざるを得ないため難しく、なのはみtainな砲撃があると近づくのでさえ危険である

しかし陸戦魔導師は大地に足をつけているため砲撃等も方向が制限されるため格闘戦もしやすく重要視される

トータスは母にしごかれていたのと、平均的な魔導師を大きく上回る身体能力があるため格闘戦もかなりの実力もある
ギンガ相手に組手の相手が出来るのだ

かなりの物だろう

「ちっ！また腕を上げたのか…よっ！！」

ローキックを放つがギンガはクルツと後ろに爆転し避ける
ギンガは着地した後直ぐに前へ詰め蹴りを顔面に放つ
そしてそれは…

「ウゴッ！！」

トータスの顔面に突き刺さりすっ飛ばした

「やったアアアア！！ご飯だアアアア！！」
はしゃぐスバル

しかし…ギンガは焦る

やり過ぎてしまったかと思ったのだ

しかしトータスは身を捻って普通に着地した

「痛いな…まったく、ま…一本取られたし…ついてきな…なんでも
奢ってやるよ」

スバルがすかさず叫ぶ

「焼肉食べたい！！」

ギンガも叫ぶ

「いや！ここは中華！！」

トータスはそれをみながら呟いた

「……早まったかもしれん」

……その日トータスの財布は半分ほど軽くなってしまった…

レジアスは執務室で仕事をしている時来訪者があった

「ガ…ガルバート先生！！」

海の重鎮ガルバート・ヴィレン

ゼストを育て、レジアスに心構えを叩き込んだ現役最年長にして最
強とも詠われる管理局員だ

「すまんなレジアス：ちよっとお前にな」

そうしてレジアスにガルバートは何かのアクセサリーを渡した

「これは：渋いデザインですな」

黒っぽい腕輪に足輪、ピアス：ベルトもある

「これは”三眼”と呼ばれる装具じゃ：お前さんは信じとらんようじゃが：例の預言の事もあるしのう：危機に備えて身に付けておいて貰いたい」

レジアスは頷いた

彼はガルバートの知る世界の装備を見たことがある

大量生産は無理なシロモノだがその性能はバリアジャケットに匹敵する物もあった

百戦錬磨のガルバートが言うのだ

着けておくに越した事はないと判断した

「分かりました：ありがたく頂きます先生」

レジアスの一札を受けガルバートは頷いた

そしておもむろに言った

「なあ：レジアス」

着けながらレジアスは答えた

「何ですか先生？」

ガルバートは言った

「公開意見陳述会じゃが：ワシも見に来ていいかね？」

レジアスは考えて言った

「流石に参加は出来ませんが：」

ガルバートは笑っていった

「構わん、構わん：気紛れに外で護衛でもしてやろうと思っただけよ」

レジアスは驚いた

「先生が！？……いやありがとうございます」

その後2人で暫く談笑しガルバートは帰った

己がカンと経験に従って……遂に武神が動きだす

死神、組手（後書き）

じいちゃんが遂に動きました

いずれ出るゼストとの掛け合いに注目してください

また：鬼となったトータスももう少しですのでお待ちください

鬼神、荒れ狂う（前書き）

出来ました

少しイマイチかも

鬼神、荒れ狂う

公開意見陳述会

今回はアインヘリアルについてが争点だろう

何故か爺さんが親父と一緒にいたが

「よう、元氣そうじゃないか？」

俺より低い背の親父が話し掛けてきた

「まあね、今は場所を移動中だけど、親父と爺さんは？」

爺さんが高笑いしながら言った

「ハッハッハッ！！…なあにレジアスの護衛じゃよ…ワシの勘が知らせるんじゃないや戦いをな！！」

爺さんが言うのとホントに起こるかも知れないから勘弁して欲しい

「私は分かるだろう？一応指揮官だしな」

親父ははっきり言えば俺より弱い

だがそれは単純な戦闘力の話し

親父の本領は化け物じみた捜査、記憶能力と剣術だ

昔は影でレジアスの猟犬だの、最後の懐刀とも言われた程の魔導師だ
神は二物を与えず…と言うが親父に俺並の魔力があれば俺なんか足
下に及ばない魔導師になっていただろう

「ま…俺は警備場所に戻るよ」

くると背を向けて歩き出した

さっさと警備しないと…

…異変は突如として訪れるものだ

ガジェットの大群が会場周辺を襲撃した

なのは達も撃退を始めた

そんな中スカリエッティの手下ナンバーズのチンク、ウエンディ、

ノーヴェはギンガを捕獲しに向かった
ギンガは戦闘機人タイプゼロファーストと呼ばれる物だ

よって狙われた

「グッ!!」

ギンガの右腕が飛んだ

激痛が走るが機械ゆえ死ぬことはない

「まったく：手こずらせやがって」

勝ち気そうな女性が腕を鳴らし

「そうッスね、まあ可哀想ッスけど」

ボードを抱えた少女が言う

「しかし：随分と逃げたな」

小柄な眼帯少女がメガネを弄りながら言った

「……難しいわね：」

ギンガは呟いた

この状況から抜け出すのはほぼ不可能

多分捕まってしまう

「ふう：トータスさんに返事しとけば良かったな：」

ギンガはゆっくりと辺りを見渡した

右腕は飛び、全身ズダボロ

それでもまだ：足掻こうとした時だった

空から：ナニカが落ちてきた

3人の少女達は身構えた

そこに居たのは：

「……トータスさんっ!!」

ギンガは叫んだが：トータスの雰囲気が違う

「お前がトータスカ：」

眼帯少女：チンクは気を緩めない

「「ギアアアアアアッ!!!!!!」」

2人の少女は飛び上がらんばかりに驚いた当たり前だ
死神が空からいきなり救援の為に降ってきたのだから

「……お前をやったのはあいつらか？」

トータスが尋ねるがギンガは震えながら頷いた

トータスが付き合いが長い自分でも知らないほど……怒ってる

「気を引き締めろ！博士から上げられた要注意人物だ」

チンクが構えた

「……てめえら……良くも俺の大事な奴を……!! トーメント、ミラザ
ーフォーム！フルドライブだ!!」

トーメントも答える

『了解だボス!! ミラザーフォーム!』

トータスの見た目とデバイスが変わる

自ら封印しているミラバルZ、更にトーメントも最強の鎌……ミラザ
ーゲスパノンに変形した

「な……なん「黙れ」ガハッ!!」

更に怖くなった見た目をノーヴェは言おうとしたがトータスが問答
無用とばかりに地面に叩き付けた

「悪いが今の俺は優しくないぞ……ウォオラアアアア!!」

叩き付けたノーヴェを持ち上げウエンディにぶん投げる

「ワワツと!!……ウギヤアアアア!!」

受け止めバランスを崩したウエンディを

「気刃……一閃ッ!!!!!!」

ブッ飛ばした

「貴様!! 食らえ……ランブル!!」

投げ付けたナイフがトータスの付近で爆発する……が

「この程度で……今の俺を止めれると思うなあああ!!!!!!」

ダメージをまるで気にせず突撃し鎌を鞭の様にしてチンクを縛り上
げた

「うっ……くうっ……」

振りほどこうとするチンクを意に介さずトータスは言い出した

「今の俺は死神でもなければ騎士でもない……ただの鬼だ」

チンクはギンガを傷付けたのがトータスの逆鱗に触れた事を知ったが……もう遅い

「俺の資質の炎爆は扱いづらいが破壊力は炎熱の上に行く……炎爆激鉄っ！！！！！！」

鎌で固定されたチンクに全力の右ストレートが叩き込まれ……トータスすら呑み込む爆発が起きた

爆発が晴れ……ギンガはボロボロのチンクと反動のせいか騎士甲冑の半分が吹き飛んだトータス

横を見れば魔力刃で斬られた上吹き飛んだ倒れている2人組

……ギンガを守るため手段を選ばず怒りのままに敵対した全てをトータスは慈悲も無く叩き潰した……

別の場所にて

レジアスに会うべくゼストは飛んでいた

しかし……何時もよりスピードを出している

「なあ、旦那どうしたんだよ!？」

ユニゾンデバイスのアギトが話し掛ける

「……嫌な予感が止まらない、何か重大な物を忘れているような……」

ゼストが困惑気味に言った時だった

「ほう……ワシを忘れとるとはな馬鹿弟子」

その言葉と共に上からぶつとい魔力刃がとんでもない速さで飛んできた

2人は慌てて避けたが……

「その声……まさか……」

ゼストはやや萎縮しながら見上げ……最悪の事態になったと痛感した

「しかし…フルドライブ時のアレを避けるとは…ワシも歳かねえ」
赤いレウスから銀色のシルバーソルに身を包み、本マグロは真の姿、
ダオラーディグリペグへと変貌を遂げている
管理局の生ける武神にして自らを鍛えた師匠…ガルバート・ヴィレ
ンがそこにいた

鬼神、荒れ狂う（後書き）

トータスが3人を瞬殺してますが…

見た目で3人がやや萎縮していた為です

トータスがいきなり降ってきたのは遊撃をしていたからです

次回は爺さん無双…？

武神、圧倒（前書き）

ありがとうございます
爺ちゃん無双です

武神、圧倒

最強の龍騎士、武神、空の英雄、不敗の魔導師…この全てがガルバ
ートを評する物だ

ゼストは槍を握りしめつつ冷や汗を流した

「アギト…ユニゾンとフルドライブだ」

アギトは驚いた

「旦那！そりゃ無茶だ！！」

ゼストはレリックウェポンとして甦った死者だ
当然体に莫大な負荷がかかる

「速く！発動しても勝てるか分からのだ！！」

ゼストの顔はマジだった

「……分かったよ！」

アギトと1つになり髪は金色になった
魔力もはね上がった

「うおおおおお！！！！」

ゼストは突貫した

が！！

「ふむ…大したもんじゃのう」

ダオラの腹でガキリと受け止められた

「くっ！！」

ゼストが透かさず距離を開けた瞬間武神が動く

「せあああああ！！！！」

振り下ろし

単純…しかしそれ故に絶大な威力の一撃！！

「ぬうううぐううっ…」

ゼストも槍を盾に受け止めるが…止めきれない！！
慌てて体を捌いて横へ飛んだ

「……衰えませんか」

ゼストが言った

「はっ！ワシから見れば孫もエースオブエースも夜天の主も閃光もひよっこよ！衰えるわけがなからうが！」

何かあれば凄まじい鉄拳で自分達を鍛えた師匠がゆったりと動く魔力が刀身を覆う

「氷神…氷彪！」

彪を象った氷結の一撃がゼストを襲う
槍を縦横無尽に操りその彪を撃退する

「じゃからお前は勝てんのよワシにな」

彪が碎けた途端回りの水分を冷やしガルバートが掻き消えた

「なっ…まさかここまで読んで？」

ゼストが辺りを見回した時だった

「バカがああ！！！！下ががら空きじゃああああ！！！」

強烈なアッパーがゼストの顎にクリーンヒットした

「ガハアッ！！！」

吹っ飛ぶゼストだが瞬時に体勢を建て直した

（……強すぎる…だが…負けないのだ！）

ゼストの槍に強烈な魔力が集まり…

「くらええええええええええ！！！！！」

ゼストと共に一本の槍と化し光輝きながらガルバートへと突貫したが
「全く…すっさまじいのう」

だがそれすら止められた

「バカな…空手で！？」

そう槍の穂先を片手で持ったのだ！！

「ここからは逃げれんの…貯め斬り…一閃！！！」

振り下ろされた体験はゼストの槍を粉碎しゼスト事地面に叩き付けた

「ぐう…やはり先生には勝てませんか…グフツ」

自らの体の限界を越え、無理矢理力を引き出したフルドライブの反

応によりゼストの息はあれている

アギトとのユニゾンも解除されている

「旦那…すまねえ」

アギトがしょぼくれる中降りてきたガルバートにゼストは言った

「スイマセンが…先生、幾つかお願いが…もう寿命も残ってないの
で」

するとガルバートが首を振りながら言った

「嫌じゃわい…レジアスのことじゃろ？」

ゼストは吼えた

「先生！私にはもう無理なんです！！限界が「誰が限界なんて決め
たんじゃ？」…は？」

ゼストは目を見開いた

そして絶句した

ガルバートの手には…

「ハッハッハッ！！寿命？知ったことじゃないの…ワシの弟子なら
自分で聞きに行け！ワシも一緒に行ってやる…お前さんを健康にし
てからな！」

秘薬、いにしえの秘薬、不死虫、マンドラゴラ、回復薬グレート、
強走薬グレート、栄養剤グレート…エトセトラエトセトラ！！

「せ…先生ちよっ…ま、ウアアアアアアア！！！！！」

全部の液体、固体を纏めてガルバートに無理矢理飲まされてしまった
「……口の…中が…分から…ん…」

手を虚空に伸ばしてからバタツと倒れ気絶してしまったゼスト

「だ…旦那あああああああ！！！！！」

やりきった表情のガルバートの横でアギトの悲鳴がこだました…

武神、圧倒（後書き）

作中のキャラで一番強いのが爺ちゃんです
ホンマグロ時ならトータス、なのはクラスですがダオラ状態なら圧
倒できるので倒せる可能性があるのは、はやての殲滅魔法くらいで
す

i f 続き(前書き)

以前書いて反響の大きかったi fの話しの続きが出来たのでどうぞ
後書きもご覧ください

i f 続き

「機動六課…ですか？」

中将閣下が突然辞令を出した

「ああそうだ、地上からも1人高ランクを…だそうだよ
よっぽど危険な職場かね

「分かりました、俺でよければ引き受けます」

地上の高ランクと言ったら俺くらいしかないしな

「任せたぞ、赴任は一週間後だ」

敬礼して踵を返して部屋を出た

やれやれ、さっさと準備しないとな

「地上からも1人来るの？」

なのはちゃんが言ってきた

「そうや、いざって時に1人は欲しいし何より地上部隊に関わることもあるからちようどええんやけど…」

うちは詰まった

「……ってことはスパイも!？」

ヴィータが確信を突いた

「その可能性もあるんよ…派遣者を決めたのはレジアス中将やしな
…」

六課反対派であり随分と結成時に揉めた人や

「今日くらいに来る筈やけど…」

するとロビーの方から大柄な男の人がズンカズンカやって来た

「あの…どちら様で？」

隣のフェイトちゃんが尋ねた

「ん? ああ俺は今日からここに出向になったトータスと言うものだ
が…」

ん？トータス：なんやろ？

どっかで：はっ！

「空港の時のガイコツ人間や！！」

思い出した！あんどとき空飛んどった一等陸尉や！！

「ガイコツ：まあ間違いいではないですが…」

回りが面食らっている

「ガイコツ？お前は一体？」

シグナムが問い掛けた

「騎士甲冑に骨が付いてるだけだが：貴女がシグナムか？シャツハから話しは聞いています」

握手を求めてトータスさんが出した手をシグナムは握った
その瞬間シグナムが笑った

「……どうやら超一流の様だな、握っただけで分かる」

ヴィータも目を丸くしている

シグナムの握力は一般魔導師の比じゃない

それに平然と対抗しているのだ

「機会があったら模擬戦でも：「是非やりたいものだ」ありがとう」
完全にシグナムは認めた見たいやな

多分実力も高いやろな

「ほな：これからよろしゅうお願いしますトータスさん」
頭を下げると

「いえいえこちらこそ…」

と返された

ええ人材くれてありがとうレジアス中将！！

既に訓練が始まったが俺はまず六課の案内が終わってから新人達と
会う事になった

リンと言う妖精っぽいデバイスに案内されて俺はモニターを見た
その時

俺はホントに驚いた

微かに見覚えのある青い髪の少女が訓練用のガジェットを壊すのに大型魔力刃を使ったのだ

構成はかなり違うがああ技はまさしく俺の技だ

：そうか：だから行くと言った時大将とギンガが笑ってたんだな

(まさかこんな偶然があるとはね：)

小声でぽつりと呟いた

「どうかしたですか？」

リインが首を傾げてる

「いや：大丈夫さ、もう終わったみたいだから会いにいつでもいいかい？」

リインはニコニコ手を降っていた

「ありがとうな」

早く話してみよう

「皆、地上からの応援の人だよ」

なのはさんが紹介した人はとても大きい男の人だった

「トータス・ヴィレンだ、よろしくな」

スバルも驚いている

「おっきいねティア」

確かにね

「何センチあるんだろう？」

思わず呟いていたらちびっこ2人が自己紹介を終えていた

慌てて自己紹介をした後トータスさんはスバルをジーツと見てから

「ふえっ？」

頭に手を置いた

まあスバルは雰囲気か犬みたいに見えるから撫でたくなるのは分かるけど：なのはさんも驚いている

運が悪ければセクハラと取られるからだ

そんな中トータスさんはゆっくりと言った

「……どうやらちゃんと良い子にしてたみたいだな」

スバルが首を捻り掛けて……止まった

「あの時の女の子がまさか俺の技を使ってるなんて思わなかったよ……助けた女の子が立派になってるのは嬉しいもんだ」

スバルの目にプクッと水滴が出来た

「ひ！ひよっとして！……あの時の……グスッ……死神さん！？」

スバルの問いにトータスは頷いて言った

「そう、あの時の死神さんだ、久しぶりだなスバル」

瞬間スバルの涙腺が決壊したらしい

「うううう！！グスッ……会いたかったですう！！……なヒクッ名前も！所属も！分からなかったから！！……ック……お礼も言えなくて！……うう」

トータスは笑いながら軽く抱き締めていた

「気にしない、気にしない！今日から同僚だ……どれだけ成長したか見せてくれよ」

トータスさんの声にスバルがはっきりと頷いた

良かったねスバル……憧れの人に会えて

if 続き（後書き）

この世界のスバルはデスギアをカッコいいと思ってます

なのでスバルはトータスの後ろにくつつく様に歩いたり姉から自分に振り向かせて惚れさせるべくトータスにアタックしたりガルバートに甘えて外堀を埋めたりしている予定です

……続きません

次に書くifや番外予定は

? 若きトータスが無印に乱入したら

? トータスの士官学校時代

? 魔王なのはVS鬼神トータス

（ティアナ撃墜に関して）

を考えています

3つの内どれが読みたいですか？

時間はかかりますが書きますのでよろしくお願いします

気が付いて…(前書き)

出来ました！

中々上手くかけない

気が付いて…

「……はっ！私は…」

私は起き上がろうとした瞬間

「ぐうおおお！！く…口の中ガアアアアア！！」

カオス！何だこれは！？

あり得ない！いやそもそも私は死んだ筈では…

「気が付いたかね馬鹿弟子？」

原因がいた

「先…生一体何を？」

ニヤリと先生が笑った

「お前さんの寿命を少し引き延ばしただけじゃよ…あの薬でな、精々健康でおれても3年くらいじゃろうがな」

……あの世界の薬ならそうなりかねない

何しろ私の前の槍が突き刺さらない化け物…アカムトルムだったかそんな物もいるくらいだ

奴の棘から曲がらず鋭いこの槍を作る事が出来るくらいだしな

「旦那！！しっかりしてくれ！！大丈夫か！？」

アギトが飛び回りながら言う

「ああ…口の中がカオスだが、驚く程体が軽いな」

力が沸いてくると言うのはこう言うことを言うのだろう

「で…行くんじやろ？レジアスに会いに」

先生が言われる

「ええ…私はアイツに合わなければならぬ、かつて同じ道を歩いた親友として」

だからこそ…訪ねなければならぬ

「そんなら行くぞ…ほれ捕まれ」

先生が肩を貸してくれた

「すみません…」

申し訳なく言ったら先生が笑われた

「ハッハッハッ！！別に構わんよ…じゃがゼストよ？昔の顔になつとるぞ」

……虚しいな

「こりゃ一体どういう事じゃ！？」

先生が驚かれている

レジアスの部屋に來たのは良いが困惑しているレジアスと縄とバインドでグルグル巻きになった気絶した美女が居た

「ああお父さんですか…不審人物ですよ」

そう言っている間にうつすらと女が目を開けた……が

「ぐうっ！！」

間髪入れずに先生のバインドが再び強烈に締め上げた

「で…どういう事なんじゃ」

そんな事を聞きながら捕えられている女は思った

運が悪すぎたと

そもそも彼女に与えられた役目はスパイと暗殺である

暫くの間潜伏している筈だった

しかし…そうこう言ってられない事態になった

ガルバートが水面下で動き出したのが不味かった

老いたりとは言え未だ実力は衰えない上、歴戦の勘と経験からまさ

かとは思うが嗅ぎ付けられる恐れがあった

と言うかやる事が無茶苦茶な為最高評議会が危ないと判断したら部屋の前で徹夜は愚か身辺警護と言って張り付く可能性すらある

よってウーノ達と相談しサッサと最高評議会とレジアスを始末し予定を前倒しにすることにしたのだ

そしてそれは上手くいった

そのままの流れで局員に化けてレジアスの部屋に向かっていた

その時1人の男とすれ違った
その瞬間

「ちょっと待てその女」

ドゥーエは振り返りながら言った

「どうかしましたか？」

気付かれる筈はないが：

「その管理局の制服は509部隊の一尉の物だ：ミッドの辺境部隊
員が何故ここにいる？」何者だ！？

ドゥーエはそう思った

管理局員は余りに多数の為どんな制服でも溶け込める

何故気付いたのだ？

そもそも他者にバレないように制服と顔をバラバラにしている
同じ部隊員に見つかっても他の部隊からの研修と言えば誤魔化せる
し中途採用ででたまたま支給されたと勘違いしてくれる

「緊急の案件がありました：」

そう言って誤魔化そうとした瞬間

「ほう：それはどういう見だい？：：：それに聞きたいのだが君の
顔は129部隊の一尉の物だ：そこからの委任や出向は聞いていな
いが？」

「貴方：何者！？」

ドゥーエはいつでも戦闘出来る様に構えた

「私は：ただの猟犬だ、素質も大したことは無いが記憶力は優れて
いてね：私は地上部隊の上級士官の顔と部隊の服は全て暗記してい
る」

ドゥーエは戦慄を覚えた

コイツの頭は数千人を超える人物がスパッと出てくるような頭なのだ
天才を通り越し化け物と呼ぶべきだろう

「くっ：ピアッシングネイル！！」

鋭い爪で切り裂こうとするが

「ブレイドエッジ、セットアップ」

『セットアップ』

蒼き鎧に6つの刃の双剣を振るい弾いた

「くっ、ちょこまかと」

魔力は少ない

だが打点をずらし最小限の力で回避し全力で斬り込んでくるのが厄介極まりない

そして：一瞬胴が空いた

「終わりだ：乱舞！！」

10回もの斬撃を瞬時に叩き込み制圧した

「かはっ：まさか」

ドサリと倒れたドゥーエにバインドを掛けて騎士甲冑をとく

「それでもレジアスの懐刀と言われた元捜査官さ：相手が悪かったな」

「と言うわけですよ」

先生の息子はやっぱり化け物か

「ふむふむ：分かった！さてここも危ないしの：お前達は付いてこない！！安全な場所に行く：：：ああ女もな、お前達の話はそれからじゃ」

そう言って先生が走りだし：私もレジアスも走り出した

：：：ルーテシアはどうしてるだろうか

気が付いて…（後書き）

すこしご都合主義ですが…

お父さんはトータスやガルバートと違った意味で化け物です
検挙率は98%

ミスはトータスが入ろうと決心した一回だけです

今回はスランプでした

ひよっとしたら書き直すために削除するかも知れませんがご容赦
ください

死神、思考（前書き）

出来ました
どうぞ！

死神、思考

スカリエッティ率いる戦闘機人及びナンバーズの襲撃の被害は甚大だった

六課隊舎は壊滅

ヴィヴィオは連れ去られると言うおまけ付き

取り合えず全員ではやてが確保した新隊舎：アースラに乗り込んだが：この場にトータスは居なかった
彼は本来、地上本部から出向と言う立場にありレジアス中將により一時的に戻されたのだ
この行動にはやてやなのは達は憤ったがレジアスは意にも介さなかった

「で：どうするんです中将閣下に爺さん？」

中将閣下の緊急帰還命令を受けた俺は破壊された施設の撤去や巡回をしていた

そんな時、いきなり呼び出された俺は2人に問い掛けつつチラリと横見をした

……ゼスト・グランガイツ

かつて地上本部の最強と歌われた爺さんの一番弟子だ

何でも一回死んだ筈がスカリエッティにより復活させられ渋々従い、かつての親友であった中将閣下に問い詰めるべき事があり、遥々やってきた所を化け物爺さんに叩きのめされ、無理矢理復活させられた可哀想な人だ

問題自体は中将閣下は関わっておらずあくまで捜査妨害の域に止まっていたらしい

「取り合えず：トータスは騎士甲冑をつけて其処の女を尋問せい：

ワシ等はお前さんの寄越した予言の龍対策を練るわい」
親父が手を振るなか俺は女を別室に担いでいった

「……ん？ここは…」

私は…あの男に倒されて、一体どれだけ時間が経ったの！？
すると真っ暗な部屋の奥からボンヤリとした灯りを持った男がきた
今どき蠟燭？変わっているわ…

「どうやら…目が覚めたみたいだな」

そして揺れる小さな炎に照らし出されたのは…巨大な鎌を持った巨
漢の骸骨男！！

「イ…イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
！！」

逃げだしたくてもがいても強固なバインドが私を縛り上げている
来るな！

と言っかなんで！？

こんなやつデータベースに無かったわよ！？

「俺はトータス、お前さんの尋問を開始する…なあに…怖くはない
さ…」

死神の顔面の骨がニヤリと笑いつり上がった

……デスギアスマイル

発動するのはニコポならぬニコデスかニコパニである

勿論ニコツとしたらポではなくニコツとしたらデス！かニコツとし
たらパニック！である

「キヤアアアアアアア！！やめて！こっち来ないで！！やめてえ
えええええええ！！」

クールなキヤラもどこへやら

人格崩壊寸前である

まあ…真っ暗に近い部屋でそんな物を見て正気を保てる方がおかしい

「それじゃあ：尋問開始だ」

……彼女にとって地獄の様な時間が訪れた

「ふむ：ラオシャンロンなあ：古の巨龍じゃから間違いは無いじゃろ」

先生の発言を聞いて考え込んだ

どうするべきだこんなバカでかいモンスターを：

「まあ：トータスとワシに任せれば問題無いじゃろ：お釣りが来るわ」

先生は断言なされた

先生が言うとは不可能も可能になる気がするからな
すると奥からお孫さんがやって来た

トータス・ヴィレン

私が死んでからの地上本部を支えた陸戦最強と呼ばれる騎士だ
そんな彼だが若干青ざめている？

「報告です：彼女の名はドウエ、アジトの場所は明かしませんでした
したが：最高評議会のメンバーを殺害したと言いました」
何！？

レジアスや先生が立ち上がった

「なんじゃと！？：こうしちゃおれん！！ちよいと連絡せねば！！」
先生は走っていた

「そうか：彼らは死んだのか：ハハッ」

レジアスは自嘲気味に笑った

その後目が変わった

あの頃の：正義に燃えていた頃の目だ

「トータス：お前に指示を与える！」

トータスは直立不動で聞いている

「先生と他の部隊員と協力し：現れるであろう巨龍を叩きのめせ！
！出来るか？」

レジアスの目は力強い

「当然、地上本部の意地を見せてやりましょう！中将閣下！！」

その目に若き騎士が答えた

「ならば…アースラに通信せねば」

レジアスは準備を始めた

はやて達は歯噛みしていた

スカリエッティの宣戦布告

今すぐ叩きたいが迂闊に動けば全てが水の泡になる

祭りは一週間後と言われた

作戦を練らねばと思った時だった

画面にいるスカリエッティが言った

『あ、そうそう…聖堂協会の預言にあった巨龍だけど…コイツだからね？』

そして映ったのは…

山としか言いようがない灰色の龍だった

「うそ…」

ティアナが呟く

「なんて…でかさなんだよ！」

ヴィータが叫ぶ

フリードは身を震わせ、キャロは怯えている

ヴォルテールやフリードの真の姿でどうにかなるレベルやない！

つかトータスさんは知ってて言わなかったんか！？

そりゃ…そうよな

なのはちゃんですら動揺しとるもん

『む…繋がったか！！』

その時突然音声が割って入った

その声はレジアス中将！？

『おや：君か？何のようだい？』

スカリエッティが中将に尋ねる

『フンッ！用など無い：言ってもワシがやったことは消えん、ならそれを償うのみだ：先生や親友と会ってそれに気が付いたのだからな』

そう言って一旦言葉を切ると

『八神はやて及び機動六課の諸君：ラオシャンロンだがトータス陸尉とガルバート准将及び地上本部が引き受ける』

……嘘やろ！？

『ほお：勝算はあるのかい？』

レジアス中将は笑った

『貴様こそ嘗めるな、地上本部は負けんし：機動六課も居るのだしな』

始めて：レジアス中将が認めた？

『フフッ、それを楽しみにしているよ』

通信が切れ、レジアス中将との回線が残った

『では失礼する、なおトータスだが撃破しだいそちらに向かわせる：以上だ』

皆シンとしている

そんな時エリオが言った

「大丈夫ですよきつと：だってトータスさんですよ？」

そうや：

「そうやな！だって死神やで！負ける筈がないやん！！」

色んな意味でお爺さんとかお母さんとかと一緒に常識に当てはまらない人や

きつと何かやらかしてくれる筈や！

「ラルゴ提督：通信です」

ラルゴはゆつくりと受け取った

「もしもしラ『ワシじゃ！！ガルバートじゃ！！』なんだガルバートか…引退する気になったのか？なんなら大将にでもなるか？」

ラルゴとガルバートは年齢が近く同期である

ガルバートが昇進を蹴り続けなければ同じくらいの地位にいてもおかしくないのが階級の上下を気にせず2人は昔ながらのしゃべり方で話している

『どうしたもこうしたも…最高評議会が殺されたぞ』

ラルゴは全身が強ばった

「本当か？ミッドがやばいらしいのは聞いたが…本局が介入した方がいいか？」

するとガルバートは言った

『んにゃ違う、全力で暴れるから町の被害がちよつと増えるかも知れんと言うのと…来ないだの昇進を受ける、現役引退じゃ…流石に頼れる年長が少ない中で現役を続けるのは不味いしの』

それは管理局の伝説が終わると言うことだった

「分かった、ミゼット達に連絡を取る…それと死ぬなよ」

ガルバートは笑った

『ハッハ！！死なんわい…酒でも用意しておけ、ではな』
そうして通信は切れた

いよいよ物語は終盤を迎える

死神、思考（後書き）

なんだか最近スランプ気味
ラストは見えてるのに

レジアスですがゼストと腹を割った話し合いにより綺麗になってま
す

英雄となれ（前書き）

今年ももう終わりです
よいお年を！！

英雄となれ

地鳴りが響いた

地面から鋼の船が舞い上がった

正しく方舟

聖王のゆりかご

そして地上本部より約3?の地点の空間が歪んだ

「ギャオオオオオオオオ!!!」

凄まじい遠吠え…いや咆哮が響く

岩山龍：ラオシャンロン亜種

100mを優に越える巨体が地上本部に向かって歩き出した

「きましたあ!!」

観測員が叫び、地上本部の精鋭、約50人が整列した

「出来るのかよ…」

そんな中1人がポツリと呟いた

同じ頃なのは達もこの映像を見ていた

実物のラオシャンロンを初めて見ればそう思ってしまうだろう

「…出来る…よね？」

ポツリとフェイトが同じ様に呟いた時

映像にトータスが写った

「やっぱり不安ですか？」

トータスは彼に尋ねた

「ああ…撃退できるのかと思うのかとな…」

その気持ちは理解できる

だからトータスは言った

「それは違うでしょうよ」

隊員は驚いた

通信音声が聞こえてるのは達もトータスが何を言うのかと耳を済ました

「出来ないからやらないんじゃない、出来ないからこそやるんだろ！？」

隊員達はハッとした

「その通りだ！」

レジアスがいつの間にか立っていた

「ワシ等がここで引いたらミッドはどうなる？ここはワシ等が守ってきた！諸君、今こそ地上本部の意地を見せろ！！」

レジアスの叫びに全員に気合いが入った

「行くぞお！！飛べるもんはワシについてこい！！」

ガルバートの声を聞き全員が一斉に動き出した

ラオシャンロンはただ歩いていく

だが尻尾を振るだけでビルは崩れ踏みしめるだけで大地がへこむ

太古の天災と言われるだけあり一方的に地上本部に迫る

その時紅い閃光がラオシャンロンの角を直撃した

それを皮切りに、水色、黒、蒼白、碧色とりどりの魔力光がラオシ

ヤンロンにぶつかっていく

「うおおおおお！！」

トータスが大鎌を振るいラオシャンロンの角に叩き付ける

「でええりやああああ！！」

ガルバートが大剣でぶったぎりラオシャンロンが仰け反る

その隙に精鋭達が一気に魔力弾を打ち続ける

ラオシャンロンは身を振り首を振る

その一撃が直撃し何名かが一斉に離脱した

「怯むな！行くぞ！！」

トータスがブラックゴアバスターを構え龍撃砲を放つ

ガイズが懷に潜り込み乱舞の嵐を叩き込む

「ぐほっあ！！」

しかしラオシャンロンの尻尾が後ろにいたガルバートを吹き飛ばした

「つぐう…効くのう…」

流石ラオシャンロンである

「ガハア!!」

トータスも足に撥ね飛ばされた

多くの隊員が離脱したりボロクソである
だが皆決して諦めない

「グオオオオオオオ!!」

遂にラオシャンロンが立ち上がった

地上本部は間近に迫っている

「オラアアアアアア!!!!」

『くたばれ!!ラオシャンロン!!』

トータスが振るった鎌がラオシャンロンの角を叩き斬った

「ギヤオオオオオオ!!」

ラオシャンロンが仰け反った

「今じゃい!!畳み掛けえ!!」

ガルバートが背中に斬撃を食らわし、他の隊員も今が好機と猛撃を
叩き込む

そしてラオシャンロンは倒れた

『よっしやあああああ!!!!』

地上部隊員の歓喜の叫びが響いた

揺りかご内部

「うーん…辛いわねえ戦況が」

クワットロが呟く

管理局の白い魔王こと高町なのはは血の涙を流さんばかりに叫びながら聖王と戦っている

しかし…予想外の強敵によりチンクやトーレ達がノックアウトされている

はあ…とクワットロが呟いた時だ

カツン カツン カツン

足音が響いた

ゆっくりと近付いてくる

クワットロは思わず身構えた

そして…

「なんだ…またお前か」

左手にブラックゴアバスター

右手にトーメントを持つ殲滅形態のカマイタチフォームのトータスが現れた

「い…いやあああああああ！！！！！！！！！！」

クワットロは絶叫した

魔王と聖王の激戦の最中…揺りかごに死神が乱入した

英雄となれ（後書き）

次回：死神、聖王を泣かせる
お楽しみに！

魔王、聖王、鬼神（前書き）

連日投稿！

魔王、聖王、鬼神

「貴様…何故下がる？」

トータスは一歩ずつ前へ出る

「い…いやあ…今頃来るなんて!？」

トータスは引っ掛かった

「……今頃? どういう事だ」

圧迫感に押されクワットロは言ってしまった

聖王となったヴィヴィオとなのはが戦っており、それを仕向けたのは自分だと

「……そうか…フルドライブじゃ足りねえなああああああ!！」

鬼 神 再 臨 ! !

トータスの全身からAMFを物ともせず魔力が吹き上がる

リミットブレイク

デバイスと自分の限界を越える出力を叩き出す危険極まりない…だが破壊力はお墨付きの状態だ

「久方ぶりだな…食らえ龍撃砲」

トータスが銃口を向ける

『悪いが今のボスと私には慈悲はない…何故なら私達は騎士ではない』

トーメントが喋る

『「ただの…鬼神だ」』

クワットロを暴力的な光が飲み込み……壁をぶち抜き聖王の間へと繋がった

「行くか…」

トータスは歩き出す

カッン カッンと地獄の使者として

「何…あの爆発」

なのはは振り向いた

「分からない…」

ヴィヴィオも言った

クワットロに操られていたがトータスがブツ飛ばしたので洗脳は消えている

だが一旦覚醒してしまったため止まらないのだ

なのはへヴィヴィオが拳を振るおうとした時

強烈な殺気が2人を襲った

例えるなら龍に睨まれているような…シグナム達のような上からの圧力ではない

野生動物のソレに近い…その比では無いが

「……無事か？」

やって来たのはトータス

なのははほっと胸を…撫で下ろせない!!

『いやああああああ!!』

緊急事態に成ってしまったのだ!!

トータスを除く六課メンバーに強烈な念波が届いた

『何があったんや!?!』

はやてから返事が来て

『なのはさん!!』

『大丈夫ですか!?!』

『今、エリオと一緒に行こうか!?!』

次々と返事が来た

「う…うわああああああ!!」

恐怖のあまりトータスに殴りかかるヴィヴィオ

「おおおおお!!!!」

銃槍を投げ捨て大鎌を振るいトータスも迎撃に出た

普段と段違いの早さでありまさしく鬼神だった

『ヴィヴィオ：ヴィヴィオと……』

なのは頭を抱えながら念波を送った

『ヴィヴィオが！？』×a l l

なのは遂に送った

『トータスさんと会っちゃった……号泣しながら戦ってる』

『なんでだああああああああああ！！』×a l l

全員の絶叫念波が響いた

「やだやだやだやだやだやだ！！！！来ないで！！トータスさん恐い恐い恐い！！！」

しかし体は勝手に動くヴィヴィオ

「どちくしょうが！！ソツチから来てるんだろう！！！」

やっぱり陸戦最強と称されるのは伊達じゃない

今のヴィヴィオの攻撃を喰らいながらも一歩も退いてない

私やフェイトちゃんには無い強烈な腕力で強引にヴィヴィオの攻撃の流れを押し止めている

「あれ？ひよっとしてチャンス！？」

私は砲撃をチャージし始めた

ヴィヴィオの意志が

「いやああああ！！骸骨恐い恐い！！！」

トータスさんへの恐怖のせいで私に向いていない最大のチャンスだ

「くそ！！落ち着けヴィヴィオ！！自分を取り戻せ！！」

ハイキックでヴィヴィオを強引に引き剥がすトータスさん

……今ヴィヴィオがパニックな原因は貴方の顔面です

チャージはあと少し：

「ブラッドホルン！！おりゃああ！！！」

「その武器恐いよおおおおお！！もうやだあああああ！！」

遂に恐怖の笛まで持ち出したトータスさん

しかし：ヴィヴィオが下がった瞬間最大まで溜めた私のスターライ
トが直撃した

不意打ちに近いけど：後で謝ろう

ヴィヴィオは子供に戻っている

その時アウンスが流れてバリアジャケットが解除された

「何か嫌な予感がするな：持ってたよ」

トータスさんは黄色の液体を取り出して飲み干した

そしてヴィヴィオを肩に担いだ

「さて：脱出しますか！！」

トータスさんは笑った

敵に絶望、味方に苦笑を与え既存の常識をぶち壊したトータスは大
暴れしてのけた

だが：後の功労者表彰は受けた物の管理局の 厳命 によりマスコ
ミ取材や雑誌インタビューでの騎士甲冑禁止が言い渡されたのは言
うまでも無いだろう

魔王、聖王、鬼神（後書き）

もうすぐ終わりが見えてきました

死神、大出世（前書き）

出来ました！

死神、大出世

さて…主犯のスカリエッティは捕らえられナンバーズも六課前線メンバーが活躍し捕えたらしい
後ルーテシアと言う少女が居たが…エリオ達を攻撃しようと洗脳されていたがオウビートのエリオを見て攻撃出来ず洗脳を解くべくなんと壁に頭突きをしようと言う奇行に走り気絶してしまったそうだ
蟲を愛しているからだろうな

で…俺はと言うと…

「正気ですか？」

俺は中将閣下に尋ねた

「そうだ…あまり例がないがな」

中将閣下は苦笑いしている

「……何か理由が？」

俺は中将閣下に問い掛けた

すると中将閣下は顔を真剣にしていた

「ワシはやってはならん事をした…スカリエッティに情報を流したりして、最高評議会の力を借りる等した…ただ地上を守りたかった…それだけだったのにな、いつしか道を誤った」

余りにも重い言葉だった

守りたかったが故に道を誤った…悲しくなってくる

「ワシはクビで…ここには関われなくなる、司令も変わるだろう…多分本局側に有利な人材にな」

俺は無言で聞いていた

「だからこそ…いざというとき現場の声を叫び届かせる…それを認めさせる力がある、今のお前なら出来る…一応本局からも反対意見はない、ナンバーズ3人の生け捕りにラオシャンロンの撃破…十分

すぎる程の理由だからな」

言っている事が分かった

「つまり…昇進して抑止力になれと」

親本局側の人間が司令になったら人材がより流れ易くなるかもしれない

面と向かってソレを批判したり改めるようにさせるにはそれなりの力と地位がいる

中将は俺にさせようとしているのだ

俺は管理局転覆を防いだ六課の一員として、また地上本部のエースとして知名度も上がり始めてる

つまり…後は地位だけだ

「……来期からは？」

俺は尋ねた

昇進を受けるなら多分転属だからだ

「陸士058部隊…治安維持の最前線だ、その部隊長だ…大隊式の資格は取れるだろう？」

いや取れるけども……これまたハードな…

「頼めるか？ トータス」

全く…

「了解しました、その辞令を受けます…んで地上を支えて見せますよ」

中将閣下は安心してつつ手を差し出した

俺はその手を握った

「ありがとう…あとは任せたぞ……二等陸佐」

もう佐官とはな…

まあ精一杯やるだけだ

「トータスさん忙しいみたいだね」
なのはが言った

「あくまでこっちには出向っちゅう形やしな」

はやてが言った

地上本部は明日にもレジアス中將が逮捕されてしまうので上を下に
の大騒ぎになっている

トータスさんもそのゴタゴタに巻き込まれてしまった

地上本部へ行くトータスさんにこの機にはやてが本局に来ないかと
誘っていたけど断られていた

地上本部に骨を埋めるつもりらしい

だからこそ率先してゴタゴタに巻き込まれに行つたのだろうか

執務官の経験からして：レジアス中將は多分減刑されるだろうけど
クビは間違いない

トータスさんはどうするんだろう：と思った時

「今戻つたぞ：疲れた」

トータスさんがやって来た

「……あ！おかえりトータスさん！！」

なのはは少しひきつりながら挨拶した

ヴィヴィオだけど：トータスさんの事はしっかりと覚えていた

お見舞いにいったのはが病院食のニンジンを残した時

「……トータスさんが怒っちゃうよ？」

ボソツといった瞬間

「食べる！！食べる食べるからおじちゃんに伝えないで！！怒った
おじちゃん恐いからああああああ！！！！！！」

猛烈な勢いで食べ始めた

バツチリ……トラウマになっていた

どうもヴィヴィオの中では優しいトータスおじちゃんは悪いことを
すると悪魔か死神になって凝らしめる存在に成っているみたいだ

「やれやれ：来期から大変だよ」

トータスさんが愚痴った

トータスさんが緊張しながら言った

「い：以前のお返事です：」

トータスさんが事態に気付いた

なのはさんなんかゴクリって息を飲んでる

「こ：こちらこそよろしくお願いします！」

ギン姉の返事が終わった

「ああ：良かった、凄い嬉しいんだが：場所が悪いな」

ギン姉は見渡して：事態に気付いた

「いやあ：熱いわあ！おめでとさん！！」

ギン姉は顔を真っ赤にして

「きつつ：きやあああああああ！！」

走り出した

「おい！ちよつと待てええええ！！」

トータスさんがそれを追って走り出した

頑張れ！！トータスさん！！

お幸せに！

……ついでにご飯奢ってくれないかな

死神、大出世（後書き）

トータス大出世！！ついでに彼女も出来ました！！

次回は…六課の中で誰が強い？です

六課の中で誰が強い？（前書き）

何故かギャグに…

ひさびさにスレッド復活！

六課の中で誰が強い？

ヴィヴィオが退院したある日の事ヴィヴィオがポツリと呟いた
「誰が一番強いのか？」

前線メンバーは興味がわき調べてみようかと聴き込みを開始した

「だめ…全然分からないよ…」

スバルがグテェと机にだらけた

「皆さん自身あまり興味が無いみたいです…」

エリオが呟いた

ティアナもキャロもウーンと唸っていた時

「何してんだ？」

ヴァイスが話し掛けてきた

「ああヴァイスさん…実は六課内で誰が一番強いかわ調べてるんですよ」

ティアナが説明した

「だったら3チャンネルはどうだ？あの人達みんな有名だからスレはあるだろ」

ヴァイスが端末を繋げ画面を開いた

「えーっとスレ検索…おっ出た！」

画面に出たのは…

【次元が違う】 有名人を語れ【眺めてよう】 38

1 名無しの管理局員

ここは本家有名人を語るスレの分家だ
彼女らの武勇伝やトラウマを語ろう！

2 名無しの管理局員

>1乙

じゃあS空尉の武勇伝いきます

3 名無しの管理局員

おっばい!!おっばい!!おっばい!!

4 名無しの管理局員

おっばい!!おっばい!!おっばい!!

5 名無しの管理局員

おっばい!!おっばい!!おっばい!!

6 名無しの管理局員

おっばい!!おっばい!!おっばい!!

7 名無しの管理局員

>2ゝ6

おまいらの頭にはおっばいしかイメージないのか?

おっばい!!おっばい!!おっばい!!

8 名無しの管理局員

バロスw w w w w

でも美人で胸でかくて強いよな

まさにパーフェクト!!

9 名無しの管理局員

扱きの際には『しっかりしろ!!』とか『貴様ら!! 気合いが足りん!!』と罵ってくれるらしいぞ!!

10 名無しの管理局員

>9

俺六課行ってくるわ

11 名無しの管理局員

まあマジレスするとS空尉の強さってのはオールマイティーなんだよね

飛び抜けて高いものは無いが皆高水準
万能型

12 名無しの管理局員

>11

おっぱいもそれに含まれるよな?

13 11

>12

当たり前だ!!

あのおっぱいは至高だぞ!!

14 名無しの管理局員

>13

つまり…究極のおっぱいはF執務官だな

15 名無しの管理局員

ごくり…ソニックフォームで俺の股間が…

16 名無しの管理局員

>15

カートリッジロオオオオオオオド!!!!!!!!!!

17 名無しの管理局員

>16

いや…リミットブレイクだあああああ!!!!!!

18 名無しの管理局員

→は何してんだか…

ふう…

19 名無しの管理局員

>18

いやおまい賢者モードになってるぞ？

20 マジレス係

以前S空尉でマジレスしたものだけど…取り合えずF執務官の強さ
ってのはやっぱりスピード

全速の速さは全魔導師最速を誇るだけあって半端じゃない

俺達の股間暴発もめっちゃめっちゃ速いけどな

21 名無しの管理局員

>20

ちょwwwおまwww
最後イラネ

22 名無しの管理局員

俺はピンクがだめだ……

23 名無しの管理局員

>22

やめろ！！思い出したいくない！！

24 名無しの管理局員

一体何人が犠牲になったのだろうか…

あのビグ〇ムを彷彿とさせる彼女に…

25 名無しの管理局員

>24

やめてくれ…やめてくれよ

あの砲撃で何人犠牲になった!?

あの鉄壁に何人が絶望したんだああああ!!

26 名無しの管理局員

>25

落ち着け!!

先ずはえいせいへ…いやタイムマシンを探すんだ!!

27 どこかのフェレット

僕は…あの人に撃たれたいんだ…

……ごめん、告白してくる

28 名無しの管理局員

>27

おま!!ちよっ!!

29 名無しの管理局員

>27

あんた!!フェレット司書長だろ!?
ドMだったのか!?

30 名無しの管理局員

>27

勇者が現れた…がんばれフェレット!!

31 どこかのフェレット

みんな!逝ってきます!!

32 マジレス係

>27

勇者が現れたな…がんばれ
さてマジレスするぜ!!

ビグ○ム教導官は圧倒的な防御力で耐えに耐えて…砲撃でねじ伏せ
る訳だ

どっかのタヌキと同じかな?

33 名無しの管理局員

>32

タヌキwww間違いないねwww
腹ぐるタヌキ!!

34 名無しの管理局員

腹くろいよなあ…可愛いのに…

35 名無しの管理局員

>34

残念だよなあ…残念可愛い

36 名無しの管理局員

>35

うは！！新しいな

タヌキ部隊長は残念可愛い！！

37 名無しの管理局員

残念可愛い…：腹黒タヌキ部隊長にぴったり

38 名無しの管理局員

タヌキ部隊長は以外にスタイル良いんだよな…
性格はちよつと残念だけど

39 マジレス係

さてマジレスするか

残念タヌキ部隊長は機動も防御も大したことはない
ただし…絶大な破壊力を遠距離に飛ばせる…最強の固定砲台だね

40 名無しの管理局員

ロリ副長に萌えるわ

41 名無しの管理局員

>40

激しく同意
罵りたい

42 名無しの管理局員

ぶっ叩かれない：
一緒にゲートボールしたい

43 名無しの管理局員

合法ロリは貴重だよね

44 マジレス係

マジで貴重だ合法ロリ：
まあいいや

画像で萌えよう

ロリ副長の強さは破壊力
機動力よりも何よりも破壊力！！
全てをぶち壊すロマンハンマー！！
キュートだよね！！

45 名無しの管理局員

>44

マジレス係はロリ副長が好きなんだな
そんな貴方にこれはいかが？
jpeg, dpgm, pma

46 名無しの管理局員

>45

ぎやあああああああ！！

47 名無しの管理局員

>45

でたあああああああ！！

骸骨だああああ！！

48 名無しの管理局員

>45

出たなトラウマメーカー！！

いや！すまんせん余計な口効いて

49 マジレス係

>44

……いや遠慮しとくわ

この人は……怖い

怖い上に強いんだよな

ある程度砲撃も補助もこなせるし最大の特徴はロリ副長に匹敵しか

ねない腕力

その一撃は相手を絶望に叩き込むし……笑った瞬間ガキが泣くらしい

管理局員最”恐”は間違いないな

「…………色々分かったね」

スバルが呟いた

皆沈黙している

そして皆の結論は殆ど同じだった

結論

六課メンバーの強さはよく分からない

だけどトータスさんは間違いなく管理局最”恐”

後日なのはさんがずっとニコニコしていた

ニコニコしながら砲撃をぶっぱなしていた

フェレットさんの告白が成功したみたい

だからといってメニユーに力入れすぎです

ああ！ピンクの光が！！

ティアナは薄れゆく意識の中そう思った

短編二本立て（前書き）

何だか尻切れトンボに…

ひよっとしたら修正するかもしれません

短編二本立て

「これは…」

はやては聖王教会から預かったロストロギアを見た
なのは達も回りで見ている

「何なのそのロストロギア？」

フェイトが尋ねた

「えつとなあ…これは時操りの歯車ゆうて1日対象の年齢を10年
引き上げるか引き下げた姿にしてくれんねん」

なのはは漸く理解した

「つまり…10年後の自分と10年前の自分に変身できるんだね？」
はやては頷いた

「カリムが危険性は無いからたまには楽しみなさいってくれたんで
…シグナム！シャマル！！」

はやてが2人を呼んだ

「い…今いきます！」

「ちょっと待って！」

2人の声がしたが…どこか幼い

そして入ってきたのは背が低くなり、何故かはやての中学時代の制服に身を包む2人だった

「へ？」

なのはは呆然とした

「……可愛い感じ」

フェイトも呟いた

「よしっ…ヴィータに試しに行くで！」

「「オーッ！！」」

はやてのノリに思わずなのは達ものった

……まあたまにははっちゃけるのも良いだろう

海上施設

ここは判決を受け社会復帰が可能とされた犯罪者にプログラムを行い無事に復帰させる施設である

「コラアアアア！走るのを怠けるな！！」

カルタスが運動中のナンバーズを叱咤する

チンクは真面目に走っているが他はダラダラしている

「だってめんどくさいッス」

ウェンディの一言にチンク以外が頷いた

「そうか…なら強制的に走ってもらう！！……お願いします！！」

ウェンディ達の後ろのドアがバターンと開いた

そして：

「久し振りだな…お前らアアアアアアアアア！！」

猛スピードでこちらに走ってくる骸骨騎士が！

「出たッスうううううううう！！」

「何で！？何であいつがここにいるんだよ！？」

「逃げろ！さもなければまた鎌で斬られるぞ！！」

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

『イヤアアアアアアア！！！！！！』

土煙を上げながら全力疾走するトータス

恐怖の余り瞬時に走り出すナンバーズ：

カルタスはニヤリとどこぞの新世界の神の様に呟いた

「……計画通り……！！」

さてカルタスの頼みを終えたトータスは六課に帰還した
すると：

「トータスさん!？」

赤毛だが腹筋が割れ背も延びた誰かがいた……いや

「お前：エリオか!？」

因みにふと横を見ると胸に手を当て落ち込んでる少女が：やはり大きくなっているが：

「おい：キャ「年取っても：小さいままなんだ：」……………」

トータスを取り合えず事情を聞いた

「年を取らせたり若返らせたりするロストロギアねえ：「喰らってみる?」ああ良いかもな：ってなに!？」

いつの間にか背中後ろに隠れてたはやてがロストロギアをかざし：光が体を包んだ

「さあ!10年前、スバルくらいのトータスさんのお目見えや!！」
其に合わせでなのは達も見に来た

因みにフェイトとなのはは10年後になっており母性に溢れていて
はやては10年前の姿になった

「どんななんになるんだ!？」

年を取った姿：セーラー服がよく似合うヴィータが言った

「どんな風になるのかな？」

スバルはまだ変身してない

「さあ：」

ティアナは年を取って勝ち気な美女となっている
そして：

「……体が縮んでるな」

やや高めになった声が響いた

全員が注視した

逞しい筋肉は嵩は減ったが健在

身長は175以上の少年が現れた

「デカっ！」

はやてが思わず叫んだ

シグナムは若返っても胸はバインバインだった

シャルも胸はそのままだった

トータスも高い身長そのままに筋肉も付いていた

エリオは自分が20の時にようやくトータスと一緒になるのに悲しみ
キャロは2人との戦力差を味わい絶望にうちひしがれた

それからしばらくキャロはシャル達とギクシャクしエリオはトータスに背を伸ばす方法を聞きに言ったのは言うまでもない

もし：リリなのに個人の奥義的魔法として固有結界があったらトータスだとこんな感じ

ノーヴェ達は空からの乱入者に目を向けた

死神騎士、地上本部最強と詠われる無双の騎士だ

「お前らは俺の大事なものを傷付けた：！！絶対に許さん！！」

トータスが魔力を迸らせカートリッジを限界近くまでリロードする
それを見て3人は身構えた

『体は信念で出来ている』

声が朗々と響く

『血潮は意地で、心は不動』

その志はいかなる時も折れない

『幾度の戦場を越え生存』

その信念はどんな時も生き残る

『ただの一度も敗走はなく』

その力は護るためにあり

『ただの一度も諦めはない』

敵を打ち倒す為に存在する

『騎士は独り、倒れる事無く皆を待つ』

数少ない魔導師が行き着く最強の技

『故にその生きざまに意味がある』

自分のココロを形にする魔法

『その姿はきっと騎士の憧れで有り続けた』

奥義：固有結界が発動された

世界が一変する

クラナガンの魔力の流れに干渉し世界の有り様を変える

数少ないニアSランク魔導師以上が辿り着ける固有の魔法

「固有……結界、想定外だったな」

チンクが構える

突き抜けるような青空

だが大地には無数の大太刀が、空には銃槍が浮かんでおり……後ろに巨大な砦が出来ている

「……『最終決戦』この結界の名だ」

トータスが足を動かす

「言葉通り……これがお前達の最終決戦だ」

トータスが腕を振る

太刀が浮かび上がる

「ウオオオオオオオオ！！」

ノーヴェが突進する

「……終わりだ」

トータスの眩きと共に……あらゆる太刀が3人を襲い、銃撃の嵐が来て、砦から大砲やバリスタによる重火力砲撃が行われた

バリンと音を立てて結界が壊れた

ソコにいたのは完膚なきまでに叩きのめされたナンバーズと息が荒いトータスだけであった

完全番外編 死神、常識外（前書き）

ありがとうございます
番外編です

完全番外編 死神、常識外

シャマルの必殺技にリンカーコア摘出がある

ちなみに摘出しなくても手が胸から生えて恐怖心は拔群

そんなシャマルだがトータスは大の苦手だ

騎士甲冑は恐ろしいし武器も怖い

顔はマジメで驚いたりビクリ顔は見ることがない

だからこそ魔が差したのだろう

トータスの胸から手を生やしたのだ

（さあ！！焦って驚いて！！）

何もシャマルとて本気で摘出する筈がない

キャラが薄い自分が貴重なトータスの驚き顔を取ってキャラを立てたいだけなのだ

だが：読者諸兄はお分かりであろう

本編に於いても人気がないのは実力のせいと判断し諸悪の根源たるデスギアを一切変えなかったようなズレた奴である

ニョキッ！！と飛び出た白魚の如く美しい腕

トータスの顔から表情が消え停止する

そして：無言のまま表情を変えず：そして躊躇無く胸から生えたシヤマルの腕を握り潰しに来た

（いっただああああああああああああああああ！！）

シヤマルは悲鳴を上げている

近代、古代と種別こそ違うが同じベルカの騎士

だがトータスは腕相撲でヴィータやザフィーラとやり会え、シグナムを振じ伏せる豪腕であり、その握力は100?を越えており全管理局員の中でも上から数えて直ぐ呼ばれる位置だ

鍛えられた筋肉美はかなり凄い

腹筋カチカチでキャラが殴ったらキャラの方が痛めた筋肉だ

魔力こそ使っていないがその膂力は凄まじい

と言うか豪腕を生かし引っ張っている!!

「や…やめてえ!!」

シャルは慌てて物陰から飛び出し事情を説明した

「……まったく、イタズラも程々にしてくれ…流石に血の気が引いたぞ」

と言うがパニックにならず速攻で握り潰しに行くのは主人公としてどうだろう

因みにシャルは後で捕まれた腕を検診したが…バッチリとヒビが入っていた

ここから先は本編に一切関係無いイフの世界です

その情報はユーノからもたらされた

リインフォースを蘇らせれるかもしれないと

「それ…ホンマなんユーノ君？」

はやては興奮気味に、リインや守護騎士、なのは達も聞いていた

「途方もない莫大な魔力が要るけどね…いわゆるサルベージって奴さ」

特定の術式に加えそれに縁の近いものを基点としはやての魔導書の中にある残子を引っ張り出し修復する

「でも…そうとう難しい…失敗してもコッチにリスクは無いけど二度と出来ないんだ」

はやては考え込んだ

その時ドアがバターンと開いた

「スバルにティアナ!？」

なのはが叫ぶ

「キャロ…エリオ…」

フェイトが呟いた

「私達も手伝います!!」

「今手伝えるのは僕くらいですし…手伝いたいです」
はやては少しぐずった

「あ…ありがとうな…よし!やるでえ!!」

『オーーーーーッ!!』

その時ザフィーラは思った
トータスの事忘れてないか?と

その日から魔力の問題が付きまとった

復活チーム全員がフルカトリッジして魔力を放出しても足りない
ジュエルシードレベルが複数必要だ

「あかん…行き詰まった」

はやてがぼやく

「龍種の一部には魔力が込められてるけど狩るわけにも収集する訳
にもいかないし…」

フェイトも呟いた

またまたザフィーラは聞いていたのだがちょっとピンと来た

たまにトータスと酒盛りをすることがあるがその際に龍から出た宝
石を集めているだの言っていなかったか?

また同じ事にユーノも気が付いた

なのはに贈ったペンダントはトータスから貰った龍の宝石が着いて
いる事を!!

2人は同時に駆け出し扉を開けた

「「すまん(ごめん)!力を貸してくれ(下さい)!!」」
トータスは呆気に取りられた

「取り合えず座れ…話しはそれからだ」

ユーノはトータスに事情を話した

「……………事情は分かった、提供するのに問題はないが…俺が持つていく」

ザフィーラが何故と尋ねるとトータスは言った

「運が悪ければ発狂しかねん代物だ…キャロやエリオなんかは一発だろうな」

そして慎重にとある物を取り出した

途端ユーノは目を逸らした

ザフィーラは闇の書より禍々しいオーラを感じた

だが込められている魔力は圧巻の一言だ

それを3個ほど取り出した

「よし…いきますか」

トータスは歩き出した

はやて達に合流したが…闇の書を知るもの全てが警戒した程だ

「これ…何なんですか？」

ティアナが尋ねたが一瞬で後悔した

「黒龍と紅黒龍と祖龍の目だが？」

全部第1種生態ロストログアの遺品である

勉強中のティアナは震えながら言った

「1人で…取ったんですか？」

トータスは首を振ったので安心した瞬間

「俺が殺したのは黒龍だけだ、後は母さんと爺さんだぞ」

ティアナは思った

つくづく非常識な一家であると

この後トータスの持ってきた目のお陰でリインフォースは復活するがユーノがトータスの部屋のアイテムボックスを調べたところロス

トロギアクラスの物や超古代の遺物、巨大な爪、甲殻、翼などがゴ
ロゴロ出現し皆を唾然とさせたのはまた別の話し

完全番外編 死神、常識外（後書き）

リインフォース復活のやり方はうまく思い付かなかったのでもう
りました

突っ込まないで頂けたら幸いです

死神、ゼロ（前書き）

魔が指してしまいました

一話完結のゼロ魔のクロスです

死神、ゼロ

「ここどこだよ……」

遠くには中世風の建物
吹き抜ける爽やかな風

此方を凝視する生徒

俺は思わず呟いた

「ア…アンタ誰？」

ピンク髪の少女が見上げつつ言ってきた

おい…洒落にならん所に来たかもしれん…

『ボス、座標確認不可だ』

トーメントの声が虚しく響く

「そ…それはナニよ!？」

ピンクの少女が叫んでいるがもうどうだっていい

なんでケーキを買いに行っただけでこんな目にあわにゃなんのだ
!？

「……名前か？ トータス・ヴィレンだ」

溜め息を着いていたらいきなりキスをされた

文句を言おうとしたら左手に激痛が走った

不思議なルーンだとか言われたが聞き逃せないのは使い魔の儀と言
う言葉だ

……俺はモンスター扱い!？

回りの生徒がじゃあなゼロのルイズ!! とか平民か、お似合いだと
か言っていた

オマケに飛んでる

魔法使いの管理外世界か!!

ルイズが行くわよとか言いながら歩き出した

俺はついていくしか無かった

着いたら着いたらで藁で寝ることが確定
俺だから良いけどな：

狩りで慣れてるしな

洗濯も命じられるとは思わなかったが……

目が覚め洗濯場を探す

近くにいたメイド：シエスタに教えてもらった

親切で良い子だ

部屋に戻るとルイズが仁王立ちしていた

ヤバイ、怒らせたらしいな

すると向かい側から背の高い美少女が現れた

ルイズと言いつ争ってる

足元には：サラマンダー？とか言う奴か？

「あら貴方サラマンダーが恐くないの？」

その美少女が言ってきた

「ん？こんな小さい奴にビビりはしないよ、……身の丈よりでかい
やつに追われたことがあるからな」

「んなもんいるわけないでしょうが！！」

ルイズが絶叫している

いや事実なんだが：

ルイズに引つ張られつつ連れていかれた

「あの男性：只者じゃないわね」

私は呟いた

ルイズは気付いてないけどフレイムが萎縮していたのだ

サラマンダーの本能を感じたのだろうか

「興味が沸いてきたわね」

私は足取り軽く食堂へ向かった

腹が減った：アレだけじゃ足りないぞ流石に
ルイズは立場を教えるためと言っている
誰でも良いから助けてくれ
クロノ辺りが通りかからんかな

そうこうしている内に授業の時間だ

人がジロジロこっちを見ている

俺は見世物じゃないぞ

と言うかヴィータに頼まれてケーキを買いに出ただけなのにな
が俺は目を奪われた

石が真鍮に変わったのだ！！

「質量保存の法則はどこいった……？」

まさしくファンタジーの魔法だ

どっちかって言うとな俺等は魔砲だしな

ルイズが当てられて前に行き鍊金をする

途端に魔力が暴走しているのが分かった

次の瞬間爆発が起きた

「プロテクション！！」

紅い魔力が俺を守る

が想像より威力が高いな！

防ぎきったが：周りは散々足る状況だな

『魔力は有り余ってるようだがな』

あの子：どんだけ魔力があるんだ？

少なく見ても俺よりやや下：下手すればなのはを越えるぞ？

片付けを命じられ片付ける

「ここは俺がやっとかから先に行っというて」

ルイズは頷いた

「やっと使い魔らしくなったわね!!」
そのまま歩き去った

「チェーンバインド!」

紅い鎖が動き瓦礫を片付けていく

ルイズに見られたら突っ込まれるしな

『ボス、言いように使われるぞ』

「ここは異世界だ、救助がいつくるか分からん、幸いにクラナガンと魔力濃度がそっくりだからリンカーコア障害は起きないし…いざとなったら逃げ出せば良い…ルーンの解析は?」

『効果は不明だが洗脳プログラムらしき物が発見された、取り合えずブロックしている』

「流石だな相棒」

俺は頷いた

『当然だ、ボス…俺は貴方のデバイスなのだからな』

コイツがいて良かった

居ないと近い内に洗脳されてるしな

飯を食べに食堂に行くとシエスタが絡まれていた

会話を聞けば一方的に向こうが悪いが文化レベルは中世クラス

貴族に平民は逆らえないと言う奴だ

……腹が立つな

動こうとしたときルイズがキレて男に文句を言った

いいところあるじゃないか…と俺が思っていたら

「良いだろう決闘だ!!」

男が手袋を叩き付けた

ちょっと待て！

恥ずかしくないのか男が女に挑んで！？

「おい！君！！女性に決闘を挑んで情けなくないのか？」

「トータス！貴方は黙ってなさい！！」

ルイズはズバツと俺の突っ込みを切り捨てた

「……と言うとなんだい？君が引き受けるんでも？」

少年がギロリと睨み付ける
が全然怖くない

「ああそれで構わない」

この平民…バカなのか？

まあ良いさ

「良いだろう！ヴェストリ広場で待っているぞ！！」

平民にメイドが近寄っていった

「貴方…殺されちゃう」

「ん？ああ平気だよ、ヴェストリ広場ってどこだ？」

腹正しいなまったく…叩きのめしてあげよう

後で聞いたらギーシュと言うらしい

「諸君決闘だ！！…さて平民君！！僕は貴族だから魔法を使う！構わないね？」

「ああ構わない」

言うとかレヤレと言った顔をした

「いけっワルキューレ！！」

地面から人形が出てきた

「……変わってるな、さてトーメント!! セットアップ!!」

トータスが変な掛け声を上げた
そして…

「さあ!! かかってこい!!」

骨を纏った死神が現れた

「ギャアアアアアアアア!!」

広場に悲鳴が轟く

私も逃げ出したいわよ!

何!? アイツ化け物!?

「始祖よ! お助けくださいいいいいいい!!」

「ギーシュ逃げろおおおお!!」

広場に悲鳴が更に広がる

学院長室では

「コ…コココルベール君!? アレハなんじゃい!?!」

「し…し…ししし死神ではないかと!!」

『何で死神がいるんだああああ!!』

男2人で抱き合っていた

ギーシュは恐怖のあまりワルキューレを7体繰り出した……が

「気刃一閃!」

突如現れた鎌に赤黒い刃がまわり巨大な刃となり全部真っ二つに
してしまった

「敗けを認めるか?」

「は…はい…」

この日よりハルケギニアに死神が現れた

後世語り継がれたところ

始祖の再来たるルイズと共に駆け抜け空より来た方舟に乗り元の世界へ帰ったとされる

特筆すべきはアルビオンの7万を止めたことだが死者は一切出ていなかった

しかし彼を傷付ける事は出来ず悠々と立ち去ったと去れる

また大隆起が起こる原因となる風石の鉱脈を”砲撃魔法”とやらでコナゴナにしロマリアの暴走すら押さえってしまった

当時の教皇は彼を大変恐れており彼が残した文書からそれが伺い知れる

『私は語られぬ第4の使い魔よりあの死神のガンダールヴが恐ろしい』

……出現し牙を剥いた第4の使い魔さえ瞬殺したのは有名な話である……

死神、ゼロ（後書き）

サイトでアレなんだから彼より遥かに強いトータスにガンダールヴ
補正がかかったらこうなると思います

ヨルムンガンド？

手でブッ飛ばします

俺に勝つのはまだ早い(前書き)

後書きにおまけがあります!!

俺に勝つのはまだ早い

「……大したもんだ、一年足らずでここまで上がるとはな
俺は感心しながら言った

「……ありがとうございます」

エリオはボロボロだ

俺もあちこち傷付いている

「が……通った修羅場が違う、お前に負ける訳にはいかんのでな」
俺は鎌を構え直した

「掛かってこいエリオ!! お前の力…見せてみる!!」

「うおおおおおおお!!!!」

エリオが槍を振るって踊りかかった

あと一ヶ月ほどで六課が解散になる今日

ことの始まりはスバルの発言だった

「エリオってさあ…シグナムさんとはかなり全力の模擬戦してるよねえ…」

「あ、はい! 得る物が多くて勉強になります!!」

エリオを見てスバルは何の気なしに言った

「トータスさんとはやったことあるの?」

訊かれてエリオはハツとした

簡単な模擬戦はともかく本格的なのは一度もやってない

シグナムさんとは違ったタイプの完成した騎士とのほぼ全力の模擬戦はまた別の得るものがある筈だ

「ちよっと聞いてお願いします!!」

これが元だ

さて端から見るとエリオの方が手数が多い
右、下、左上、右、突き、左下、右上と縦横無尽にラッシュを繰り返す

見学していたティアナ達がひよっとするとひよっとするかも！と思う程圧倒的な手数だ

がトータスは暴力的なまでの薙ぎ払いの一撃で弾き飛ばした

エリオが速さ

シグナムが万能

ヴィータがパワー型の騎士

トータスはヴィータ側の騎士だ

トータスはヴィータやなのはに機動力が大幅に落ちる

空戦は取れてもあくまで飛べる陸戦魔導師ではない

トータスが優れているのは圧倒的な突破力だ

コレに関してはヴィータすら凌駕するだろう

コンスタントに大威力の魔法斬撃に加え鍛えた筋肉が生み出す豪腕は止め方が限られてくる

一番簡単なのは空飛ぶピンク戦艦に撃ちまくってもらうか金色のセクシー魔導師の全力スピードで常に翻弄するしかない

そのため傍目はエリオ有利でもトータスのなのはに匹敵する装甲をぶち抜けず：抜こうとした瞬間に強烈なカウンターを食らって吹き飛んでいる

がそのスピードは早くトータスが槍のラッシュの中で自分の急所にあたる場所だけを弾いていることからエリオの騎士の力に気付いているからだ

（全く：小さな騎士とはもう言えんな）

エリオの槍のラッシュを捌いた時エリオが槍を滑らした

「な！？」

それは持ち手を強打しトータスの手からトーメントがすっば抜けたその瞬間怒濤のラッシュが繰り返される

回避しているトータスが一瞬だけ止まった
その隙を龍騎士は逃さない！

「貰いました！！！！紫電一閃！！！！」
稲妻を纏った槍が迫る！

「え！？これもしかして！！」
スバルが叫ぶ

「エリオ君が勝つかも！？」
キヤロが喜ぶ

「いくらトータスさんでも至近距離であの一撃は耐えられない！！」
ティアナも言う

「……引っ掛かったな？」

エリオはゾクリとした

止まっていたトータスの体が滑らかに動く

拳が燃えてる

止まったのはチャージ時間の確保と自分の突っ込むルートを制限するため！

それに気が付いた時エリオは罠にはまった事に気が付いた

「炎爆撃鉄ツツ！！」

爆発するカウンターストレートが叩き込まれエリオは飛ばされた

万能型のシグナムは有りとあらゆる状況に対応できる

相手の土俵で勝負することも可能だ

だがトータスにはそれが不可能だ

シグナムならエリオとスピードを競えるだろうがトータスなら自殺行為に等しい

ならば何があっても自分の土俵から出なければいい

トータスの強さはソコにある

「いったあ…」

エリオはゆつくりと立ち上がった

「よくここまで来たな、こりゃ小さな騎士とはもう呼べない程立派になったじゃないか」

トータスは笑った

「ハハ……そうでしょ？ 大きな騎士さん」
遊びに行ったときの様にエリオは言った

「ふん……ストラーダを貸せ」

エリオは槍状態のストラーダを渡した

「さて……プレゼントだ、俺もかなり焦ったしな」

トーメントから何かのデータが送られた

「これは……」

エリオが首をかしげる

「氣刃一閃の構成データだ、くれてやるよ」

トータスは笑った

「ありがとうございます……あの」

エリオが目をじっと見た

「なんだ？」

トータスもエリオを見る

「また相手して貰っても良いですか？」

トータスは尋ねた

「……俺に勝つつもりか？」

「はい！！ シグナムさんもいつか絶対！」

トータスは微笑んだ

「良いだろう！ いつでも相手になってやる、勝つって言ったんだ……
……いつか勝って見せろよ？」

「はい!!」

トータスは歩き出した

(次の世代は着々と育ってるわけ…か、期待してるぞエリオ)

トータスは後年負け知らずの魔導師として知られた

が非公式だがとある騎士と壮絶な一騎討ちの末破れた事があるらしい
彼は負けた後部下に笑いながらこういったそうだ

「あいつ…本当に約束果たしやがった…俺もまだまだかね」
その笑顔は清々しかったそうだ

俺に勝つのはまだ早い（後書き）

最終回っぽい終わり方ですが終わりではありません
もうちょつとだけ続きます

ではおまけです

トータス・ヴィレンの運用説明書

役割 フロントアタッカー

概要

破壊と防御に優れる

が機動力は最低クラス

エースとして使うには機動力のサポートが必要

防御が高いため防御役に回る事も可能

単純な突破力なら六課では一番

力勝負はヴィータ相手だとデバイスの関係上つらい

管理局では数少ない生態ロストログアの権威

ミラボレアス単騎討伐達成は男性魔導師としてはガルバート氏、ク
ロノ氏につき公式三人目

運用方法

敵陣への夜の単独奇襲

地下通路、墓地といった環境に送り込むだけで女性魔導師及び場馴
れしていない男性魔導師は戦闘が困難になる
慣れても勝つのは難しい

他、市街地などでの単騎突入による敵前線破壊など

PS

夏の夜、山といった自然地帯や墓地でトータスに挑むのは自殺行為
味方として使用する場合は十分距離を取り用法を守って指示せよ
味方が壊滅しかねない

「おい……はやて」

「ハ……ハハハ……冗談やんか……」

「説明書ってなんのつもりだ？」

「ごめん……魔が指したんや……」

「第一……俺は化け物か？」

（いや……夜に見たらホラーやん……）

緊急クエスト「死神を救え!!」 (前書き)

ある意味で最終章です

緊急クエスト「死神を救え!!」

機動六課解散一週間前

トータスは三日前から管理外世界の駐在員の要請でモンスター討伐に向かった

みな心配せず今日くらいに帰ってくると思っていた

はやて達は残務に追われる事も少なくなった

仕事もへり寛げるような暇も出来た

その時だった

「すまんが部隊長はおるか!？」

割れんばかりの大音声が響いた

「はい! ってガルバード少将! ? 何事ですか？」

トータスの祖父、昇進したばかりのガルバードがいた

「……最悪の事態になるかもしれんのだ」

はやての顔が引き締まった

「その話、詳しく聞かせてください」

「行方不明! ? トータスさんが! ?」

はやて達六課はガルバードの発言に驚いた

「そうじゃ…二日前から連絡がとれん」

「で…でも二日ですよね？」

ティアナが反論した

「……大規模な災害がその現地で発生しておる…大災厄に巻き込まれた可能性が高い…」

「その…大災厄って？」

フェイトが言った

「……ミラルーツ、祖龍と言う最強最古の龍の事じゃよ…その強さはラオシャンロンを遥かにしのぐ」

辺りに沈黙が満ちる

「……そんな化け物に巻き込まれてるんですか!？」

なのは叫んだ

「……過去にワシは戦ったことがある…歳をとっておらんようじゃが何回か死を覚悟した」

ガルバードは襟を正した

「ワシは今、動けんのだよ…海の人間が陸で大暴れしたからの、お主らの力を貸してくれんかね? リミッターやはワシが根回しした、うちの馬鹿孫が死ぬことはないと思うが…助けてやってくれ!!」
ガルバードが頭を下げた

「交代部隊に連絡してすぐ来てもらうて!! 私ら出るから!」

はやてがグリフィスに指示を出した

と同時になのは達も準備を始めた

「おお…! すまん…ありがとう!」

ガルバードが礼を言う

「トータスさんは六課の大切な仲間です、助けるのは当たり前です
!!」

なのはが言った

「あの人はちよっとズレてるけど優しいし皆の事を考えてた」

フェイトも頷く

「トータスさんには色々お世話になりました」

ティアナが感慨深そうに言う

「まだ私は手合わせしていませんのでな、あれほどの騎士を死なすわけにはいかん」

シグナムもぼやく

皆が口々に言い出した

「皆さん：本当にありがとう」

ガルバードは感動していた

センスや行動は皆に比べてズレてる

けど年長者として、兄貴分として、信頼できる仲間として孫は慕われていた事がはっきり分かったのだから

鬱蒼と繁る森

そして天に聳える謎の塔

『古塔』

最上級のモンスターが現れるとされるこの場所にはやて達はいた

「……ほえ……凄いや……」

スバルが思わず間抜けな溜め息をついた

「凄いところですね……」

エリオが呟く

「……キュクッ……」

「大丈夫だよ：フリード」

フリードは何故か怯え続けた

キャロは龍使いの巫女である

ナニカがいる

そんな風を感じれた

「……あ？：お前誰だ？」

そんな時ヴィータが言い出した

「……………」

全員が振り返るとそこには白い服を着た神秘的な少女がいた

その纏う雰囲気は荘厳たるものだ

そして全員の警戒が高まる

ナニカが違うのだ

「クスクスス…」

小さく笑いを堪える少女

「……なあ…私らは先に行かなおえんのよ…ごめんな」

はやて達は警戒しながら歩き出す

「………皆も遊びに行くの？」

少女が言い出した

「ごめん…そうじゃないんだ」

フェイトは言い全員が一步踏み出そうとした時

「……急がないと…全部無くしちゃうよ？」

全員がデバイスを発動し瞬時に振り向いた

「そんなバカな！誰もいないなどは…」

シグナムが叫ぶ

「今はどうでも良い！けどあの女が行ったことが真実なら…トータスの奴はかなりヤバイ事態に陥ってる！！」

ヴィータが言い返した

「……そうや！！急ぐで皆！！」

はやて達は塔に向かって走り出した

塔付近の入り口近くに來た時だった

「コレは！？」

ティアナは叫んだ

皆が近寄る

かなり上空から落ちたのだろう木っ端微塵になった武器があった

しかしスバルやなのはには見覚えがあった

「…これって…トータスさんの笛ハンマーだ…」

稲妻に当たったのか真っ黒になっている

「急ごう！」

なのは達は塔の階段を登り始めた……

緊急クエスト「死神を救え!!」 (後書き)

白い少女はイベントクエストの依頼主でミラルーツの化身と噂される人です

次回

仲間との絆

祖龍との邂逅（前書き）

タイトル変更しました

祖龍との邂逅

「ガハッ……まだ行けるか？相棒……」

ふらつく体に喝を入れて踏ん張る

『……少なくともまだ目に物見せれるだろうな』

カートリッジは1カート

ホルンは大破してゴアバスターも使い物にならない

「はっ……神って噂されるだけあるねえ……」

額から垂れる血が兜の中を濡らす

皮膚が泡立つ

「勝てねえってのは分かるし……俺死ぬかな？」

『……多分な』

匣を引き受け粘り逃げて……よく持った方だろう

ギンガともっとデートしてりゃ良かったかね

が……不思議と恐くは無いんだなコレが

まあ俺の本質は騎士でない、狩人だ

俺は振り返り歩き出した

その先には最強の龍がいる

「さて……死神騎士、最初で最後の神に挑む大一番だ……！」

『地獄のそこまで付いてゆこう』

「ありがとよ相棒……奴さん待ってたみたいだな」

空から一頭の龍が降り立った

「ここで食い止めねえと確実に大被害だ」

俺は魔力をたぎらせた

休息のお陰で魔力は随分と回復している

カートリッジをロードし最強の近接形態ミラザーフォルムに切り替える

『「行くぞ祖龍！！我等が力！目に焼き付けろおおおおお！！」
』

「きついなあ…」

シャルが呟く

古塔はとにかく高いのだ

飛ぶのも手段の1つだが飛べないティアナや限定的なエリオ等を考
えると歩いて登るしかない

シグナム等はほぼ全力疾走だがシャルはヘロヘロだ「ヒアッ！！」
スバルが悲鳴を上げる

人骨：破れたハンター達の哀れな最後を示している

全員骸に目を向けず走り続ける

トータスが殆どの物に恐怖を覚えないのは多分見慣れているからだ
ろう

「最上階が近いよ！」

なのはが叫んだ

皆がスパートをかけて駆け上がる

「……またあったね」

白い少女が立っていた

「またお前か…」

シグナムが剣を構える

「ハンターさんならあっちだよ…普通は4人だけなんだけど皆行っ
て良いよ」

はやてが首を捻った

「4人だけってなんやねん？」

少女は笑った

「暗黙の了解でどのハンターも4人までで狩りに行くんだよ」
要らない知識を身に付けた後だった

凄まじい雷鳴が轟いた

「行くよ！皆！！」

なのはが先陣を切って突入した

白い巨体

輝く角に雷電を纏う翼

ありとあらゆる物を飲み込む荘厳さ

だが感じられるのは闇の書さえ上回らんとせん圧力！！

「……………」

なのはが息を飲んだ

「アレは…龍か？」

シグナムが呟く

「どっから見ても…龍神じゃねえか！？」

ヴィータが叫ぶ

キャロはキョロキョロしながらトータスを探した
僅かにガレキの隙間が動いた
そして

「トータスさ……ひい！！」

立ち上がったのはトータスだった

しかし甲冑の隙間から血がポタポタ滴っている

が…目が血走り闘争の光は失われていない

まさに鬼神のごとき様相だった

カランとヘルムが外れた

顔は血塗れ

しかしうつすらと笑みまで浮かべている

鬼神モード＋狩りのやり取りでテンションが上がりっぱなしのせい
だろう

「ん…？なんで…お前らが」

トータスはボソボソと言った

「無事なんトータスさ…シャマルウウウウウウウ！！」

「任せて！！」

はやてが絶叫した

「……トータスさんて戦闘機人だっけ？」

スバルが首をかしげる

どっから見ても重傷をおった怪我人にしか見えないが平然としている

「ああ…きもちいい、あばらが痛くてな」

「あばらが！？いや額からダクダク血が出てるわよ！？」

「何でもないが？」

相変わらず人間とは思えない生命力である

「全員伏せろお！！」

唐突にザフィーラの声が響いた

全員が瞬発的にしゃがんだ

その真上を尻尾が何もかも薙ぎ払った

「洒落にならんコイツは…」

シグナムが剣を構える

「トータスさんは…言うまでもないか」

なのはが呆れたように言う

「無茶ばかりするお前に言われるとはな…がその通りだろう！！」
ガッと地面を踏みしめた

「生半可な覚悟じゃ死ぬなこりゃ」

ヴィータがアイゼンを構える

「よし！トータス発見したし…アイツブツ倒して六課に帰るで！」

『了解!!』

祖龍と六課の決戦が切って落とされた

祖龍との邂逅（後書き）

ちょっとお聞きしたいんですが

イフとしてスバルがヒロインのルートが見たい方はどのくらいいらっしゃると思います？

人数が多ければ暇が出来た際に書いてみたいと思います

その際の大きな変更点はラオシャンロンでなくアカムになり、スバルがトータスに憧れた状態からのスタートになります

祖龍（前書き）

遅くなりました！

試験で立て込んで短いです

後書きをご覧ください

祖龍

「おおおおおお！」

トータスが雄叫びをあげ斬りかかる

しかしガリガリと甲殻を引っ掻いたに過ぎない

「どけっ！！ぶつつぶす！！」

ヴィータがハンマーを振りかぶり叩き下ろす

がコレもむなしく弾かれる

「ちょっ！どんだけ固いねん！！」

はやてが思わず突っ込んだ

打撃、斬撃の違いこそあれ六課で一番パワフルな2人でアレである
なのは飛び回りながら魔力弾を放つ

「ディバイン：バスター！！」

太いピンクの魔力弾が直撃するも首をグルンとふっている

ダメージは僅かの様だ

「アレ？…空が…」

ふとティアナが気が付いた

稲光である

祖龍はそのまま浮かぶと高台に着地した

その瞬間トータスにおぞげが走った

「光る場所に行くな！死ぬぞ！！」

と叫んだ瞬間シャマルの右横すぐに落雷

「……コレ正気？直撃したらシールドあってもキツイわよ！！」

シャマルが叫ぶ

「はあああああ！！鋼の軛！！」

白い魔力の軛が祖龍に伸びる

通常なら弾かれるだろう

だが…

「いくら固くても：目や口の回りは弱いだろう!!」

ザフィーラが機転を利かせた

更に後ろからスバルがディバインを至近距離で叩き込んだ

ザクリ

と音が響き目の回りに傷が出来ている

今トータス達ベルカ騎士組は非殺傷を切っている

切らなければロクスツポダメージが無いに等しいのだ

「グ：グオオオオオオオオ!!」

祖龍が体をぐらつかせた

始めて効いた!

と皆がはしゃぐ中：トータスだけは違った

彼は幾度となく狩りに出ている

手負いの獣ほど油断ならないものはない

「オオオオオオオオオオオオ!!」

咆哮が高らかに響き渡る

祖龍の体が光出す

反応したのは本能だろう

トータスは走りキャロとエリオを抱えて前転した

その真後ろに尻尾の一撃が炸裂した

「あぶなかった：よくも2人を!!」

フェイトが加速しザンバーで斬りかかる

「2人とも頑張っ!!」

龍が怖じ気づき召喚できないキャロはトータスとエリオに強化魔法をかける

「よっしゃあ!!」

トータスは再び斬りかかりエリオは辺りをステップしながら隙を見て突きを繰り出す

「どいとき皆あ!! デカイのいくでえ!! ラグナロク!!」

最大火力が化け物なはやてがラグナロクを繰り出した

「!?!?グオウオウオオオオオ!?!?」

流石に効いたのか再び僅かだがふらついた祖龍

「切り裂け!鬼神一閃!」

気刃より遙かに強力な鬼の一撃が祖龍の土手っ腹に直撃した

「ギアオオオオオオ!?!?」

凄まじい咆哮が辺りに再び響く

「耳が潰れる!?!」

ヴィータや他の皆も耳を押さえている

「バインドボイス:相変わらず厄介な奴!」

トータスがぼやいた

向こうは目がギラギラしているため本気でキレているようだ

「もう:ひとふんばり頑張りますか!」

バインドボイスが終わった後デバイスを構える

「皆!油断せずに行くよ!」

なのはの声が響いた

その様子を白い少女はジッと見た

「……人間は面白いよね:」

遙か彼方を生きる少女は自身より圧倒的な強者に立ち向かう者を見た

桃色の少女は決して諦めず皆を鼓舞している

金色の少女は瞳に決意を宿らせ飛び回っている

黒色の少女は声を張り上げ指揮している

炎の騎士は誇りを胸に壮絶な剣術を叩き込む

鉄の騎士は想いを込めて巨大な鎚を振るう

癒しの騎士は無事で帰れるように皆を癒す

獣の男性は己が傷付いても引かず皆を護っている

紅の騎士は鬼気迫り倒れても倒れても立ち上がる

そしてその先達に習うかのように若い少女達も奮起している

「……………貴女達の力…見せてよ」

少女は再び観察に写った

祖龍（後書き）

返信は後日行います

さてアンケートの結果
スバルルート解禁します！

死神と鉄拳少女にご期待下さい
祖龍編終了兼最終回の後短編を挟んでからの予定ですが次の内から
短編の内容を選んでください

？ マドカ・マギガの世界に飛ばされる（マミが助かります）

？ もしシャツハと付き合っていたら

？ トータス誕生秘話：死神騎士を書きたかった訳
これらから選んでいただければ幸いです

決着（前書き）

ひよっとしたら書き直すかもしれません
難産でした

決着

「ハア…ハア…まだ倒れへんの？」
はやてが叫ぶ

「全員が総攻撃してやつとここまでか…」
シグナムの息も荒い

「ちよっ…トータスさん！！額からダクダク出てますよ！？」

「……問題はない」

「いや！ありますからね！！」
もうシヤマルはトータスを人間のカテゴリーから外した
明らかに

戦闘機人≧トータス>>>人間である

まあ鎧を着て崖から落下しても爆発に巻き込まれても寝れば治る人
種の血を半分引いているのだから無理はない

「とにかく！弱ってる筈だから…全力全開で叩き込むしか無いよ！
！」

なのはが皆に呼び掛ける

「それしかねえか…やるっきゃねえな！！」
ヴィータがアイゼンを一振りした

「やるわよスバル！」

「おう！！」

スバルとティアナもやる気をみなぎらせる
エリオも立ち上がる

なのははフェイトとはやてを見た後上空へ舞い上がった
二人ともその後を追う

「さあていっちょやりますか！」

はやてが叫び上空の3人が魔力を集め始めた

「炎爆…一閃ツツッ!!」

魔力をトーメントに集め刃とし放つ技

その中でも最大の威力であり龍撃砲レベルになる
トータスは顔面の甲冑を解除し叩き込んだ

「紫電一閃!!」

シグナムとエリオが炎と雷を纏った斬撃を放つ

3人の騎士の刃が祖龍に直撃した

「ギガントオオオシユラアアアアクツツ!!」

ヴィータがアイゼンを全力で叩きつける

「鋼のっ…軋!!」

通常より数を増やしたザフィーラの軋が迫撃する

「ハアアア!!」

ティアナの銃撃がピンポイントに直撃し

「振動拳!!」

スバルの機人の力による攻撃が頭にぶつかる

そして上空の3人による…

「スターライトオオオオ!!」

「プラズマザンバー!!」

「ラグナロク!!」

奇しくも闇の書の時の再現である

「…………おい待て…この距離は確実に!」

トータスは焦った

確実に余波で自分達が洒落にならない！

「飛べる奴は飛べ！ティアナは私に捕まれ！！スバルはウイングロードでエリオとキャロを！」

シグナムの指示に従いトータスやザフィーラが飛び立ちシグナム達と共に全力で距離をとった

「「ブレイカアアアアアアア！」「」」

シグナム達ヴォルケNZは二回目の、他は初めて見るトリプルブレイカー！！

傍若無人とも言える三色の光が祖龍を飲み込んだ

「……ハハハ：洒落にならん」

どこかずれたトータスでさえドン引きするクラスの一撃である

「……グオオオオオオオ！！」

が祖龍は立った！

「げ：マジかよ」

ヴィータがひきつった時だった

あの白い少女が現れた

「凄いね貴方達：とっても深い絆が見れたよ」

トータスは目を疑った

「おい：お前まさか：」

少女は微笑んだ

「だからしばらくは暴れないでおいてあげる：またね？」

白い少女は祖龍の手に乗りヨロリと飛び去った

全員がヘトヘトになって塔の頂上に座り込んだ

「あ：あれだけやって弱っただけかよ：」

ヴィータがぼやく

「……まさしく龍の神ですね」

キャロが言った

「あの少女は？」

エリオが呟いた

「……祖龍だよ、ミラルーツの化身だ」

トータスがなげやりに言った

『は？』

皆が呆然とする

「優れた強者を自らとの決戦に招くものとされてるな」

トータスは続けた

「生態も分かってないしオスカメスかも分からない……ただいつのまにか神格化している伝説の存在だ」

「まあ……そんな奴を追っ払ったんや！！胸張って帰るで！」

はやての号令に皆が頷いた

こうしてトータスは無事に助けられた

六課VS祖龍は後々まで語り継がれる事になる

最終話（前書き）

短いです
連続投稿！

最終話

「……部隊長ってのも忙しいもんだな」

トータスは1人タバコを吸った

六課が解散して1ヶ月

ふとした拍子に過ぎた日々を思い出す

「色々あったなあ……」

その時腰の端末が光った

『犯罪者が逃亡中！逃亡中！』

ここから近いな

俺が出るか

「全部隊員に告ぐ、俺が近いから出なくていい、後始末は頼んだ」

『了解しました、トータス部隊長！！』

そして死神は走り出す

「ハハハハハッツツ！！上手くいったよ！！」

1人の男が地面をスケボー型デバイスで疾走する
手には奪い取った金品が

「ヒヤッハ！！ちよれえな地上本部は！！」

追撃してくる局員をヒラヒラかわしていた

その時だった

遠く離れた道の真ん中にいた男がビームをぶっぱなした

「へ？砲撃？」

男は砲撃を放った男を確認すべく走り出した

……これが運のつきだった

逃がさねえよ

飛んで火にいる夏の虫ってな

「覚悟を両手に！誇りを胸に！揺るがぬ信念背中に背負う！！セツトアップ！！」

『セツトアップだ！！』

赤黒い光が溢れる

見るものを威圧するドクロの仮面

そして真紅の鎧に骨

「『顕現！死神騎士！！』」

「うぎやああああああ！！地上の化物おおおお！！」

男が逃げ出す

が逃がしはしない！

「炎爆一閃！」

「ぎやほおおおお！！」

放たれた刃が敵を打ち倒す

「バカが…俺がいるかぎりクラナガンで犯罪は出来んと思え！！」

さてコレは激動を戦った死神騎士の物語

後に彼は誰も知らぬ人がいないほどの騎士となるが…それはまた別の話

死神裏話（前書き）

実はかなり書き貯めてました
これを含めて3回更新します

死神裏話

まずは完結にあたり謝辞を

この拙い物語を読んでくださり感謝しております

次回よりは短編を挟んだ上でスバルルート解禁する予定です

それでは裏話といきましょう

そもそもトータスの当初のコンセプトは年上の兄貴分でした

このSSは新人と同じか、なのは同級が多かったので純粋に年上の兄貴を書いてみたくなりました

しかしあまりにインパクトが無いことに気が付き悩んでいた際に友人Aと狩りに行くことに

その時閃いたんです

モンハンの鎧：バリアジャケットになるんじゃない？と！

私は片っ端からカッコいい鎧を探しました

当初のプロットのメモにはアカムが第1候補でした

しかし書いてみてもどうもしっくり来ないので再び考え直しました

その時にトータスにハンターの血を引く、地上本部のエースと言った設定を付けました

この後親しみが持てるようにややずれた…変わった感覚の持ち主にと性格をアレンジしました

この時決めた見た目：と言うより顔ですが海皇記というマンガに出てくるファンという主人公を思い描いてくれれば良いです
知らない人が多いかな？

大事などころの変わった感覚をどう表現するか？と考えた際に騎士甲冑をモンハンのイロモノにしよう！！と決めました

こうして生まれたのがどこかがズレてはいるものの凄腕の死神騎士でした

このズレですが理由があります

別の作品の陸士八課では逆でトータスに暗い過去、トラウマが一切無いからです

もともと過去を全面的に肯定して生きているキャラというイメージがありそれを表現しようとした結果、他者とは根本的に考え方が違う人間にしようとズレを出そうとしました

それが上記で書いた親しみのある憎めない感じが出せるとも思いましたし

結果的に何故か天然の入ったキャラになりましたが：

爺さんと父さんはトータスのボツネタにアレンジを加えたものです

トータスという名前の由来はハンターという事から生存淘汰から取り、ヴィレンは日本に來た宣教師ヴィレラから頂きました

作中で模擬戦等の描写が少ないのでトータスの強さが分かりにくい人が居たと思うので少し詳しく解説します

まず魔導師としての実力はなのは達とそうは変わりません

ただし単純な力はヴィータに匹敵する上に機人と勘違いするほどの素の耐久力があるので接近戦ならシグナムやヴィータ以外は勝ち目は無いですし、ややトータスが有利です

が反面機動力は低く新人を除けば六課最鈍です
そのためフェイトは相性最悪の天敵です

更に陸戦と空戦の違いもあるためカウンター狙いの泥仕合になる恐れがあります

トータスの鬼神モードはのフェイトの真・ソニックのようなものです
コンセプトはスキルの逆鱗です

体の負荷が高い反面、ただでさえ高い攻撃、防御が更に上がります

テーマ

全てモンハンに関係してます

変身シーン

狩人よ、前へ

逆転、圧倒のテーマ

最終決戦！

鬼神モード

ミラボレアスのテーマ

日常

ポケケ村

さてここからは多分書くこともないであろうイクス等の頃のトータスを書きたいと思います

イクス

部隊長が板についてくる

更生したドゥーエを副官に地上防衛の最終ラインとして活動中

この頃ギンガと同棲…と言うかゲンヤ公認でナカジマ家にフェード
イン

ナンバーズからは恐れられながらも親しまれている
呼び方は実質兄ちゃんポジションなため
チンク…兄上

ディエチ…兄さん

ノーヴェ…兄貴、トータス兄

ウエンディ…トータス兄、ブラザー

マリアージュに関してはノータッチですが後日ご飯を奢って労う
イクスが眠って寂しがっているスバルを慰める

vivid

イクスとvividの間でギンガと結婚し女の子が産まれる
この頃トータスは地上本部どころか管理局内でも有数の有名人になる
アインハルトは騎士甲冑を見てもどうに耐えたがコロナ達は耐えられず泣かれて双方苦手意識が出来る

暇なときは実戦仕込みの格闘術で皆の相手をしている

force

この少し前に一佐に昇進している
はやての召集に応じて地上本部から緊急出向

『ウィルスならワクチンだろ』

と言うずれた結論を導きだし騎士甲冑状態でスカリエッティにネゴ
シエーション

スカリエッティにポッケ村の大剣や古塔の遺跡をアピール（騎士甲
冑のまま）して研究を取り付ける

機構が複雑なため新世代強化のトーメントが間に合わない事態に

しょうがないので許可を取り刃を潰した鬼哭斬破刀を持ち込み鎧アスギアを着込んで参戦

魔法でないのに滅茶苦茶痛い電流が流れる謎仕様にヒュッケバインも首をかしげる

六課はトータスさんだからと諦めた

その後

エリオとキャロの結婚式に招かれた際キリンの蠶で出来たマフラーを渡す

その際エリオたっての願いでガチンコの一騎討ち初めてエリオが勝つ

思春期の娘に嫌われユーノに愚痴をこぼす等平凡に過ごす

機会こそ少ないが戦闘から引退せず父や祖父と同じく生涯現役を決意

聖堂教会、地上本部、本局合同戦技披露会にシャッハとコンビを組んで出場

なのは、フェイト組と死闘を繰り広げる

結果的に尊敬され娘と仲直り

この戦技披露会の話はいずれ書く予定です

これで裏話は終わりです

最後に2つ質問がありましたので答えさせていたと思います

『トータスはスターライトブレイカーが撃てますか?』

結論から言えば撃てます

しかし集束はなのはに比べると劣るので威力も落ちます

時間が倍以上かかっても良いなら通常のスターライトブレイカーの威力は出せますがそれが限度です

『トータスとトーメントのボイスは？』

あえて決めていますませんが友人はトータスを玄田さんか若本さん、立木さんで再生していたようです

皆洪い：

トーメントは大塚（蛇）さんだそうです

多分合ってると思います

風と死神（前書き）

リクエストにあったシャツハが恋人だったらという奴です

風と死神

「……一つ聞きたいのですが？」

私は戦友兼恋人でもある男に尋ねた

「ん？どうしたシャツハ？」

トータスは大きな体を伸ばしながら振り返った

「どうして途中から移籍したんです？」

トータスは私と付き合い出してから暫くして地上本部から移籍して
聖堂騎士団に入った

そこが私には不思議だった

彼は地上を護るといふ夢があった筈なのに

「……夢よりも護りたいものが出来たからな」

トータスは穏やかに言った

「護りたいものが：ですか？」

私は問い直した

「……お前は風だ」

トータスは唐突に言った

「騎士カリムって太陽を曇らす物をみな吹き飛ばす鋭い風だ：そう
やって強くあろうとするお前が好きになった」

私はただ無言のまま聞いていた

「だから俺は決めたんだよ、鋭い風の通り道を作ってやろうってな
：俺は死神だ、お前が通る道に岩があるなら壊す、林があるなら薙
ぎ払う、敵が要るならブツタ斬る：まあ様は……：シャツハを護
りたいだけだな」

トータスはソッポを向いている

頬が赤くなっている

「貴方は：ホントに：」

全く：どこまでも強くて、どこまでも頼れて、どこまでも大きいの
に：どうしようもないほど真っ直ぐだ

だけどそれが今の私には嬉しい

「私は騎士です」

私は誓いの言葉をいうように言いながら歩き出した

「それは知ってるさ」

トータスはまだ照れている

「私は貴方の言う通りに鋭い風でしょう」

そうしてトータスの前に立った

「……貴方がいるから私は舞い上がれるんです、貴方がいなければ風は何も出来ません……だから」

スツとトータスに抱きついた

「いつまでも私の近くに居てくださいね……貴方が居ないと私の世界はダメなんです」

ギュッと抱き締められた

「言われなくてもいてやるさ、どこまでも舞い上がれるようにしてやる」

トータスは一拍置いて告げた

「あ……愛してるからな」

ホントに……この人は

「私も愛してますよ、トータス」

風は太陽を護る

死神はその風に恋して通り道を作った

風はその道を通り舞い上がる

死神はそれを見て笑う

風はそんな死神に恋をし彼を癒す

2人はきつとこんな感じで過ごしていく

スバルルート予告(前書き)

さてこんなに一気に更新しましたが今はスバルルートの最終の骨組み段階です

ちよつと時間を置くことになりますが予告は出来たので更新します

スバルルート予告

さて、これは本編を大きく外れた物語…

突如発生した空港火災

そこに一人の少女が取り残された

迫る炎に怯える彼女を救ったのは…天使のような女性ではなく…

「大丈夫、死神さんは良い子にはなにもしないんだ…だから助けてあげるな」

大きな死神だった

彼女が天井を見たとき見えたのは

全てを切り裂く魔法の刃だった

それから時は流れ…少女は死神と再会する

新たなイフの舞台で再び死神がずれまくりながら大暴れする…!

迫る恐怖の顔面

「うぎゃあああああ!!」

憧れる少女

「……………かつこいいなあ」

ドン引きする仲間達

「……………ええ」

引き釣る隊長陣

「あの子…どこいくの？」

真似しようとする少女

「ねえ！こんな感じどう！？」

泣いて引き留める親友

「お願い！何も要らないから戻ってきてよ！！」

土下座し自粛を求める隊長

「頼むから自重してや！！」

外堀を埋めるため暗躍する少女

「お爺ちゃん…肩凝ってますねえ」

暴走する祖父

「スバルちゃんはいえ子じゃあ…」

暗闇では危険

「ひぎあああああああ！！」

泣き叫ぶ敵

「旦那アアアアアアアア！！！！！！」

激突する死神と槍騎士

「先生の孫とは…」

「貴方の話は聞いてますよ…」 グランガイツの後継” トータスです」
そして…覇龍が爆誕する！！ 「洒落にならん！」

消えた死神と槍騎士

「そんな…どこいったかったの…？うわああああああああん
！！！！！！」

覇龍に挑む4人

「いくわよ！」

「はい！フリード！！」

「全力を尽くします！！」

「行くよ！ウインドロード！！」

新人の危機に死神が新たな力を引っ提げて舞い戻る！！

「さあて…いくぜ！」

「おう！任せな！」

「「ユニゾンイン！！」」

死神騎士の6課の日々

憧れは死神っ！スバルルート！

近日連載予定ッッッ！！

スバルルート予告（後書き）

次回はスバルルート第一話か裏話にあった戦技披露会と娘の話になると思います

強い親父（前書き）

父親になったトータスと娘の話です

強い親父

「はぁ…ま…たく」

俺は溜め息をついた

機動六課にいた時から実に15年が過ぎた

色々があるが最近の問題は…娘との不仲だ

サラが生まれてからも仕事で最前線に立ちながらも合間には必ず遊んであげてたが…思春期と言う奴か

たまに部屋でゴロゴロしてたり、筋トレしてるのがガマンならならしい

おまけに言葉遣いもノーヴェに当てられたのか乱暴に…父親の威厳がないな

「兄貴は家で自慢しねえからじゃねえか？」

ふと近くにいたノーヴェが言った

「…別にアイツは士官学校にいるんだ、いずれは知る筈だし必要もないだろ？」

するとギンガが口を挟んだ

「いえ、サラは多分今の貴方に興味がありませんから…調べる気にもならないんじゃない？」

…そうかも知れないな

「そう言えば兄上は今度の合同戦技披露会に出るのか？」

チンクが口を挟む

「出ないぞ？よっぽどの緊急事態でも無い限りは運営側だな」

アイスを食べたスバルが不満そうだ

「え…兄さんが出たら絶対盛り上がるのに…こないだシグナムさんに勝ったんだよね？」

「ギリギリだがな…アギトが加わると強いなんの…持久戦でようやくだぞ、もう次勝てと言われても無理だ」

アレは危険すぎる
運が良かった

「そっかぁ…私はサラちゃんと一緒に見に行くよ」

「ん、楽しんでこい」
ここで終わる筈だった

当日

「トータス・V・ナカジマ一佐ですか!？」

俺はギンガがナカジマの姓に愛着を持っているのを知っていたので
結婚してフェイトみたいな名前になった
それはいい

「そうだがどうかしたか? 組み合わせは決まってる筈だろう?」
だがそいつはとんでもないことを言い出した

「その…フェイト執務官、高町三佐の対戦相手なんですが…腹痛と
交通事故です」

「……………は?」

なんだと?

「この晴れの日に?」

「そうです、それで緊急事態なんで引き受けてくれる方を探してい
まして」

今回は聖堂教会、地上本部連合対本局の組み合わせになっている

「で…見付かったのか?」

俺がこう言ったときだった

「私ですよ、トータス」

そこにいたのは親しい友であり好敵手であるシャツハだった

「……なるほど、それで俺か……空戦のエキスパートに陸戦のエキスパートが挑むってのも悪くない」

シャツハがニヤリと笑って拳を出した

「背中任せましたよ？」

「上等だ、俺は地上の伝説と呼ばれた男だぞ？」

拳をぶつけ合わせた

「はやく始まんないかなあ……フェイトさんの試合」

アタシはサラ・V・ナカジマ士官学校生だ

アタシはフェイトさんの大ファンでもある

何故か小さい頃あまり憶えていないがあった覚えがありファンになった

父さんとは大違いだ

凜としたフェイトさんと違って父さんはのんびりだしどっかネジが外れてんじゃないかってぐらいずれてる

だからアタシはキライだ

なんで母さんは好きなんだか……

「楽しみだねえ」

スバル姐が話しかけてきた

今日はスバル姐がアタシの友達も連れてきてくれた

「おう！はやく始まって欲しいな！フェイトさんの写真取らないと！」

スバル姐は有名人であるの六課にいたこともあるらしい

たまにティアナさんやエリオさんと合わせてもらったりする

ん？チャイムだ

『次の試合ですが…対戦相手欠場のため中止とさせていただきます…』

「えーっ!!!!!!!!!!!!!!」

「そんなああ!!」

「ふざけんなあ!!」

友達のシアとエルが叫ぶ

スバル姐もしょんぼりしてる

……帰ろっ

あれ?またチャイム

『も…申し訳ございません!急遽選手交替を申し上げます!!高町三佐とフェイト執務官の本局のエースコンビに挑むのは…聖堂教会より聖堂騎士団筆頭にして烈風と歌われる騎士シスターシャッハ!』
会場が盛り上る

シスターシャッハならアタシも知ってる

とても凄い騎士らしい

『そして…地上本部より!死神と呼ばれる最強騎士!トータス・V・ナカジマ一佐!』

……へ?父さん!?

「うそ……」

エルが呆然としてる

「アタシも初めて知ったんだけどさ…父さんって凄いの?」

回りは…おお…って感じで話にならない

「凄いも何も…地上本部から八神一佐から直々にスカウトされて特務六課に召集されたり、その前身の機動六課も初期から参加して活躍!特にJS事件の時はラオシャンロンで龍に止めを指したりと凄い人なんだよ!?うわー!サインもらえるかな!?」

私はスバル姐をジッと見た

「兄さんは恥ずかしがりやな所があったしねえ」
そんなの知らないよ…

「ま…まさかトータスさん達が…」

「…楽は出来ないよ、なのは…」

「当然だ…悪いが全力でいかして貰おう」

「行きますよトータス！」

「」「セツトアップ！」」「」

4人の声が高らかに響く

試合開始と同時にディバインバスターが炸裂した

「甘い!!！」

トータスが右手をつきだしシールドを作り出す

それは瞬時に遮って見せた

「今回マスクはつけないの？」

なのはが尋ねた

「何故か部下と副官に止められてな…訳が分からん」

（（（ああ…親になっても気付いていない…）））

残りの3人が同時に思った

その後4人が膠着する

シャッハは空戦が出来ないため地上で

トータスは出来ると言ってもAランク程度でありなのは達には到底
敵わない

これだけならば圧倒的なのは達が有利だが…

「フッ！」

フェイトが自慢のスピードで斬りかかる

が

「このくらいで…張り合おうとはいいい度胸だな！」

カウンターのトーメントが唸りをあげバルディッシュに直撃し

「キャアアアア！！」

すっ飛ばした

フェイトは慌てて体制を建て直す

「隙あり！」

静観していたなのは足元から飛び上がるようにシャツハの奇襲が襲い掛かる

今回のフィールドは市街地

シャツハの脚力ならば縦横無尽に走り回れる

また飛行魔法の高さの上限が定められているためビルから飛び上がり攻撃することも容易

そしてトータスの豪腕はなのはの防御を力でぶち破る上にフェイトならばクリーンヒットすれば一撃退場もありうるクラスだ

つまり…伯仲している

「相変わらず…敵に回すと恐ろしいよねっ！！」

なのはが魔力弾を連射する

「それはどう…もっ！！」

トータスはゴアバスターの盾を展開し器用に防ぐ

「うそ…父さん…あんなに強いのか？」

スバル姐はしみじみと言った

「JS事件の後地上本部は弱体化しちゃった、でもその地上本部を支えるために兄さんは吼え続けた、地上は俺が護るってね……全部サラちゃん達が安全に大きくなるためだったんだよ」

「……………」

「サラ：落ち込んでないで応援しようよ！」

「げ！？ヤバい押され出した！！」

「ち！！速すぎだ！！」

「閃光はだてじゃないな！」

トータスやシャツハを凄まじいスピードで翻弄するフェイト
その時だった

「かかった！バインド！」

シャツハは逃れたが桃色の鎖がトータスの両足を縛り上げた

「私も追加！」

更にフェイトが両手を縛る

「なっ…ウオオオオオオオ！！」

トータスは力を込め外しにかかる

「トータス！！上を！！」

シャツハの声を聞きトータスを上を向き…絶句した

「おい…洒落にならんぞ！！」

なのはの前に巨大な魔方陣

そしてカートリッジが全て排出された状態で更にでかくなる

「全力全開！スターライトオオオ！！」

トータスは無理やり両手のバインドを引きちぎりゴアバスターの大
盾とシールドをはった

「ブレイカアアアアアアア！！」

最強の閃光が襲い掛かる

「グッ…オオオオオ！！」

トータスが必死に堪えるがまもなく飲み込まれそうだ

「あっちゃあ：なのはさんのアレか：さすがに無理かな」
スバルが悲しそうに言った

「ううう：残念」

その時下を向いていたサラが立ち上がった

そして大きく息を吸い叫んだ

「負けんなアアアアアアアアアア！！！！！！！」

やれやれ：ここまで言われてホイホイ負けるわけにはいかねえな
「トーマント：っ！！カートリッジフルロードでシールドを重ね掛けだ！！」

『了解！』

そして俺はピンクの光に捲き込まれた

「やった？」

なのはが呟く

「……多分ね」

フェイトが言ったその時

「ウウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

凄まじい咆哮が響いた

「……流石に馬鹿げてるな」

シャッハすら引いた

「はっ：娘の声が聞こえたからな：父親はなあ！娘が見てる前で倒れちゃいけないし倒れないんだよ！！！！！！！！」

スバルがはしやぐ

「聞こえた！？ちゃんと声援届いてるよ！」

「頑張れ！父さああああん！！」

「クスッ…なあんだ…やっぱりお父さんが大好きなんじゃない」

「サラは意地っ張りだからね」

「う…うるさい！応援しちゃ悪い！？」

「……何て根性…うつ！？」

フェイトの体に鞭のように伸びたトーメントが絡み付いた

「あいにく立ったのは良いがフラフラでな…正直立つのもしんどい」

グンと引っ張られフェイトはトータスの近くまで引きずり下ろされる

「えっ…と」

フェイトが焦る

トータスの腕に爆炎が灯る

「取り敢えず…だ、道連れな」

その爆炎はより巨大に膨れ上がり白熱する

「ちょ！キャアアアアアアアア！！！！」

「炎爆激鉄！！」

右ストレートがフェイトに吸い込まれ巨大な爆炎が上がりトータスもろとも飲み込んだ

土煙がもうもうと上がる

それが徐々に消えて

気絶しているフェイトと

「わりいな…シャツハ、もう動けん…あとは任した！」

地面にへたりこみダウンしたトータスがいた

「ええ！任せなさい！！」

シャツハは踊るようになのはに斬りかかった

「お疲れ様です！」

頭を下げる隊員に手を振りながら歩く

結局シャツハもなのはに撃墜され僅差で本局に軍配が上がった
けど地上本部最強騎士としての実力は見せ付けたし良しとするか
そう考えながら歩いていたらサラに会った

「……………」

無言のまま下を向いてる

……やれやれ

「え？」

頭を撫でてやる

「どうだ？俺はかっこよかったか？」

「……………うん…」

小さくこっくりと頷いた

「あのさ…冷たくしたり無視したりしてゴメン」

「気にしないよ、女の子はそんな物だしな」

2人して家に向かって歩き出す

「……あの…手え繋いでもいい？」

「いいよ」

右手を差し出しサラの左手を握る

「……父さんも仕事ばかりだったからなあ、今度何処かに行くか？」

「え！？連れてってくれるの！？」

「おう、家族皆でな」

「やったあああああ！！」

この娘が笑うのを久しぶりに見たな…

サラのこんな笑顔が曇らないようにしないとな

それが父親って奴だ

サラの手を確りと握りながら夕暮れの道を歩き続ける

2人の影が地面に長く伸びた

強い親父（後書き）

いかがでしたか？

父親になったトータスも気に入ってくれば幸いです
気が向けばまた書くかも知れません

ちなみにサラの紹介です

サラ・V・ナカジマ

11歳

デバイス リボルバー・D・ナックル（黒ディア使用）
ライトキャリバー（キリン使用）

固有技能

フレアーロード

トータスの魔力資質が影響しウイングロードの亜種

通常は走行用だが一定の振動を加えると爆発を起こす性質を持つ
すれ違い様に爆発するもフレアーロードに乗った敵を迎撃するもよ
しと攻撃的に発展したもの

魔力色は薄紅

見た目は髪が黒いギンガ

性格はノーヴェです

イフルート 昔の思い出 (前書き)

遅くなりました！

イフルート 昔の思い出

「キャロってさあ…死神さん…知らないよねえ」

「ふえ？」

機動六課が立ち上がって暫くたったある日の事
スバルさんがいきなり聞いてきました

「アンタ…またその話？」

ティアナさんが呆れたように言います

「むう…絶対いる筈だよどこかに！！」

「だから本局にいないのよ！？」

ヒートアップしてきた2人

エリオ君が口を挟んだ

「……あのその死神さんってそもそもどんな？」

「うんっ！！あのねえ…」

スバルさんが満面の笑みで話し始めた

「また始まった…」

ティアナさんは聞きあき気味ですが…

『ここどこお…熱いよお…』

空港火災に巻き込まれた私はギン姐とはぐれて1人あてもなく逃げ
てたんだ

でも次第に火の手が回って逃げられなくなったんだ

『あっ…キャアアアア！！』

立ち止まった時上から大きな石が落ちてきたんだ

私は身を縮まして目を瞑った…けど一方に石が落ちてこなかったんだ

ふと上を見たんだ

そしたら

『大丈夫か?』

石を片手で止めて紅の布と骨の鎧を見に纏いドクロを付けた死神さんがいたんだ

『ヒッ!!!』

私は思わず身震いして泣きたくなったんだ

とっても怖く思えたから

でもおかしいよね?

死神だったら助ける必要がないもの

『……どうして私を助けてくれるの?』

って聞いたんだ

『……君は悪い子か?』

『違うよ!! 良い子だもん……』

『なら助けてあげよう! 死神はな……実は優しいんだよ』

そしたら途端に恐怖感が消えたんだ

『天井が邪魔だな……ならぶったぎるまでだ!!』

手に握った鎌から出た巨大な刃で天井を斬って私を引っ張りあげてくれたんだ

私はさ……緊張が溶けたせいか眠くなっちゃて……

『お嬢ちゃん……名前は?』

『スバル……』

『!……運が良いな俺は……ん? 寝むたいのか?』

『うん……また会える?』

『おう！良い子にしてたらきつとな』

「つて事があつたんだ！」

なんというか…不思議な話です

「でもそんな目立つ格好の人が見付からないんですか？」

エリオ君が尋ねた

「うん…データベースも見たし訪ねてみたけどいないってさ」

「あの火災は初期は地上本部だったけど後から本局部隊が中心になったのよ、スバルが言うことが本当なら実力からして本局の人の筈だけど…」

ティアナさんが言う

「……私はその死神さんの技を見て真似したんだ」

魔力刃を腕に纏わせ切り裂く必殺の手刀を作ったらしい
あの切れ味は凄いと思う

「あの…僕も探すの手伝います!!」

「ほんと!? ありがとう!」

「……随分とまた急ですね」

「しかたあるまいよ、なあ死神ことトータスよ…まあ正式な辞令ではない、行くか行かぬかはお前が決める…時間はまだある」

「分かりました、失礼します」

レジアス中将の部屋から1人の大柄な男が出てきた

彼の名はトータス

陸戦のエキスパートであり間違いなく現時点において地上本部の最高戦力だ

「機動六課への出向依頼ねえ…まあ今やってるシャツハとの捜査が終わってからだな」

トータスの受け持つ事件の犯人が教会にゆかりある人物のため友人たるシャツハと任務に当たっているのだ

元来地上本部は教会や本局とは犬猿の仲だがトータスは中立のため普通に友人がいるし任務も体が空いていて要請があれば教会に手伝いに行く事もある

「申し訳無い…トータス、敵が勘づいて逃げ出したようです」

「マジか？これは長くなりそうだ…」

彼が少女と再会するのはまだ時間がかかりそうだ…

イフルート 昔の思い出（後書き）

今回はレールウェイで合流します
暴走し始めるこの物語をお願いします！

死神、出現（前書き）

スランプだアアアア！！

死神、出現

「つの野郎が!!…」

「逃げられないと知りなさい!!」

「ひひひひひひひひ!!」

魔導師を追い掛ける2人

しかし

「ったく…なんて速さだ!!」

「速度特化型…厄介な」

ひたすら逃げ回るだけが当たらない!!

『ボス!この先は機動六課の作戦地域だ!』

「おい?レールウェイ関係か?」

トータスは首をかしげる

「逃げ込む気か!?よもや新人を盾にする気では…」

最悪の展開に近い

「ちっ…しょうがないな、トーメント!通信回線開け!!六課に繋げる!!」

『了解した!ボス!!』

「はやて部隊長!緊急通信です!!」

なんて?

なのはちゃん達とは違うんか

『聞こえるか!?一刻を争うんで音声だけですまない!!こちらは

陸士108部隊の一等陸尉トータスと言う!」

『聞こえますか? 聖堂騎士のシャツハです』

シャツハさんにゲンヤさんのところの?

ん!? いまレールウェイに誰か飛び乗った!??

『犯人がそちらに逃げた! レールウェイに侵入する許可が欲しい!』

……これは安全の面でもお願いすべきやな

「トータスさん達ですか? 二等陸佐の権限の元許可します!! 速やかに捉えてください!!」

『『了解!!』』

そして2つの影がレールウェイに飛び乗り侵入した

「! コイツは…俺の! ?」

俺は驚いていた

切り裂かれたガジェット

その切り口はまさしく俺の気刃一閃だ

「……誰かに教えましたか?」

シャツハが尋ねる

「コイツは俺のオリジナルだ、出来るのは爺さん達と…モドキならお前くらいだが…」

「妙ですね…ならば何故?」

「行くしかないだろ…どちらにせよな」

『…ちゅう訳でレールウェイに犯人が飛び乗ったんよ、2人組の魔

導師は味方やからな』

スバルをフォローしながらガジェットを撃ち抜く

味方…か

「コッチは終わったよー!」

スバルの声がして振り向く

するとそちらの方から

「うわあああああああ!!!!」 誰かが半泣きで走ってきた

2人して身構える

「ちっ!くしょおお…お前らも敵か!逃げ切れねえ…早くしねえ
とやべえのに…スピードアッパー!!!」

叫ぶや否や急加速した

「な!」

「速い!!」

凄まじい速さで私達を翻弄する

その時だった

「烈風一迅!!」

1人の魔導師がすっ飛ばした

手にはトンファーみたいな物がある

「貴女は?」

私は尋ねた

「聖堂騎士のシャツハと言います、今回は地上本部に要請を出しま
して」

そう話す間に男は立ち上がる

「嫌だ…嫌だ!死神は嫌だあああああ!!!!!!」

死神!?

「へ!?!今死神って!?!」

スバルが思いつきり食いついた

しかし男は答えず逃げ出す

「……逃がすかああああ!!!!!!」

「ど!?!? どうした!?!? 何があった!?!?」

何あの怖さ!?!?

騎士ですか? 騎士なんですか!?!?

あれじゃまるでし…にが…アレ?

「あ…ああ…あああ!?!? あの私の事わかりますか!?!?」

スバルが指を死神っぽい人に指す

「ん?…スバルだったよな、後輩のギンガの妹で大将の娘さん」

「…………あ…」

スバルが落ち込んだ

覚えてなかったんだ…

「で…空港の時の女の子か、でかくなったな」

「う…あ?」

スバルがキョトンとしてる

「ガジェット真っ二つにしたのはスバルか…凄いいじゃないか」

「う…ううう…やっどあえ…だあああああ!?!?!?!」

スバルはワンワン泣き出してしまった

……どうしよう…取り合えずなのはさんになんて報告しようか…

死神、出現（後書き）

ゆっくり待っててください……

死神と六課（前書き）

久々投稿！

死神と六課

機動六課に帰還後

なのは達はトータス達と向かい合った

「いや：今回は作戦域への進入を認めていただき感謝しております」
はやてはペコリと大きな体を折り曲げるトータスを見た

「教会からも礼を言わせていただきます」

「いえいえ、こちらこそ」

フェイトが頭を下げる

目の前にいる人物がスバルが憧れた死神その人だ

調べてみればゾロゾロ情報が出てくる

地上本部では珍しい中立派で教会や本部にも友人が多い

また大型原生生物の狩猟経験が豊富という変わった人物でもある

そしてSランクのストライカーでもあり『ゼスト・グランガイツの

再来』や『ヒトの向こう側』と呼ばれる地上本部が誇る最強の切り

札であり圧倒的な突破力で殲滅するらしい

「にしても珍しいもんだな」

フツとトータスが漏らした

「え？何がですか？」

なのはが尋ねる

「ん？……ああ、実は近い内に地上本部から増援が来ることにな
ってたろう？あの件の候補が俺なんだ」

一瞬場が沈黙する

「それホントですか!？」

はやてが叫ぶ

腕が立つ上にスバルの憧れの人物ならメリットはとてつもなくデカイ
「…………あの1つ聞きたいんですが：ティアナが引き込もって出て

「こないことに心当たりは？」

フエイトがオズオズと尋ねる

ティアナはシニガミコワイと繰り返しながら部屋に戻ったままなのだ。「分からんな…死神ってのは俺の2つ名だがな」

「爆炎の死神でしたよね？」

シャツハが言う2つ名が余りにも物騒だ

とは言え金色の死神なんて言われてるフェイトも要るくらいだ
 そこまで怖がるわけが分からない

「……ちよつと見せて貰ってもいいですか？」

はやてが尋ねた

「構わないが…セツトアップ」

「ああ……3人とも御愁傷様です……」

「え」

紅い光が辺りを包む

そして……まさに地獄からの使者と言える様相のトータスが現れた

「ギイヤーアアアアアアアアアアアアアアアア！」

3人は絶叫した

「ああ……やっぱりこうなりますか……」

シャツが溜め息をつく

恋人と言う間柄ではないが誰よりもトータスと縁が深いだけあり慣れっこだが

(このずれた感性はどうかして欲しいですよ)

「主！！何事で……な……なああああああ！？」

「はやて!!! つて…オバケエエエエエエエ!!!」

「はやてちゃ……ん……うううん……（バタリ）」

悲鳴を聞き駆けつけた守護騎士すら阿鼻叫喚する事態となった

「?……カッコイイだろ？」

『んなわけあるかあああああああああ!……!……!……!』

全員の怒号が響いた

「ああ……ところで1ついいか？」

一段落付いた所でトータスが尋ねた

「……ええ……何でしょうか？」

トータスは頭を掻きつつ答えた

「実はだな……守護騎士の方は確か古代ベルカだったよな?……是非一戦相手をして欲しいんだよ」

バトルマニアではないがトータスクラスになると相手が出る騎士も少ない

せっかく守護騎士に出会ったのだから存分に腕を振りたい気持ちもある

……それに答えないバトルマニアがいるだろうか?

「なら……私とやってみるか？」

……烈火の騎士と煉獄の死神が激突する!

死神と六課（後書き）

次回！！ 烈火VS爆炎！！

煉獄と烈火（前書き）

出来ました！

煉獄と烈火

訓練場に2人の騎士が並んだ

1人は剣を持った美しい女性騎士

もう1人は禍々しい鎌と鎧の騎士

片や烈火と称される古代の戦乱より生きた騎士

片や死神、煉獄と称される屈強な肉体を持つ騎士

ハイレベルな騎士が向かい合い一種の独特な空間が生まれている

来るなら来る時のために実力を知るのは良いことだ

しかし今回は新人に見せたら自信を完全にへし折りかねないので隊長陣が見ることになった

(……なんて重圧だ)

シグナムはヒシヒシとその重圧を受け止めた

(パワー型か……スピード型か……どちらにせよ……迎え撃つ……！)

合図の光が光った時……どちらとも動き出した……！！

「おっそ……！！」

失礼だがヴィータは思わず言った

明らかにSランクでも最低クラスだ

陸戦型からしても相当遅い

が……その真骨頂が発揮した

ぶつかりあった瞬間……一撃でシグナムを吹き飛ばした

「……なんつーパワーや……」

はやてが口をアングリと開けた

フェイトは追加資料をジッと見ている

『トータス・ヴィレン』

『彼の最大の特徴はその身体能力である、強化魔法を使わずとも人

外の領域に達している、少なくとも八階建てのビルから落ちて打撲だけと言うあり得ない耐久を誇っており生身でガジェットを粉碎したこともある、その原因は母がとある管理外世界の狩猟先住民であるからでありその血筋を色濃く引いているようだ……追記・単純な戦闘能力は地上本部全魔導師のトップに君臨する』

地上本部最強のストライカー

その力は剣を極めたシグナムや圧倒的破壊力を誇るはやて、なのはやヴィータ、そして最速と謳われるフェイトとは全く違うベクトル何もかも立ちはだかるものを全て叩きのめす突破力と白兵戦能力！！

「おああおあああ！！」

「くっ！！なんという力だ……！」

シグナムを押すだけの圧倒的な剛力

（これでふつとばんのか！？流星は最強レベルだけはある！）

トータスも驚愕していた

自らの剛力で吹き飛ばないシグナムに驚いた

フツと手応えが消えた

シグナムが飛翔したのだ

トータスは内心焦った

空戦ランクはある

だが本分はあくまで『翔べる魔導師』なのだ

空中戦は絶対的に不利

しかし容赦なくシグナムは高速移動から攻め立てる

つまり……鈍重なトータスには厳しい

ならば……勝つために何をする？

答えは1つしかない

シグナムは異変を感じた

何かがおかしい

鈍重なトータスに向けて空中からの飛行斬撃を繰り出していたがどうも手応えが少ない

（ダメージを最小限に流している？だがなぜ反撃しない？）

再び斬撃を繰り出そうと急降下した時

「捕まえたアアアアアアアアアア！」

ガシリと腕を捕まれた

「なっ！？まさかこれが狙いか！？」

トータスが取った手段は自分にとってベストのタイミングで捕獲し自らの領域に引きずり込む事

相当な大博打に近い

というか普通はやらない

やるとしたらカウンターを狙うくらいだ

「炎……爆……！」

鎌を背中に差し、掴んだ左手はガシリと握り、右手に焰が宿る

（炎熱系か！？）

身構えシールドを張るシグナム

「撃……鉄ツツ……！」

拳がシールドにぶつかり……爆発した

「はぁ！？炎爆かいな！？」

はやてが驚く

単純な破壊力なら電気を軽々と上回る貴重な変換資質だがコントロールが以外に難しいのだ

煙が晴れた

「…終わったか？」

トータスが手を下ろした時だった
ウッスラと残る煙の中から巨大な炎の刃が飛び出しトータスを呑み
込んだ

「ぐふっ…流石にあのストレートは効いたが…この紫電一閃はどう
だ？」

シグナムはほぼ確信していた
騎士…というかあのバケモノは立っていると
そして言葉通り

「ああああおおああ!!」

雄叫びを上げて健在だった

「馬鹿げた耐久だな…始めて合うタイプの騎士だよ全く」

シグナムは剣を構え直した

カートリッジをロードする

剣に炎が宿る

トータスを見る

紅い…紅い巨大な刃が生成されている

どうやらこの一撃で終わるらしい

「…………紫電!!」

「…………気刃!!」

お互いが獲物を振り抜いた

「一閃ッッ!!!!!!」

紫の刃と紅の刃が激突し拮抗する

そして中央で炸裂した

被害はお互いにならない

「引き分けてどこか」

トータスが言う

「そのようなだ：礼を言う、まさかここまでの使い手に会えるとは」

「それはこっちも同じだ、今後とも頼む」
2人でガッシと握手を交わした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737m/>

死神騎士の6課の日々

2011年7月3日06時26分発行